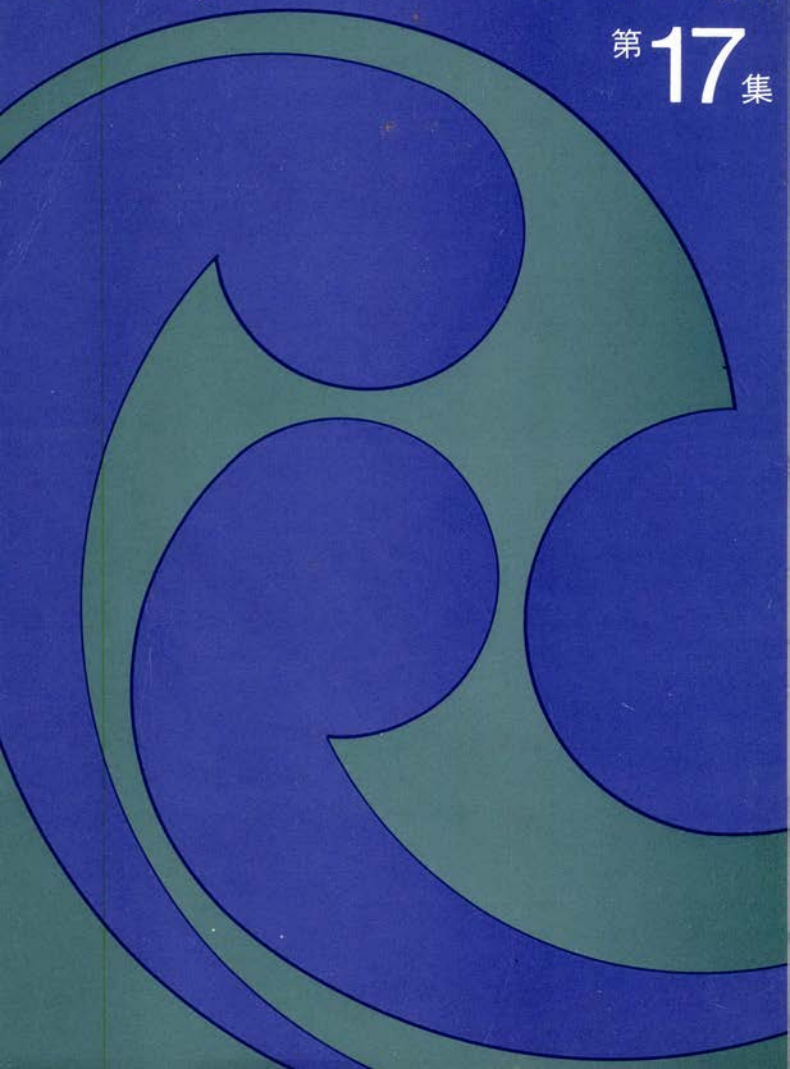


日本への回帰

第17集



大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会
編

日本への回帰 (第十七集)

—第二十六回学生青年合宿教室(阿蘇)の記録より—

は し が き

松陰はその「獄中問答」の中で「太平尚ほ久しかるべし。悲しいかな。」と書きつけてゐる。勿論これは松陰の激しい逆説であつて、妥協と偷安の上なきづかれた「太平」が、国民の精神的活力を摩滅させてゆく現状を痛憤した激語に外ならない。

今こゝに二つの資料がある。一つは総理府の発表した「青少年白書」である。十五歳から二十四歳までを対象としたこの意識調査で、生活に関する満足度は、積極、消極の違いはあれ、七八・三%の高率を示してゐる。大部分の青少年にとつて、現代の生活は快適なのだ。これは経済企画庁が発表した、現在のまゝの成長率が続けば、紀元二〇〇〇年には、日本の一人当りのGNPは、二一、五一〇ドルに達し、アメリカを二二%上まはつて世界第一に達するであらうといふ楽天的予想とも無縁ではない。自虐症に罹つた一部の学者の言説とは逆に、今や日本は世界が注目する経済大国にのし上つてしまつた。

もう一つの資料は、昨年末に警察庁の発表した非行少年の数である。五十六年度の刑法犯少年（十四歳—十九歳）の数は十八万七千人に達し、一千人中一八、七人の比率で、成人世代の一千人中約三人に比すると、六倍以上の高率であり、凶悪化、低年齢化が顕著であるといふ。

この二つの資料は、戦後が獲得したものを、失ったものを、誠に象徴的に示してゐる。獲得したものは、諸外国が羨望するやうな豊かな物質であり、失ったものは豊かな心である。岡潔先生は、それを「日本の情緒」と言はれた。それは、日本人といふ魚が、その中に住む水のやうなもので、その水が濁ると日本人は死んでしまふとまで先生は極言された。こまやかな人情、自然への愛、気高いものへの献身、総じて日本人の默契であつた美徳は、根こそぎに破壊されてゆく。その原因はたしかに、高度成長期以後のすさまじい社会の変貌にもよるだらう。核家族化の現象が、青少年の孤立化を深め、成熟加速現象といはれるやうな心身のアンバランスが、方向を失つたエネルギーを暴発させてゐるともいはれる。価値観の多様化といふ名のもとに、社会の道徳的規制力が急速に弱まったともいはれる。それは、アルビン・トフラーの言ふやうに、農業社会、産業社会を経て、今や「第三の波」の波がしらが寄せ始めてゐると文明史的に説明することもできよう。しかし、日本の青少年問題には、そのやうに一般化されることでは説明できぬ、特異な原因がある。

それは、敗戦が日本人の心に刻みつけた深い傷である。具体的には戦後の思想界、教育界に宗教的ドグマのやうに根深く喰ひ込んだしまつた「社会主義志向」だと言ひかへてもよい。ポーランドでは、昨年十二月十八日、ヤルゼルススキの率ゐる救国軍事評議会が、いはゆる「自主管理労組・連帯」の自由化の動きを一挙に圧殺した。かつて、ハンガリー、チェコで行はれ

たと同じパターン、容赦ない苛烈な弾圧である。「連帯」の指導者の一人は、「ソビエトの政治とイデオロギーの残酷さは病的だ」と言ったといふ。さういふ疑ひない事実を眼前につきつけられながら、社会主義への幻想を捨て切れぬ日本の知識人の心理は、どこか病んでゐるとしか言ひやうがない。一連の教科書論争で、「権力の不当な介入」を呼号する人たちの執筆内容に、果して「イデオロギーの不当な歪曲」はないのか。少し仔細に点検すれば、社会・歴史・国語等の人文系の教科書は、濃淡の差こそあれ、左翼イデオロギーの橋頭堡の観を呈してゐるではないか。歴史や現実の暗部のみをとり出して、さながら祖先の罪悪史、反逆史を教へるやうな教育が、世界に開かれた創造的な人材を生み出す筈はないであらう。

合宿教室では御老齢にもかゝらず、斎藤忠先生は情熱を傾けて、国際情勢を分析して、われわれの覚悟を促され、深い学識と憂国の志に支へられた村松剛先生の、歴史についての御講義から、われわれは多くのものを学ばせていただいた。その上本書に原稿の掲載を許していただいただけでなく、両先生とも御心のこもった御加筆をいただいたことを紙面をかりて深く感謝したいと思ふ。

昭和五十七年二月十一日

目次

はしがき	1
一、学問と人生	
現代青年の課題——私達の心に欠けてゐる祖国日本への思慕の情の回復を——	
福岡県立三池高等学校教諭 志賀建一郎	3
「和」の精神——日本の思想を貫くもの——	
福岡県立修猷館高校教諭 小柳陽太郎	21
「内に思ふことある者は、外に感じ易し」——吉田松陰と黙霖の往復書簡から——	
九州大学医学部五年 長澤一成	41
「長寝しつるかも」——世界に誇るに足る日本民族再生の道は——	
国民文化研究会理事長、亜細亜大学教授 小田村寅二郎	63
一、講義	
急変する国際情勢——祖国日本の明日を憶ふ——	
国際政治評論家 齋藤忠	87
歴史に学ぶ——明治維新と現代——	
文芸評論家 村松剛	125
一、短歌創作	
短歌創作の意義	161

短歌創作批評……………福岡教育大学教授 山田輝彦……………179

一、講 話

終戦の御詔勅……………農林漁業金融公庫副総裁 小田村四郎……………207

ソヴィエト抑留の体験……………亜細亜大学教授 宮脇昌三……………212

桑原暁一君のこと……………元日特金属工業常務取締役 加納裕五……………217

お話したい二つのこと……………高千穂商科大学教授 高木尚一……………222

一、青年研究発表

教員生活における一つの体験……………福岡県立福岡農業高校教諭 小林至……………227

瀬上安正先生のお言葉……………熊本市立花園小学校教諭 吉永美子……………237

先人の心にふれる道……………日本興業銀行資金部 小柳志乃夫……………247

一年のあゆみ……………早稲田大学政経学部三年 斎藤勝……………257

合宿教室のあらまし……………九州大学工学部四年 松井哲也……………273

合宿詠草…………………………303

あとがき…………………………318

八 国民文化研究会関係図書目録

■ 学問と人生

現代青年の課題

—私達の心に欠けてゐる

祖国日本への思慕の情の回復を—

福岡県立三池高等学校教諭 志賀 建一郎



元寇古戦場・博多湾（中央右が志賀島）

戦後教育についての私の体験

現代青年の精神構造

祖国日本への思慕の情

表題に「現代青年」といふ言葉をつかひましたが、私は昭和二十二年生れの三十四才、学生の皆さんとは、ほぼ一回り年令が違ふものの、戦後に生れ育ち、戦後の教育を受けたといふ共通の体験を持つ者として、私と皆さんをひっくりかえして、「現代青年」として考へてゆきたいと思つてをります。いま私達にとって、何が急務なのか、今後各自それぞれ異った人生を歩んで行く私達ですが、共通の問題として是非とも考へていくべき問題があるのではないか、さういふ気持で、主題を「現代青年の課題」としたのです。副題の「祖国日本への思慕の情の回復」といふのは、謂はば結論です。

戦後教育についての私の体験

まづ最初に、私の個人的体験から語りたいと思ひます。私は、今自分の過去を振り返つてみますと、戦後のさまざまな風潮を我が身にまともに受けてきたといふ実感がしきりに湧いてまゐります。私は現在福岡県大牟田市の三池高校で日本史の教師をしてをります。大学は文学部を卒業したのですが、これは大学の途中で転部をしたからで、最初は工学部に入学いたしました。工学部に入学したのは、特にあれこれと迷つて選択したといふのではなく、小さい時から希望でありました。今考へると大変懐しいのですが、小学生時代、私は発明家になるのが夢

で、特にエジソンを尊敬してゐました。ロボットを主人公とした漫画が流行しはじめたころで、幼稚なロボット製作などに精を出してゐました。今の子供達のマイコンブームなどと比較しますと程度の低いものですが、いろんな工夫をこらして楽しくやってみました。当時他に尊敬する人物としては、医学の北里柴三郎・野口英世・リンカーンなどを思ひ浮べてをったやうです。単にこれだけのことなら、皆さんにお話しする価値もないのですが、実は最近戦後教育の出発点に関して調べてゐましたところ、次のやうな文章を見出し、愕然とする思ひがしたのです。それは、昭和二十一年五月に文部省が出した「新教育指針」と題するもので、「これからの教育はどんな人間をつくるべきか」といふ章に「科学者としてのキューリー夫人、医学者としての野口英世、織物機械の発明家としての豊田佐吉、電気王といはれるエジソン、種痘の発見者チェンナーなどが、子供達の新しい理想でなければならぬ」と記してあります。多少の出入りはありますが、今にして思へば私の尊敬する人物は、正に官製の「文化国家建設」に益する理想的人間像の枠の中にあつたのです。謂はばその掌の上で私はロボットを作つてゐたのでした。勿論右に列挙された人物は、それぞれ立派な人達ばかりで、批判すべきことではないのですが、問題は文部省が行つた人物選択の偏りです。五名の人物は凡て自然科学の分野に属する人達ばかりで、軍人は勿論のこと、政治家も、思想家も宗教家も篤農家もそこには見出すことが出来ません。戦後の復興が至上命令で、その為に自然科学の発達を促すといふ意図が



中心になったためにこのやうな事になったのでせうが、二千年の長い日本の歴史を無視したこの人物選択は、余りに異常ではないかと思ふのです。かうして戦後の教育は、そのスタートから、過去の歴史と断絶したところから始まったのです。

この事は勿論、G・H・Qの意図するところであって、マッカーサーは戦後の諸改革の宣言とも言ふべき、幣原首相への「五大改革指示」（昭和二十年十月）の冒頭で「ポツダム宣言の達成によって日本国民が数世紀にわたって隷属させられて来た伝統的社会秩序は匡正されるであらう。」と述べてゐます。まことに傲慢な言葉と言はなければなりません、この冒頭の言葉につづいて、五大改革の指示があり、その三番目に「より自由主義的教育を行ふための諸学校の開校」といふ項目があるのです。かくて戦後の教育はそこに敷かれたレールの上をひた走り、走って現在に至ったといへませう。

文部省の教育指針が出された翌二十二年三月三十一日に教育基本法が制定され

ました。この法律が今日に至る迄、日本の教育の基本になってをり、そこには多くの問題点を含んでゐるのですが、ここでは、三月四日に閣議決定された原案が、どう修正されて議会で提出され議決されたのか、両者の相違点について二つの点を明らかにしておきたいと思ひます。まず第一点は前文です。

閣議決定案 「∴普遍的にしてしかも個性豊かな、伝・統・を・尊・重・し・てしかも創造的な文化をめざす教育を普及徹底せしめねばならない。」

基本法 「∴普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならぬ。」

一読して明らかかなやうに、「伝統を尊重して」といふ重要な一語が省かれてをります。これがいかに重大な変更であるかについてはあれこれ申し上げるまでもないと思ひます。さらに、「創造的な文化」といふ言葉が、「文化の創造」といふ文に変化してゐますがこれは、「伝統」の語を省いた為に対句が成立しなくなつたのでとつた処置でせう。しかしそれにしても実に良い加減な言葉の扱ひ方だと思はれます。

次に第二点は「宗教教育」の項です。

閣議決定案 「宗教的情操は、教育上これを重視しなければならない。」

基本法 「宗教に関する寛容の態度及び宗教の社会生活における地位は、教育上これを尊重しなければならない。」

これも又重要な変更です。閣議の案に記されてゐる「宗教的情操」の中には当然祖先を敬ひ、目に見えぬ神仏を敬ふなどの、人間の内心の自然の情を涵養しようといふことがふくまれてゐるはずですが、基本法では宗教を外的なものとして第三者的立場からの寛容の態度を尊重するといふやうなことに、変つてしまつてゐる。いはば教育的見地から、社会政策的見地へと變つてしまつたとも言へませう。一見同じやうに見えますがこの二つは実は全く別物なのです。

帝国議會では、衆・貴兩院とも政府原案は無修正で可決されてゐますので、この変更はそれ以前に行はれたと思はれますが、その間に枢密院の諮詢を経てをりますので、あるひはそこで變つたのかもしれない。とも角、何物かの力が働いてこのやうに修正されてしまつたのです。ここで抹殺された「伝統の尊重」と「宗教的情操の重視」とは、正に教育の根幹とも言ふべきものでせう。もっともこれらの事項が、立案者の頭に最初から浮ばなかつたのであれば、それは立案者の不見識が笑はれるだけでせうが、既に閣議決定を経た後に変更されたといふのは、不見識では済まされないものがあるといへませう。そこには単に注意深く、意図的な罣が仕掛

けられてゐると言つても言ひすぎではないと思ひます。

私の少年期の体験談から、話が広がって参りましたが、私をはじめて精神的なショックとも言ふべきものを受けたのは、高校三年生の冬の頃だったと思ひますが、友人に誘はれて、明日登壇されます小柳先生のお宅で、第十回目のこの大合宿で講演された岡潔先生の記録テープをお聞きした時です。題は、「日本の情緒について」といふものでした。そこで先生は、日本人には日本人独自の情緒がある。それは、日本の歴史の中で「死を見ること帰するが如く」に死んで行つた先人達の姿を見れば分かる、と述べられ、走水の海に身を投げられた倭建命の妃、弟橘比賣の命、自ら命を断つて皇位を兄、(即位して仁徳天皇)に譲られた菟道稚郎子、自殺せんとして薬を飲み、死ぬ前に「大いなるこの静けさよ天地のときあやまたず夜は明けにけり」と詠んだ近代の女流歌人の三名を挙げられました。私はそれまで、「日本」とか、「情緒」とかいふ言葉を改めて考へたことは、全く無かつたのですが、それだけに、テープから流れる岡先生の言葉が、実に新鮮で、目の覚めるやうな心地で聞いてをりました。そして語られる内容も、私にはその一語一語まで本当に良く分かる気持がしたので。今から考へてみれば、先に述べた、教育基本法によって抹殺され否定された日本の歴史の美しさが、そのままに、深い思ひをこめて語られたことのやうに思へます。

私の体験をもう一つお話しします。今でこそ非武装中立論と言つても、余り人気はありません

んが、以前はこのやうな議論は青年たちに大きな影響を与へてゐました。私は高校時代に、誰の影響といふこともなしに、いつの間にかその風潮の中に入り、その立場に立って友人達ともよく議論をしてゐたことを覚えてゐます。多分、マスコミ等を通じた、世の風潮全般からの影響だったのでせう。そのみならず、日清・日露戦争以下、近代の全ての戦争は誤りであり、日本は例へて武力で支配されても戦争は避けるべきであつたと考へてゐました。かうして人命尊重といふことに対する、一種の、正義感を私なりに感じてゐたのです。大学に入學した後、私はこの国民文化研究会につながる信和会といふサークルに属してゐましたが、大学内で行はれた合宿でこのやうな立場に立って意見を發表したこともありませう。その時は先輩や友人達から随分批判されましたが、何故誰も自分の考へを分かつてくれないのか、不満に思つてゐました。今思つてみますと、当時の私は何かを「考へて」ゐたのではなかつた。考へるといふよりも、そのやうな議論の仕方を、たまたま身につけてゐたとも言ふべきだつたやうに思ひます。

そのうち、自分でも、徐々に自分の議論の仕方はおかしいと思ふやうになりましたが、そのきっかけは、福田恆存先生の一連の平和論批判の論文を読んだことであつたと思ひます。又、その後幕末の維新の志士達の遺文を読んだことも、この問題と関連して大きな意味がありました。特に黒田藩を脱藩、勤王の志士として東西に奔走した平野国臣の行動には強く惹かれまし

た。国臣は、若い頃より国学を学び歌を詠み、有職故実の研究をして古い時代の武士に憧れ、異様な服装をしてゐたといふ、一風変つた趣味人風の傾向を持つ黒田藩の志士役人でしたが、ペリー来航後脱藩して、真木和泉守や長州藩士をはじめとする天下の志士達と交り、京都尊攘派の一翼を荷ひます。文久三年、孝明天皇を擁しての大和行幸から倒幕へといふ計画が、八月十八日の政変で破れましたが、国臣はそれ知らず既に義挙の旗を掲げて立ち上つてゐた大和五条の天誅組の同士に連絡に走ります。その後長州に戻つて同士の秋月藩士戸原卯橋らと共にかねてからの計画に従つて、但馬生野に於て義挙の旗を掲げるのです。しかしこの義挙も失敗に終り、同志は四散するのですが、その逃亡の途次、国臣は捕へられて京都の獄につながれ、後禁門の変の混乱のさ中に遂に獄中で殺害されてその生涯を閉ぢました。計画は次々に破綻していくのですが、その中でとつた国臣の行動に私は非常にひきつけられました。たしかにその行動は無謀とも言へるものですが、同士が次々に倒れて行く中での彼の行動は、私には、まるで覚悟して死地に赴いて行つたことのやうに思へてなりません。かつて岡潔先生の「死を見ること帰するが如し」といふお話の中でそこに重大なものが秘められてゐることに気づきながら、まだ充分には感じとれなかつた生ま生ましい人間の生き方をその時はじめて実感し得た思ひがしたのです。時代の動きを黙視し得ず、日本の将来を思ふが故に自ら覚悟して死地に赴くといふこの国臣の行動を見る時、私には、「人命尊重」などといふ言葉の思ひ浮ぶ道理

も無く、そのやうな言葉がいかに実体の伴はない空疎なものだといふ思ひが痛切にいたしました。

このことは、自ら日清・日露戦争以下の戦ひを見る目をも養つてくれたと思ひます。これらの戦争は一般に言はれてゐるやうに単なる侵略戦争にすぎなかつたのか、その間の戦ひに、様々の思ひを抱き乍らも、覚悟して戦地に赴き斃れた人々は、犬死をしたのか。誰かにだまされて死んだのか。僅かに残された遺文を通して、そこに感じられる死といふ嚴肅な事実をそのやうに解釈してしまふことは到底許されぬことだ。私には次第に目の前の鱗が落ちるやうにそのことがはっきりわかつてきました。これらのことを学び得て、私は初めて、物事を考へたり、歴史を考へる出発点に立った心地がしたのです。たしかに戦後の教育には何か大切なものが欠けてゐた、物事を考へ、生き方を定めていく上での謂はば核になるべきものが欠けてゐたのです。そしてこのことは、戦後教育の積極的な面がいかに強調されやうともやはり致命的な欠陥だと思ふのです。

最後に、非武装中立論が現代の青年たちの心にどのやうな影響を及ぼしたかについて一言ふれておきませう。私はこのやうな議論は、結局、青年が国を守るといふ命題に直面することを妨げた。さういふ働きをしてきたと思ふのです。国を守るといふ具体的な人生経験のその一手前で議論することによって、ついにその先に進み得ない。このやうな精神構造を青年の心に

植ゑつけたと言へるのではないかと思ひます。たしかに現在はこのやうな議論はあまり相手にされなくなつてゐることは先に述べた通りで、人々の考へは随分現実的になつてきてゐるやうです。しかし例へ自衛隊の現状を是認する声が国民議論の八割に達してゐるとしても、ものそのものに直面しないで一步身を引いたところで議論するといふやうな精神構造自体には大きな変化は起こつてゐないのではないでせうか。時代の影響を受けて、今日風の議論が攻守所を代へて続いてゐるにすぎないと思へるのです。

現代青年の精神構造

私はいつちも高校生に「日本と私」といふ題で、作文を書かせることにしてゐます。すると大部分の生徒が、「日本の国が好きだ」といふ趣旨の文章を書きます。どこがそんなに好きかといふと、平和で豊かで自由だといふ。その他に多いのは四季の移り変りに見られるやうな自然が美しいからといふ意見です。一つ一つ尤もな意見だと思ひます。このやうな考へ方は、現代の青年の最も平均的な、一般的な感じ方と言へませう。しかも彼等は、現在のこの太平の世の中が、「当然、永遠に続く筈である」といふことを何一つ疑ふことなく生きてゐるのです。しかしこのやうな認識は彼等にとってさうあつてほしいといふ願望から生れたといふよりもそれ

以外の可能性を全く考へようとしなさい、いはば思考停止の状態が生んだ認識だとも言へるので。さらにこのやうな考へは自分では意識しないであらうかもしれないけれども結果的には、米国やソ連に責任をとってもらはうといった、甘えきった態度にもつながるのです。かうして現代の青年の精神構造は、世界で起つてゐる様々な現実を直視して、自分達の生き方を考へるといふやうには働かない。さういふ形になつてゐると思ふのです。

近年、世界の各地で起つた戦争・事件・内乱は、枚挙にいとまがありません。そして、そこでは、現実に私達と同世代の青年達が銃を執り、戦ひ、斃れてをります。しかし残念乍ら、私達には彼らの声は直接には響いてきてゐないのです。先日、米国のミッドウェー号が横須賀に入港した時に、反対デモが起りました。そのデモを街頭で見てゐた乗組員の若い水兵が、突然「自分達は君達の国を守る為に来てゐるのだ。それが分からないのか。」といった意味のことを叫び出し、涙を流してゐたさうです。それを聞いた時私は、「分からない」のはデモに参加してゐるものばかりではなく、多くの日本の青年が分かつてゐないのだと思つていた、まれないやうなおもひがいました。又、文藝春秋誌が、ミッドウェー船内への直通電話を利用して、乗組員へのインタビューを試みてゐます。その中に「あなたは日本の為には戦ひますか」といふ、思へば実に失礼な質問を發してゐるのですが、その失礼な質問に対しても乗組員ははっきり、「戦ふ」と答へてゐるのです。日本の青年の意識と比べて何といふ大きな違ひがあ

るか、問題は実に大きいと思ふのです。

世界の青年達が直面してゐる国家の存続に対する危機感、戦線に参列してゐる青年達の心情を、私達はどうしてこれほどまでに理解し難いのか。それについてはいくつかの理由もありませう。多くの戦争が、宗教的、イデオロギー的、部族対立的、領土的原因を有するのに対し、日本に於いてはそれらの危機要因が希薄であること、又、戦争に参加してゐる青年達の生の声や心情を述べた言葉を聞くことがないこと等が考へられます。しかしそれよりも重要なことは、先に述べた私達の思考停止の精神状態が、世界の青年がいま直面してゐる現実を自分のものとして考へる余地を失はせたといふことだと思ひます。私にとって、最近最も衝撃的であつた事件は、英国内の北アイルランドをめぐる内乱で、カトリック系の若い兵士達が、次々に絶食して行つたことです。日本でもハンストと称するものが時折行はれてゐますが、その多くはショー的なもののやうですし、ドクターストップがかかるまでといふ了解の裡で行はれてゐますので、彼らの真意を半信半疑の目で見てゐましたところ、六十余日の絶食で数人の兵士が つぎつぎに死んでいったといふのです。私は、その時かつて維新の志士達の死を実感した時と同じやうな、厳粛な思ひにかられました。

私達の心の中に牢固として在る、「日本は、平和で豊かで自由な国である」といふ感覚が、真に生きて来る為には、今の日本が、過去、多大の犠牲が払はれる中で、先人の苦闘により作

りあげられたものであること、そして日本は世界の動乱のただ中で生きてゐるのであって、決して孤立して存在してゐるのではないといふことを私達が肝に銘じて学んで行く以外にはないと思ひます。

祖国日本への思慕の情

私達が、祖国日本の伝統から意図的に遮断された中で教育を受けて来たことは先に述べた通りですが、ここではもう少しまとめて述べてみたいと思ひます。私達の歴史意識は、次の三つの点で歪められてゐます。一つは、過去の歴史を階級的に分断することによって国家が一つの有機体として発展して来た事実が捨象され、為に、英雄、偉人が抹殺されたこと、二つは、大東亜戦争に至る近代の戦争が、一方的な侵略として罪悪感をもって語られて来たこと、三つは、建国以来の歴史が、各種の王朝交替論によって、科学的歴史といふ名のもとに歴史そのものが引き裂かれ、或ひは邪馬台国論争のやうに、パズルの問題意識が流行することによって、古代史に対し、豊かなイメージを持ち得なくなつてしまつたことです。これらの原因によつて、私達の歴史意識、それに基く国家意識は実に不毛なものとなつてゐます。

例へば私は現在歴史の教科書として、山川出版の『詳説日本史』を使用してゐますが、そこ

で日本の建国はどのやうに記されてゐるか、紹介しておきませう。

「この間の倭人の社会について、文献でははっきりしたことがわからない。しかし、大陸の情勢を背景にして、おそくとも四世紀前半には、大和朝廷によって西は九州北部から東は中部地方におよぶ地域に政治的統一体がつくりあげられていったとも考へられる。」

今日風の客観的記述と称するものの見本のやうな文章です。しかし、「倭人の社会」とは一体何たる表現でせうか。多分著者は、「日本人の社会」と表現することを意識的に避けたに違ひありません。理由は良く分かりませんが、考へられるのは、当時はまだ日本といふ国号が定まらなかつたからといふことでせう。もしさうであるなら、国号の成立する以前の日本の歴史は、「倭国史」建国以前の歴史は、「倭人史」とでも称する他ないでせう。全くひどい表現だと思ひます。この著者は、何かを恐れてゐる、何かにこだはつてゐる、としか思へません。しかも、建国の歴史について語られてゐるのに、神武天皇の名前は全く出て来ないのです。同じ著者による十年程前の旧版の教科書には、脚注に神武天皇のことが、記紀の伝承として記されてゐたのですが、これも意図的に抹殺されてしまった。まことにいい加減なことと思ひます。このやうなおかしな例は枚挙にいとまがないのですが、この辺でしておきます。

さて、今後、私達は何をどう学んでゆけば良いのでせうか。基本は私達が、自分の心を研ぎ澄まして、自分の心に強く訴へてくるものに耳を傾けることだと思ひます。そして、歴史を振

り返り世界の現実を直視して、自分はどうか生きるのかを、繰り返し自問して行くことだと思ひます。祖国日本の伝統の中にたたへられた情緒は、私達の外にあるのではなく、私達の内心に息づいてゐると思ひます。戦後の呪縛から、自らを解き放ったときに、私達は、自分が日本人だといふ痛切な思ひがこみ上げてくる筈です。祖国に対する思慕の情といふのも何か遠くはなれたものを慕ふといふのではなく、この内心にこみ上げてくる思ひそのものだと思ふのです。

「和」の精神

—日本の思想を貫くもの—

福岡県立修猷館高校教諭

小柳 陽太郎



龜山上皇銅像（福岡・東公園）

は じ め に
賢 と 愚
憲 法 第 十 条
歴 代 天 皇 の 御 心

は　じ　め　に

表題には「『和』の精神——日本の思想を貫くもの——」といふずるぶん大きな題をつけさせていたゞきましたが、短い時間ですので、ここではその中心をなす聖徳太子のことについて日頃思つてをりますことを若干お話させていたゞきたいと思ひます。

聖徳太子における「和」の精神といへば、すぐ思ひ出しますのは、憲法十七条の冒頭のお言葉「和を以て貴しとなす」といふ、有名な一文でせう。たしかにこのお言葉の中には、なみなみならぬ太子の御氣持がこめられてゐると思ひますが、このお言葉があまりにも人口に膾炙されてゐるために、特別の感動もなく、平凡にうけとる場合が多いと思はれます。さらにこのやうなお言葉を通して聖徳太子を思ひ出す時には、ともすれば何か聖徳太子といふ方を何一つ欠点のない人物であるといふやうに絶対化してしまつて、私達凡俗の到底近づくことの出来ないお方であるといふ印象をもつて接することが多い。従つて立派な方ではあらうけれども、何か遠い存在であつて、私達の心を身近に支へていたゞく方といふ印象はあまりないやうに思ふのです。

もっとも太子に対するさういふうけとめ方は実は私たちだけではなく、ずっと昔、たとへばすでに日本書紀の頃から行はれてゐたやうです。書紀が書かれたのは太子がおなくなりになつ

てから丁度百年目ですが、その間、すでに太子像には神秘のベールがかけられ、凡俗の世界とは大きな距離がつくられてゐました。例へば太子の御名前は正しくは「厩戸の豊聡耳の皇子」うまやど とよとらみ みこと申し上げるのですが、その豊聡耳といふのは非常に聡明な、どのやうなこともお聞きわけになる力をおもちだったといふほどの意味でせう。それを書紀では「ひとたびに十人とたりの訴を聞き失たあやまず能く辨わかへたまひ、兼ねて未然ゆづさきのことを知りたまひき」と書いてあります。一度に十人の訴へを処理されたといふやうに誇張し、未来のことを見通されたといふやうに述べられてゐるのです。さらに次の平安時代に出た『聖徳太子伝暦』といふ書物になると一段と超人間的なものとして神秘化され、偶像化されてゆく。勿論それは当時の人々の太子に対する深い敬慕のおもひから生まれた表現として大切にしてゆかなければいけないことだとは思ひますが、それが外面的にだけ受けとられてしまつて、単に神棚に祭り上げられるといふことになれば、先程申し上げたやうに、遠い、血の通はない存在になつてしまふ。それでは聖徳太子の本当のお姿は永久に私達の胸に蘇よみがってくることはないのです。

しかし聖徳太子といふ方は、そんな超人間的な、遠い存在であるどころか、実は誰よりも身近かな、誰よりも心の温かな、凡俗の心に一番近い方だったので。私はさういふ太子像を学び、さういふ太子像に迫つていかうとする場合には常々桑原暁一といふ方の文章を道のしをりと仰いでまゐりました。



この桑原暁一といふ方は皆さま御存知ではないと思ひますが、ずっと東京で高校の教師をしてをられた方、十年近く前に六十一歳でおなくなりになったのですが、無名ながら、日本思想史についての御研究には卓越した識見をもってとりくまれた方でした。その方に『国史の地熱』といふ一冊の書物がございますが、その一節を先づ皆さまと一緒に読んでみたいと思ひます。

賢と愚

「聖徳太子および親鸞の信は、あらゆる人間を、ひとしく凡夫として捉らえることであつた。」

「信」といふのは人生観の一番核になるもの、人生観を貫く一筋のものといふやうに理解していいかと思ひます。

「(太子および親鸞の信は)すべての人間は人間であることにおいてかわりがない。貴賤貧富賢愚長幼などの皮相の差別にかかわらぬ人間そのものを発見したのであった。人間としてみれば、みなひとしく共に煩惱具足の凡夫にはかならない。すべての外的差別は実に虚仮なるものであって、人間の価値はそれらによって規定されるものではない。万人に普遍する真実なるものによってのみ、人間の価値が与えられるものである。このことを太子は『世に生まれながらに知るもの少し。剋く念うて聖と作る』(憲法十七条)と言いあらわされた。」(六頁)

「虚仮」とは上っ面だけのむなし、仮なるもの、人間の価値はそのやうなものによってなく、「万人に普遍する真実」、それは真心といってもいい、誠といってもいい、さういふものによって与えられるといはれるのです。「剋く念うて聖となる」といふ憲法十七条のお言葉は、「この世に生れながらに人間の真実を知ってゐる者は少い。たゞ心をこめて、真実なものに心を深く寄せてゆくことによってはじめて『聖と作る』ことが出来るのだ。この世にははじめから聖人といふやうなものが存在するのではない」といふことでせう。そこには人間に対する深い洞察が秘められてゐると思ひます。特に「剋く念ふて」といふ言葉、その中には太子の深刻な御体験がこめられてゐると思はれます。

次に同じく『国史の地熱』の一節です。

「聖徳太子の維摩経義疏をあちこち拾ひ読みしていたら、経文の『心浄ク歡喜シテ賢聖ニ近

ヅク』を釈して、『人をして心淨く和悦して、愚に近づけば即ち憂苦を生ず』とあるのにぶつ
 かって我が目を疑った。」(十頁)

太子には三経義疏といって、法華経、勝鬘経、維摩経といふ三つの經典の註釈書があるので
 すが、桑原先生はその中の維摩経の註釈書を拾ひ読みしてゐたとき、維摩経の經典についてお
 書きになった太子のお言葉を讀んでわが目を疑った——何故なら太子のお言葉の前半、「人を
 して心淨く和悦して」といふところはすぐれた佛の教へにふれてゆけば心が淨らかになり、和
 み、そして悦びに満たされるといふことで、そこまでは經典の「心淨く歡喜シテ」の釈として
 よくわかりますね。ところが後半で、「愚に近づけば即ち憂苦を生ず」とは一体どういふこと
 か。後半は經典の「賢聖ニ近ヅク」といふ言葉の釈であるはずだ。それを太子は「愚に近づけ
 ば即ち憂苦を生ず」と述べてをられる。「賢聖ニ近ヅク」といふのを何故「愚に近づけば」と
 言はれるのか。それはどういふ意味だらう。桑原先生もわからなかった。しかししばらく思案
 を続けてゐるうちにこの不可思議な解釈の意のあるところにいくぶんふれえた気がしたとして
 次のやうに書いてをられます。

「賢聖に近づくといふことは、愚なるものに面をそむけて賢聖の仲間入りをすることではな
 い。愚と賢聖とは別々のものではなくして愚を愚として憂苦するほかに賢聖はない。愚はおの
 れの外にあるものではなく、おのれの内なる愚を愚とすること、そのことが実は賢聖に近づく

ことにほかならない。ここにぼくは経文注釈の筆をとりながらもたえずおのれの内面に向けられる太子の目なごしを感じる。」(十一頁)

賢聖と愚といふのは一寸見れば反対の概念のやうですね。しかし考へてみるとその二つは決して別々のものではない。「愚を愚として憂苦するほかに賢聖はない」——桑原先生はさう述べてをられます。自分の心の中の愚かさ、それをじっと見つめること、それ以外に賢聖はないといふのです。さう思へば愚なるものを離れて賢聖に近づく、といふことがいかに皮相な見方であるか。考へてみれば愚かな自分の心を見つめること深ければ深いほど、その人は賢聖に近づくのではないか。すなはち愚に近づくことと賢聖に近づくこととは決して二つではない。さういふ認識が太子をしてこのやうな注釈を書かせた、桑原先生はさう言はれるのです。

同じことを先生は次のやうな言葉でも述べてをられます。

「賢聖に近づく」と云うと、愚者とは手を切つて、自分だけ別の途を往く、と云うことになりかねない。それでは自他を分つことになる。そのことは太子のもっとも戒められたことである。賢聖と愚者とは別々のものではない。おのれの愚を自覚せるものがすなわち賢聖である。われこそ賢聖なりと自任するほど愚かなことはない。したがって愚に近づく」と心がいたむ、と云うのは、その愚は他人事とは思われぬ、と云うことであり、彼我共に愚者である、との自覚に促されて、共に賢聖に近づく」と云うことでなければならぬ。」(一六頁)

太子にとって一番大切なことは「自他を別たぬ」境地だったので。「彼我共に」、「共に」のところは傍点が施されてゐますが、「他とともに生きる」よろこびとかなしみ、それが太子の御思想の中核にある、桑原先生はさういふ見地から、一見不思議とも見える太子の御釈をこのやうに読んでゆかれるのです。

憲法 第十條

さてさういふ桑原先生の御考への基盤になるもの、それは憲法十七條の中の第十條の文章であらうと思はれますので、ここでその第十條の全文を皆さまと御一緒に読んでみませう。

「十、に曰く、忿を絶ち、瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ。人皆心有り。心各執有り。彼是とするときは則ち我は非とす。我是とするときは則ち彼は非とす。我必ずしも聖にあらず。彼必ずしも愚に非ず。共に是れ凡夫のみ。是非の理詎ぞ能く定むべき。相共に賢愚なること、環の端無きが如し。是を以て、彼の人瞋ると雖も、還って我が失を恐れよ。我獨り得たりと雖も、衆に従ひて同じく挙へ。」

憲法十七條といへば、最初にも申し上げましたやうに「和を以て貴しとなす」といふ第一条はよく知られてをりますが、この第十條は殆んど引用されることがなく、ご存知ない方が多い

と思ふ。しかし「和を以て貴しとなす」といふ言葉を支へてゐるもの、それはこの第十条に表現された人生への痛感であり、従つて第十条ぬきに第一条はあり得ないと思はれるのです。さういふ意味もこめて充分に味つて下さい。

最初の忿と曠、それはいづれも怒りといふ意味ですが、どちらかといへば忿の方が心にこもるやうな怒り、後の方がかっと目を見開いて怒るやうな外に現はれる怒りといふ意味でせう。さういふ怒りをおさへて、人々が間違つた道を行くのを見ても怒ってはいけない。人にはみんな心がある。そしてその心にはすべて執着心がある。それが現実なのだ。すなはち相手がかうだといふ時に何かそれにさからつて自分のことを主張したくなる、そして自分の存在を明らかにしようとする、人間には常にさういふ心理が働くのだが、「我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚にあらず」、自分が必ずしも正しいわけではなく、相手が愚かだといふわけでもない、「共に是れ凡夫のみ」、みな愚かな人間同士なのだ——太子はさういはれるのです。もっともかういふ言葉は、太子のどういふお気持ちから、どういふ痛感から生れたものか、それを偲びながら読んでいかないと単に、人間は皆愚かな存在にすぎないといふ知的な認識にとゞまつてしまふ、それではいけないと思ふのです。さういふ見方ではなく、この「共に是れ凡夫のみ」といふ言葉の中で「共に」といふ言葉がどんなに大きな重みをもつてゐるか、「是れ」といふ強め、さらに「のみ」といふ結びにこめられた思ひがどういふおもひから生れてきたか、それを

思はなければこの言葉の本当に意味するものは私達の胸にひびいてはこないのです。

太子はそのあと共に凡夫としての御痛感を、「相共に賢愚なること、みろがね鑲の端無きがごとし」といふ言葉で表現してをられます。鑲は耳飾りの輪、丸い輪ですから端がない。そのやうにお互ひに賢愚といふ差別なく一つの輪をなして生きてゆく、それが人生だと言つてをられるのです。かういふわけだから相手が怒つても、常に我が身をふりかへつて自分自身に間違ひはなかつたか、落度はなかつたかと省る、さういふ生き方をしなければならぬ。

太子はさう言はれたあと、この文を「我獨り得たりと雖も、衆に従ひて同じく擧へ」といふ言葉で結んでをられます。自分はこれでいい、正しいと思つても、皆と意見が違ふ場合には他の人と一緒に行動しなさいといふことでせう。だが一体この言葉の意味するものは何か、私は最初この言葉を聞いたときからどうにも理解出来ませんでした。いかに自らが凡夫であるといへ、自分が正しいと思つたことを捨てて、他の人と一緒に行動せよとはどういふ意味だらう。太子がさういふつまらない、附和雷同とでもいへるやうな妥協を勧められるはずはない。又近頃言はれる、所謂多数決原理といふものをおっしゃつてゐるとも思へない。私は長い間この言葉の意味することがよくわからなかつた。いまでもわかつたとは言へませんが、たゞ先程の桑原先生の教へなどに導かれて現在は次のやうなことではなからうかと考へてをります。

「我獨り得たりと雖も」といふ、その「我獨り得たり」といふ言葉にこめられた、或る傲慢

なひゞきに太子は敏感に反応されたのではあるまいか。先ほど太子がいかに「自他を別たぬ境地」を願ってをられたかといふことについて申し上げましたが、この言葉、なかでも「獨り」といふ言葉の中には「自他」を別つ明確な意識がある。太子はさういふ意識をきびしく指摘されたのではあるまいか。

勿論この世では自分だけで生きて行かなければならない場合も沢山あると思ふ。太子はそれまでも否定なさることは絶対にははずだ。たゞその時、自分はこれが正しいと思つてこの道を行く場合でも、「共に是れ凡夫」としての痛感がその人の心にとへられてゐるならば、自他を別たぬおもひがあたゝかくその人の心に流れてゐるならば、きっと皆と一緒にその道を行くことが出来ないといふ悲しみがあるはずだ。そのかなしみが心の奥深くたゝへられてゐるか否か、問題はそこにある。太子がこの言葉にこめられた真意はさういふことではなからうかと思ふのです。そこには生半可な、上づつた気持で「我獨り得たり」と考へるやうな思ひあがりに対するきびしい戒めがある、さうして皆とともに行く以外に道はないといふ人生への深い洞察がある。私達はそれをこの太子のみ言葉の中にしっかりと読みとらなければならぬのではないかと思ふのです。

このことと深い関連がございますが、これも同じ桑原先生の『日本精神史鈔』といふ書物の中に次のやうな一文がございます。憲法第十條に対する理解を深めるためにも、ここでは是非読

んでいたゞきたいと思つて、レジメに記しておきました。

「法隆寺の五重塔の美しさについては、自分などが今さら何も言うことはない。たゞ一ことだけ言うことが許されるならば、それは上求菩提、下化衆生の精神そのものである、ということである。」

「上求菩提、下化衆生」とは上に菩提—悟りの世界を求め、下、衆生を教化するといふことでせう。それは佛陀の生涯を貫く精神なのですが、それはそのまゝ太子御自身の悲願であつたのです。

「両の手に広く衆生を抱きつつ、急がず、あせらず、だんだんと衆生を上へ上へと引き上げて行くといつたらよいであろうか。またそれは『和』の形といつてもよい。太子にとって『和』とは相共により高きものを志向するといふことであつた。」（二三〇頁）

法隆寺の五重塔の美しさは太子の御精神の見事な表現であると思はれますが、桑原先生はその美しさを仰ぎながら太子の御精神を偲びつ「両の手に広く衆生を抱きつゝ」以下の文章を綴られたのです。この文章全体に、特にそのはじめの「両の手に広く衆生を抱きつつ急がず、あせらず、だんだんと衆生を上へ上へと引きあげてゆく」といふ言葉、なかでも「急がずあせらず」といふ言葉の中に、「衆に従ひて同じく擧へ」といふ憲法第十条の結語を支へてゐる情感が見事に表現されてゐるやうに思はれてなりません。

すなはち桑原先生のお言葉をかりれば「衆に従ひて同じく擧ふ」といふことは「両の手に広く衆生をいだいて、急がず、あせらず衆生を上へ上へと引きあげる」ことだったので。この「急がず、あせらず」といふことの中に人々に対する絶対の信がある、その信をぬきにしては太子の御思想は絶対に理解出来ないのです。自分さへよければいい、自分の人格を完成するにだけに心が動く、そのやうな「我れ獨り」といふことがいかにつまらないか、「他と共に」、「衆に従ひて」、——そこに太子の御精神のすべてがあるのです。

これもまた桑原先生のお言葉ですが、

「顔をこわばらせ、とげとげしい言葉、いな怒号をもって相手を威嚇しておのれのみ通そうとするのは人間のすることではない。人間の眞実、それはつねに和とともにあることを忘れないうようにしたい」(『国史の地熱』一二頁)

といふ一文も心にしみる文章です。特にその中の「人間の眞実、それはつねに和とともにある」といふ言葉はすばらしい。眞実は心と心がふれあったところにはじめて生れる。眞実といふのは何か目に見えないところに存在するものではないのです。

皆さまも現にこの合宿教室において友達同士お互ひの胸の中をさらけ出して語るときに、心と心がつながるといふ瞬間を実感されたと思ふ。さうしてそのやうに実感されたときに、眞実とか眞心とか誠とか、いろいろな美しい言葉を言葉としては知ってゐるが、それはかういふこと

だったのかと心の奥深くで納得されるはずで、それはお互ひが論争して、勝った方に真実があるといふやうなことは全く違ふ。目を光らせて議論して自分が相手を黙らせてしまったにしても、そこには何かむなし残る。さういふことは皆さまよくご経験なさることです。それは何故か、何故そこにむなしおもひが残るのか。それは端的にいへば議論の正邪と、真実の所在とは何の關係もないからです。なぜならもし論争に勝った方に真実があるとすれば勝った人はうれしい筈だ、しかしちっともうれしくない。心が動かない。それは真実といふのは心のつながりの中にしか生れないからです。心がばらばらになつたまゝの論争と、心のふれあふ語りあひと、その両方の間には決定的な違ひがある。そのことによくよくおもひをひそめて下さい。

「人間の真実、それはつねに和とともにある」それが、実は「和を以て貴しとなす」といふ憲法第一条の言葉の意味するものなのです。さう考へてゆけば「和を以て貴しとなす」といふこのお言葉は互ひに仲好くせよといふやうな御説教ではない。それは以上述べてまゐりました太子の御精神の、いはば集中的な御表現だといふことがわかつていたゞけると思ふのです。

だがこのやうな御精神は単に太子御一人の精神ではなかつた。それは日本の思想史を貫くものであり、なかんづく日本政治の中核をなす歴代の天皇方が、太古の昔から受けつがれてきた伝統だったので、桑原先生のお言葉をかりますと、「日本の国の真実、それはつねに和と

もにあった」ともいへませうか。歴代の天皇方はつねに国民との心の通ひあひの中に日本の国柄を守りつづけてこられたのです。天皇が念じてこられた国柄のありやうは一つの思想とかイデオロギーとしてではなく、国民とともに歩かれる天皇のみ心の中に、おのづからにして生れてきたものなのです。それがいはゞ天皇家の伝統として今日まで伝へられてゐるのです。あと残された時間でそのことについて少しふれておきませう。

歴代天皇の御心

さまざまになきみわらひみかたりあふも国を思ひつ民おもふため
天がした人といふ人こころあはせよろづのことにおもふどちなれ

この二つのお歌はいづれも孝明天皇の御製です。幕末のあのはげしい動乱のたゞ中を生きてこられた天皇が、どんなに国民とともによろこびそして悲しんでこられたか、その切実な御氣持が惻々として迫ってまゐります。幕末においてあれだけの激しい外圧の中で、国家が遂に分裂することなく統一を持續することが出来た、その決定的な要因は天皇の御存在にあると思はれますが、それはたゞ天皇といふ方がそこにをられたからといふことだけでなく、天皇御自身、すべての垣根を取りはらひ国民とともに喜びそして悲しみながら、生きてこられた、そ

ういふ方だったといふことが何よりも大切だと思ふのです。しかもさういふ生き方は孝明天皇に限らず歴代天皇に一貫したものでした。孝明天皇の御子様の明治天皇は生涯に十萬首に及ぶ龐大な量の御歌を残されてゐますが、そのどの御歌をとつてもすべて国民とともに生きてゆく、その切迫したお気持の中から生れたお歌なのです。例へば明治三十九年、日露戦争が終つた翌年の御製に

國のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて

といふのがありますが、淋しくくれてゆく秋空を遠くにながめながら、戦に散つていった国民のことに思ひをはせてをられる、それは国民との間に、文字通り肉親の情感ともいふべきものが通つてゐることをありありと感じさせないではをられません。この御歌に偲ばれるやうに国民とともに生きてゆく喜びと悲しみの中に天皇政治の眞実はあるのです。

さういふ御気持の端的な御表現として今上陛下が七十歳におなりになつた折によまれた四首の御歌のうち二首を御紹介しておきませう。

ななそぢ
七十を迎へたりけるこの朝も祈るはたゞに國のたひらぎ

よろこびもかなしみも民と共にして年はすぎゆきいまはななそぢ

歴代の天皇方の中で今上陛下ほど波瀾に満ちた人生を経験なさった方は少いと思ひます。特に一步誤れば亡国といふ、日本の歴史始つて以来の難局に身をさらして生きてこられた七十年の御生涯を偲べば、その間に経験された深い悲しみはいかばかりであつたか。それを思ふとこの二首の御歌は本当に身にしみます。陛下の御祈りはたゞ国の平和であり、その御生涯のすべてのよろこびとかなしみは民とともにあつた、国民のよろこびとかなしみはすべて陛下のよろこびとかなしみであつた、さうして七十年の月日が過ぎたと言はれるのです。「いまはななそぢ」——その「いまは」といふ言葉にこめられた、生涯をふりかへられた折の御感慨の深さはたゞならぬものがあると思ふのです。そこには天皇と国民が、あの十七条憲法の中にあつた「みろがね鑲の端なきがごとき」輪の中に、ともに生きてゆくといふ切実なおもひがある。太子が願つてをられた「和の世界」といふのは、天皇のこの深い大御心の中に国民すべてのおもひがすべてをさめられて、この地上にまさしく実現してゐるではないか。

天皇を中心とする政治形態とは何か。いろいろな解釈もあらうし、議論もあると思ひますが、私はいかに法的な分析を施しても結局その真髄にふれることは出来ないと思ふ。天皇政治とはこのやうな天皇と国民との心のつながりの中に実現する政治なのだ、この天皇を中心とする国民の和の中にこそ天皇政治の眞実はあるのです。

さういふことで申し上げたいことは多いのですが、最後にこのやうな天皇政治の本質を述べ

られたと思はれる大切な文献を一つだけ読んでおきませう。これは第百八代、江戸時代前期の後水尾天皇が皇子方におのこしになった御手紙、「宸翰御教訓書」と呼ばれてゐるものの一節です。

「いかにも御柔ぜん爽たきことにあり度事候。かみの慈悲過候へば下の怖おそれ候事なく候ゆへ、放埒ほうらつのもとと成候と申候者候。尤もつともさもある事候。何事も過たるはをよばざる道理ある事にて候へども、いかりは深くなりやすく、慈悲はすぎ候やうには成りがたく候故、其分別肝要に候。延喜の聖主は御顔色常にゑましく見えさせましまししとやらん候。其子細は人の物の申しよきやうにと覚おぼしめ召めしての御事の由候。返々かへすがへす柔和の相、御身体に尤為相応候事。」

いふまでもありませんが、当時は徳川幕府が大変な権力を握って皇室をがんじがらめに縛りあげて、皇室は狭い京都の御所の中に閉ぢこめられ、あらゆる力を剥奪されてしまつてゐたやうな時代でした。現に後水尾天皇は幕府の横暴にたまりかねて、「葦原やしげらばしげれおのがまゝとて道ある世とは思はず」といふ御歌を詠まれて三十四歳の若さで皇位をお譲りになつたのです。ところがそれほどの、血のにじむやうな御体験をおもちになりながら、お書き残しになつた御言葉はさういふ御境遇とは全く思はれないほど実に柔らかな、あたゝかな御言葉なのです。わかりやすく口語訳にすれば次のやうになるでせう。

「是非とも心やわからかに人に接してほしい。（爽ぜんは柔と同じくやわらかいといふことです）

もつとも上に立つ人の慈悲が度を過すやうなことがあれば、下の人が怖れることがないやうになるので秩序が乱れることになりかねない。たしかに何事も過ぎたるは及ばざるがごとしといふことだが、人の心の動きを見れば、怒りはどうしても深くなり易いが、慈悲といふのは度をすぎすことにはなかなかないものだ。そこらのことをよくよく考えてほしい。延喜の聖主、すなはち醍醐天皇（平安のはじめ、古今集が撰ばれたころの方で、ずっとのちのちまで最も理想的な天皇さまとして仰がれた方です）は、いつも御顔はにっこりと笑ってをられた。それは臣下の人々がものを申し上げるとき、言ひやすいやうにとお思ひになつて、いつもさういふ表情をしてをられたといふことである。かへすがへすも柔らかな相をもつてをられることが、御身体にふさはしいことのやうに思はれます。」

この柔らかな表情といふのが、聖徳太子のおっしゃる「和」の世界的な表現であることはいふまでもありますまい。常に柔らかに、相手の心を察しながら、全体の調和に心を砕きながら生きてゆく、そこに古代から一貫して現代に及ぶ天皇の御姿があるのです。そしてその集中的な表現として聖徳太子の十七条憲法があるとすれば、この十七条憲法こそ日本政治思想史の第一頁を飾るべき文献ではないか、最初に申し上げましたやうに「和を以て貴しとなす」といふ。あまりにも有名なことばは有名なあまりかへって見過されがちですが、そこには日本思想の核心が表現されてゐることを肝に銘じなければいけないと思ひます。

「内に思ふことある者は、

外に感じ易し」

—吉田松陰と黙霖の往復書簡から—

九州大学医学部五年

長 澤 一 成



宮崎宮楼門

は　じ　め　に

松陰と黙霖との出会ひ

「内に思ふことある者は、外に感じ易し」

安政三年の往復書簡

孝明天皇と松陰

は じ め に

昨年、雲仙での合宿教室が終つた後、私は、友人達と連れ立って、萩の吉田松陰の墓處に参りました。折から、松陰生誕百五十周年とかで、様々な催物が開かれてゐたやうです。先づ、松陰神社に参りますと、以前訪れた時とは、打って變つて、駐車場は、觀光バスで埋り、境内は、大變な人出で賑はつてゐる。又、境内の傍には、蠟人形館や展示館のやうなものも出来、スピーカーから、低俗な音楽と呼込みの聲が流れて来る。人々は、そのやうな中で、列を成し、恰もベルトコンベアに乗せられてゐるやうに、ぞろぞろと歩いて廻つてゐました。笑ひ聲や歡聲が、何處からともなく聞えて来、皆、楽しさうにしてゐましたが、私は疲れて、樹蔭のベンチに腰を下して、無氣味なとさへ思はれるやうなその有様を眺めてをりました。その後、私達は、松陰神社を後にして、其處から數百メートル登つた山の中腹にある、松陰の墓處に参りました。大きな境内と立派な社を持つ松陰神社に較べ、墓處は、二米四方程の簡單なものです。が、兩側の花筒には、瑞々しい菊の花が活けてあり、邊には、線香の煙が漂つてゐる。神社から、僅か數百米の處だといふのに、御参りに来る人は數人しかをらず、神社の低俗な喧騒とは全く無縁な、静寂そのものといった感じがしました。献花も、松陰を心から慕ふ、土地の人

や、此處を訪れる人々が、折りに觸れてさ、げられたものなのでせう。下界の喧騒と墓處の静寂。瀟灑な墓に活けられた菊の花。その簡素で清潔な様に、漸く心洗はれる思ひがして、帰つて参りました。

最近、友人や後輩の方々と話してをりますと、歴史は面白いといふ人が、随分、多くなつて来た。世も歴史ブームとかで、テレビや書物も、歴史に題材を得たものが、よく取上げられてゐる。慥に、茶の間で、ゴロツと横になつて見る歴史ドラマは面白いかもしれない。煎餅でも啣り乍ら讀む歴史小説は、難解な古典よりも遙に容易に理解し得るものかも知れない。しかし、歴史に對するそのやうな態度には、何か重大なものが缺けてゐると思はれてなりません。恰も、松陰神社で、楽しみに騒いでゐた人々が、自己の現實を忘れ去つた、觀光といふ世界で、歴史にふれてゐると錯覚してゐる如く、其處には、自分自身の存在が脱落してゐるので、自分が、如何に生くべきかといふ問ひが、立現はれて來てゐないのです。歴史は慰みや娯樂ではない。作者と讀手との共感の世界であり、その共感から、自づと自分の生き方が定つてゆく。その喜びが、歴史に學ぶ喜びであらうかと思ひます。

松陰と黙霖との出會ひ



今日は、吉田松陰・宇都宮黙霖の往復書簡を巡って御話申し上げる譯ですが、松陰の生涯に就いては、『日本への回帰―十六集―』にも書いてをりますので、此處では詳述致しません。たゞ、黙霖の生ひ立ちと松陰との出會ひに就いて、簡単に觸れておきませう。

宇都宮黙霖は、文政七年（一八二四年）十月、藝州長濱浦（現在の呉市）住蓮寺の庫裡で生れ、松陰よりは六歳年長になる、一向宗の僧侶であります。彼は、僧籍にある父親が、修業で住蓮寺に止住してゐた頃、或る女に生まれさせた私生児で、その為に随分、不遇な少年時代を送ったやうです。しかし、この事は、逆に、不撓不屈の意志を養ふことにもなつたと思はれます。今日傳へられてゐる彼の肖像を見ますと、短髪に、爛々とした大きな眸、固く結ばれた唇、將に魁偉といった風手で、如何にも、自ら信ずる處を、獨力獨行で貫いた人らしい顔つきです。廿歳の頃、彼は、時事に感ずる處あつて出奔、以後九州へ渡り、獨學獨行、數年の後、帰郷

します。しかし、その間、大病を得、聾になり、更には、吃音となつて了ひます。以後、彼は、人と話を交へるのに、筆談を以て専らとするのですが、その詩文の才は、廣く人の知る處だったやうです。その後、彼は、激しく、尊皇倒幕を唱へるやうになり、又も故郷を出奔、志ある人々を求めて他國を流寓するやうになるのですが、その間、彼が足跡を残した地は、四十餘國に及び、面談せし人、三千人を超えたと謂はれてゐます。彼の、此の獨力獨行による激しい倒幕運動は、安政の大獄の頃迄續きますが、幕府の餘命を風前の灯と見て取り、王政復古の近きを信じた彼は、一切の幕府誹謗を止め維新を迎へます。その間、安政の大獄で下獄。出獄後慶應二年には再び藝藩の牢に下り、明治二年迄獄囚として過します。生涯榮達を求めず、晩年に至るも得意の懷古談を語ることなく、若い頃の、粗衣に下駄履といふ姿その儘に、明治卅年、七十四才の生涯を廣島の獨居で終へたのです。

この黙霖と松陰の會ひは、安政二年九月のことです。時に黙霖卅二歳、松陰廿六歳でした。松陰は、當時、下田蹈海に敗れ、萩の野山獄に下獄、幽囚の身となつてをりました。九州遊歴よりの帰途、突然萩を訪れた黙霖は、以前からの友人であつた土屋蕭海せうかいを尋ねます。土屋は、長藩少壯中、文章第一の評ある人物で、松陰が下獄して以来、交友厚く、松陰の爲に心を砕いた友人の一人です。そして、この折、土屋は、黙霖に松陰のことを語り、獄中で、松陰が記した『幽囚録』を示します。會ひは、將に此時に始るのですが、この會ひからして、も

う尋常一様なものではありません。二人の、後年の、激しくも情誼深い交はり、往復の第一信に、既に強く刻印されてゐる様を、少し辿ってみたいと思ひます。「幽囚録」を感激をもつて讀み終へた黙霖は、眼の前の土屋に、かう語ります。「其の氣其の志、實に尊藩希觀の人物なり。其の文異議、兄（土屋）に比すれば、尚及ばざるが如し。而して光焰氣魄の紙上に充溢するものに至つては、則ち、兄の及ぶ所に非ざる也。衲なま（黙霖）の狂疾固より世の容れざる所、然れども此等の文を見れば、英氣勃々として自ら止むる能はず。」松陰は、罪を得て獄中の人なれば堂々と、相會ふことはむづかしからうが、「若し一たび其の容貌を見、其の言議に接するを得ば、死すと雖も悔いざるなり。」就いては、一書を認めるので、是非紹介の勞をとつて呉れと懇願してをります。土屋本人を前にして、「光焰氣魄の紙上に充溢するに至つては、則ち兄の及ぶ所に非ざる也」と言ふ處など、贅言を好まぬ、黙霖の率直な人柄を如實に表はしてゐます。が、「英氣勃々として止むる能はず」といふ一句も決して空世辭ではなかつたでせう。松陰の「講孟餘話」は、當時の士分の者達の有様をかう書いてゐます。「抑々近世文教日に隆盛、士大夫書を挟み師を求め、兀々孜々くわくしたらざるはなし。其の風懿美いび（うるはしい）といふべし。然れども、今の士大夫、學を勤むる者、若し其の志を論ぜば、名を得んが爲と官を得んが爲めとに過ぎず。嗚呼、世に讀書人多くして眞の學者なきものは、學を爲すの初め、其の志已に誤まればなり。」斯様な空氣が蔓延はびこる中で、一身を顧みず、全國を飛び廻り、日本の

歴史を説き、又、今直面しつつある祖國の危機を説く黙霖を、世が「狂疾」として受容れなかつたであらうことは、想像に難くありません。孤獨な闘ひを展開してゐた黙霖にとって、松陰の文章は、將に心の琴線に觸れるものだったに相違ありません。

土屋は、松陰に宛てた黙霖紹介の書簡の中で、此の時の彼の様をかう書いてゐます。「其（黙霖）の貌は其れ感ふる者の如し、彼の平生人に於る輕々しくは許可せず、而して老兄（松陰）に於ては傾倒此の如し。豈忠肝義膽の感孚する所、約せずして投合する者か。僕既に其の意を悲しむ。」そして、巷間、自らを利することのみに心を奪はれてゐる士が溢れ、事勿れ主義が横行する中、愈々、變り者として疎んじられてゆくが、「彼既に偃蹇（高くそびえる様）世に與つて屈せず。是を以て困悴日に甚し、體に全衣なく會て意となさず。則ち反て知己を孤囚廢斥の老兄に求め、其の胸中の孤憤を訴へんとす。豈悲しからざらんや。」土屋や黙霖の言葉に觸れてをりますと、かく生きむと思ひ定めた、一つの魂が、孤獨な闘ひの裡に、志を同じくする魂を、激しく求める様が、哀しい迄に傳はつて參ります。

「内に思ふことある者は、外に感じ易し」

此の土屋の書簡が、黙霖の書と具に、松陰の許に届いたのが、安政二年九月十三日、松陰

は、すぐさま返書を認めます。

「來書に稱す、『王伯の論を持すること久し。死を決せしこと五回、遂に死せず。今は則ち稍其の氣を平らかにして、敢へて激論せざれども、謂ふに丈夫必ず當に死すべきの時あり』と。嗚呼、是れ上人の本意の在る處なり。豈に特に志氣慷慨のみならむや。僕亦竊に志す所あり。此處を以て身幽囚にあれども、怨みず沮まず、厚く自ら淬勵して、將に死を他日に待たんとするのみ。」

「王伯の論」とは、皇室と武家、殊に幕府との關係を明らかにした默霖の持論であつて、武力や権力の力關係で定まって來た武家政治の歴史に對して、その間も、具體的な力を何も有してをられない皇室が、嚴然として續いて來たことに對する、默霖なりの考察を言ふのでせう。「謂ふに丈夫必ず死すべきの時あり」といふ默霖の言葉に、彼の、一時の激情ではない、はっきりとした覺悟を感じとつた松陰は、獄中にゐる自分の心を語つて貰つたやうな思ひがしたに違ひない。彼の書簡を讀んでゐますと、百年の知己を得たやうな心の弾みが傳はつて參ります。今迄、一面識もない二人ではあつたが、互ひの言葉が、胸に沁み入つて來た出會ひであつたに違ひありません。同じ書簡の中に、松陰は、「嗟、僕は上人に何の因縁ありてか、萬聞すべからざるの間に相聞すること、此處に至れるか。豈に來書に謂ふ處の同氣相求むるもの、乃ち爾るか」と、その感慨を記してをります。そして、彼は、默霖が自分の書に、深く心を動か

し、斯様な手紙を、敢へて獄中に投じて呉れたのも、「内に思ふことある者は、外に感じ易し。故に、楽を聞きて哭する者あり、花を觀て泣く者あり。上人内に已に思ふ處あり、乃ち外に感ずる所以なり」と結びます。此の言葉は、私の心に鋭く迫つて參ります。花や音楽といふものは、それ自體では、何の意味も持たないものだ。その花を見る私達の心が活き活きと動いてゐる時、花はその美しさを、初めて、私達に明かして呉れる。或は私達が、悲しい思ひに打拉ひきがれてゐる時、隣人には、何の感慨も齋もたさない音楽が、悲しい調を私達に傳へて来る。そのやうな経験は、平生の營みの中で、誰もが味はつてゐることだらうと思ひます。しかし、振返つてみますと、此處で松陰と黙霖が、互ひに感じ合ったやうに、一人の人間が、一人の人間の志の美しさを感じるといふ事が、今の私達の廻りでは、大變稀な事になつて了つてゐはしないでせうか。私には先の大戦後卅六年間續いた太平と、止る處を知らぬ物質的繁榮の蔭で、私達の世代の、「人生」といふものに對する根源的な思ひが蝕ばれてゐると、思はれてなりません。と言ひますのも、自分の生活の安定のみを思ひ患ひ、とりわけ、氣樂に生きることが、自由で幸せな人生であるといふ風潮が蔓延はびこる中で、私達が、何れ、確實に死すべき存在であることに思ひを致し、その決して長くはない一生を、何の爲に生きてゆかうとするのか、さういふ間に、誰も正面からぶつからうとはしなくなりつゝあると思ふからです。

成程、「志」といふ言葉は、今の大學の中で語られるには、多少骨董品的な響があるのかも

知れない。しかし、この言葉に盛込まれた先人達の思ひは、私達が、その限りある命を、意義あらしめたいと願ふ限り、常に、私達の心の中に新たな響を持って甦へて來る筈です。しかし、現在大學の中で友人と話してをりまして、「歴史の中で、君がこれと思ふ人物は一體誰か」と問ふてみても、中々、齒切れのよい答は帰って参りません。思へば、學校教育で私達が取組んで來た歴史は、歴史そのものではなく、その解釋の仕方であつたと思はざる得ません。歴史の姿を明らめようとして始められた歴史學は、いつしか、自らの解釋の正しさを證明する爲に、逆に、歴史を利用するやうになり、資料や人物もその爲に取捨選擇されてゐる。さう思へば私達が、先輩達の志―生き方―の美しさに魅せられ感動するといふことは、最も素朴で、それだけに、最も根源的なものでありませう。しかし、飽く迄、科學を標榜しようとする歴史學は、客觀的といふ言葉に拘泥し、歴史に學ぼうとして、このやうな思ひを、主觀的として片付ける、しかも、その實、自らの主觀を客觀と稱して私達の前に提示するのです。かういふ中で、私達は、生涯を、自らを超えたものの爲に捧げて生きた人の美しさに直接することなく、いたづらに他人の言葉や世の風潮に乗じて、それを論じてゐる。そして、私達の父祖が、美しいと觀じて語り傳へて來たものが、「客觀的」といふ冷淡な態度によつてあしらはれてゐる。形式的な道德主義や教條的な所謂「皇國史觀」の仮面は、確かに、打碎かなければならぬでせう。が、しかし、その場合も、史觀やイデオロギイに覆ひ隠されない生の人間の姿に觸れた

いと願ふ切實な心に支へられてゐなければ、結局は、他の史觀やイデオロギイを押し立てる事にならぬのです。私は、松陰と黙霖の、劇的な出會ひに接して、人生に就いて、「内に思ふ」こと乏しくなりつゝある私達が、「外に感ずる」こと貧しい薄っぺらな人生を歩むやうになつてゐる現状がいかにも恐るべきことであるか、しみじみと思はれてなりません。

入獄中、同志との面會を禁じた藩命を嚴守した松陰は、この時は、書簡を交したのみで、黙霖には會はずに終ります。今からお話し致します安政三年八月、互ひの心底をぶつけあつた書簡を含め、二人には、生涯、廿通程の往復があるのですが、遂に、今生では、一度も相會ふことなく、「心交不面」の友として終つたのです。

安政三年の往復書簡

扱て、一別以來、約一年程、二人の間の音信は途絶えます。そして、翌安政三年八月、黙霖が、再び來萩した折、二人の間に、激しい往復が交されます。が、先に述べたやうに、此の時も、兩人は指呼の間にをりながら、藩命に背くことの累わざわひが、友人、家族に及ぶことを恐れた松陰の申し出によつて、二人は、まみゆる事なく終ります。そして、此の時の往復が、二人の今生での最期の往復となりました。現在傳はつてゐる書簡は、八月十五日から八月十九日迄の

もので（松陰のもの七通・黙霖のもの三通）更に一通、九月一日付の黙霖宛のものが残っております。私は、二人の往復を通じて、何れに理があるかなどといふことが御話したい譯ではありません。それどころか、黙霖の書簡が残ってゐないなど、資料としても不十分な状態で、精しく、二人の論争の筋を辿ることすらむづかしいのです。ただ、残された松陰の書簡が、黙霖の生きた魂と松陰のそれとが切り結ぶ處に、如何に激しく、美しい言葉が生れたかを、生々しく傳へ、其處に、自づと、松陰の眞面目が活写されてゐるとは思はれますので、それを辿ってみようと思ふのです。

松陰の書簡に入る前に、簡単に、二人の争點を述べておきませう。話は、安政二年冬、黙霖から松陰に宛てた書簡に始るやうですが、この書簡は現存してをりません。安政三年八月十五日黙霖宛書簡にかう見えます。「去冬の書に云く、『縦たどひ其の人（將軍）をして感悟せしむとも、風俗頹たい弊はい（くずれやぶれること）の世に生れて、之れを奈何いかんともすべからず。余一筆をもてかんけん姦權の士を誅し、忠孝の冤えんを雪そそぐあらんのみ』と。」先にも述べましたやうに、黙霖は、徹底した倒幕論者であつた。幕府、將軍は、權力と武力を笠に着て、横暴を極め、自らの地位と權力を守ることにだけに汲々として、日本が置かれてゐる立場を一向に理解しようとしなさい。さういふ將軍に、よしんば、よくよく説いて悟らせても、最早、世の中全體が、日本本來の姿を知らず、自分のことのみ狂奔し、今、日本に迫りつゝある危機から目を覆はうとしてゐるやう

では、如何んともし難いではないか。斯くなるうへは、奸權の士を一掃し、志ある新たな人々で、日本を建て直してゆく他に方法はないではないか。黙霖の書簡を、松陰は、かう讀んだやうです。しかし、この考へが、松陰には、納得ゆかなかつた。「夫れ當今國の大蠱（人に害を與へるにはなはだしきもの）は、佛徒と武士とに若くはなし。而して僕と上人と亦其の一に居る。」それ丈ではない。日本には「僧徒武士及びその管する所に非ざる者幾ばくかある。是れ安んぞ盡く誅すべけんや。」いや、數の問題ではない。「是れ皆王民なり。王臣なり。亦必ずしも誅せざるなり。」如何に大蠱と言へども、皆、上に天皇を戴いて、此の日本に生きてゐる同じ日本人ではないか。彼等と語り、感悟させむとする努力もせず、彼等を斬り棄てることが、どうして出来よう。古よりの日本の姿は、「赫々明々として、古今に通ず。世に盛衰ありと雖も、俗に淳漓（人情の厚薄）ありと雖も、大義は一日にして滅すべけんや。」情理を盡して語れば、必ず通じるのが、互ひが、日本人である所以ではないか。一人より興して、一人を感悟せしめ、そして、君長を感悟せしむる道をゆかず、「盡く今の武士を誅し、盡く今の僧徒を誅」するのは、力を力で制する以外の何ものでもなく、新な霸道を生むだけだ。これでは「王室を再造すること、萬々能はざる」ことである。松陰が、黙霖の論に對してかう書き送つた處から、二人の激しい往復が始ります。直ちに、黙霖からの返書が届いたやうです。恐らく、黙霖も、一步も譲らなかつたと思はれます。八月十八日付の松陰の書簡は、次のやうに始ります。

「有志の士時を同じうして生れ、同じく斯の道を求むるは至歡なり。而れども一事も合はざるものある時は己を枉まげて人に殉したがふべからず、又、人を要して己れに帰せしむべからず。こゝを以て反覆論辨餘力を残さず。而して其の或は順ならざること痛腫しゅの身にありて一日も自ら措おく能はざるが如し、人間慘戚さんせきの事何を以て之に加へん。」

百年來の知己を得たやうな、あの黙霖との出會ひを思ひながら、書は認められたのでせう。如何に心知る友とはいへ、瑣事ならぬ志——如何に生くべきかを問ひ定め、人生に於て、何を價値あるものとするのか——に就いて、一點の異なるものある時、自分は、黙もくつてゐること出來ぬ。他人には他人の道があるといふことでは濟まされない。「此處を以て反覆論辨餘力を残さず」といふ一句は、全身全靈で黙霖に語りかけてゆく松陰の姿を彷彿とさせます。しかし、私は、次の一句に松陰の眞骨頂を見る思ひがするのです。

「而して其の或は順ならざること痛腫の身に在りて一日も自ら措く能はざるが如し、人間慘戚の事何を以て之に加へん」

「痛腫」とは、痛みのある腫れ物のことです。私達は、此の世に生を享けて、自分と同じ心を持ち、同じ人生を歩むといふ者は、一人としてゐない。しかし、誰もが、心の底では、他人と自分の心を、互ひに分ち合ひたい、さう願って生きてゐる。自らが、眞に人生の大事と觀じてゐる處を、他人が諒としなければ、自分は、何時でも、何處でも、全てを傾け盡して、彼に

向って語りかけてゆく他にない。松陰は、さう念じてゐたに違ひないし、事實、その通りの人生を歩んだのです。が、しかし、その努力が甲斐ない時、痛みは、滿腔を貫き、悲しみは深い。「人間惨戚の事何を以て之に加へん」

私は、先に、黙霖と松陰の論争と言ひましたが、現在の私達が、平生、「論争」といふ言葉から受けるニュアンスは、二人の往復の間には、全くないのであつて、それらの底を流れてゐるのは「一日も自ら措く能はざる」痛みなのです。人間を、軽く信じたり、軽く疑つたりして、決して本音を語らうとはしない、上皮の付合ひに終始するものには、感ずべくもない、深い悲しみが、此處には、湛へられてゐる。そして、これは、松陰といふ特殊な個性の問題ではないと、私には思はれるのです。それは昨日、小柳先生の御話にもありましたやうに、恐らく、聖徳太子、いや、それ以前から、私達の父祖が、共に生きてゆきながら育ててきた掛替へのない人生觀ではないかと思ふのです。平生、兎角、他人の批判を口にしたたり、或は、互ひの心に、安易に懸隔を作り、それを嘆くことに流されがちな私にとって、この松陰の黙霖に對する態度は、慄然とすることく厳しく迫つて來る言葉です。

此の書簡は、「偶々たまたま家祭に値あひて薦奠すいてん多事回復此れに止む。」と結ばれ、蒼惶の間に書かれたやうです。充分意を盡せなかつた松陰は、同日の裡に、追信を送ります。

「僕、上人の書を讀む數十篇、具つぶさに上人の心を知る。上人、僕の書を讀む數十篇、蓋けだし亦具さに僕の心を知らん。然り而して一事の合はざるものあり。餘り残念さに今朝の答に及び候。枝葉の論は林の如くなれば皆々打置き、先づ僕心を改めて申すべし、善く聞き給へ。」短い贅言のない前置きにも、姿勢を正して、黙霖に語りかけてゆく、松陰の氣力といったものが、よく表出されてゐます。

「僕は毛利家の臣なり。故に日夜毛利に奉行することを練磨するなり。毛利家は天子の臣なり。故に日夜天子に奉公するなり。吾れ等國主に忠勤するは即ち天子に忠勤するなり。然れども六百年來我が主の忠勤も天子へ竭つくさざること多し。實に大罪をば自ら知れり。我が主六百年來の忠勤を今日に償つくはせたまきこと本意なり。」松陰の言ふ「六百年の罪」とは、鎌倉幕府以來、皇室を顧みずに、自らの力と地位を守ることに汲々として來た武家政治のあり方を指し、これは又、黙霖が指摘する處でもあつたのです。

此處で「天子」とは、孝明天皇のことですが、松陰が、「天子への忠勤」といふ言葉を使う時、それは、決して、イデオロギッシュな天皇主義などとは、全く無縁のものだったといふことを、心に、留めておいて戴きたいのです。此處では、一例だけを引いておきます。嘉永六年

九月、長崎に、ロシア艦隊が、開國通商を求めて來航します。當時、松陰は、江戸で修學中でしたが、兼ねてより、西洋渡航を心に期してゐた松陰は、露艦に身を投げんと企て、一路、長崎へ向ひます。この行は、結局、失敗するのですが、この途上、彼は、京都に立寄り、十月一日、梁川星巖を訪ねます。其處で聞かされたのは、「墨夷（米國）來航以來は、毎晨寅刻（午前三時―四時）より齋戒ましまし敵國懾伏萬民安穩の御祈願遊ばされ、且つ供御も兩度之他は召上られず候。」といふ。孝明天皇の御日常でした。此の年の六月三日には、ペリーが來航してをり、隣國清は、既に、列強諸國の植民地と化してゐる。その中で、孝明天皇は、幕府專横の下、財政的にも苦しい御生活を續けながら、誰知られるともなく、たゞひたすら、祖國の安寧と獨立の維持を、祈り續けてをられる。これを聞いた松陰は、感涙拭ふこと能はず、翌早朝、齋戒沐浴、皇居を拝し、一詩を賦します。

鳳闕を拜する詩

山河襟帯自然の城 東に來り日として帝京を憶はざるなし

今朝盜嗽ぎて鳳闕を拜す 野人悲泣して行くこと能はず

上林零落して復た昔に非ず 空しく山河ありて變り更まるなし

聞くならく今上聖明の徳 天を敬ひ民を憐み至誠に發し給ふ

鶏鳴乃ち起きておんみづから齋戒し 妖氣を掃つて太平を致さんと祈り給ふ

從來英皇世々には出でたまはず 悠悠機を失す今の公卿

人生は萍の如く定住なし 何れの日か重ねて天日の明を拜せん

「山河襟帯自然の城」とは、山は襟のやうに畳付き、河は帯の如く繞り流れて自然の城を爲してゐるといふ、京の様でせう。昨夜、星巖に聞いた如く、「上林（宮城の庭）零落して」昔の面影はない。この荒れ果てた宮居の中で、天皇は、「鶏鳴乃ち起きておんみづから齋戒し、妖氣を掃つて太平を致さんと祈り給ふ」その御姿を思へば、「野人悲泣して行くこと能はず。」野人とは、松陰自身のことを指します。松陰の「天子への忠勤」といふ言葉には、この「悲泣して行くこと能はず」といふ涙が湛へられてゐるのです。彼は、政治上のイデオロギーや、學問的な主義主張などではなく、自らの眼と心で、天皇の御姿に、限りなき感動を覚え、其處から、自分の人生をスタートさせて行つたのです。松陰の天皇觀の背後にはこのやうな切々たる天皇に対するおもひがある。そのことを是非心に留めておいていただきたいのです。

書簡の先を讀んで行きませう。

「自分は今、幽囚の身であつて、上書も直言も出来ない。唯、學問を積んで、天下の士と交はるの時を待つ他はない。しかし、時來りなば、『天下の士と謀り、先づ我が大夫（家老）を論

し、六百年の罪と今日の忠勤の償とを知らせ、又、我が主人をして是を知らしめ、又、主人同列の人々をして悉く此の義を知らしめ、夫れより幕府をして前罪を悉く知らしめ、天子へ忠勤を遂げさするなり。若し此の事が成らずして半途にて首を刎ねられたれば夫れ迄なり。若し僕幽囚の身にて死なば、吾れ必ず一人の吾が志を繼ぐの士をば後世に残し置くなり。子々孫々に至り候はば、いつか時なきことは之れなく候。今朝の書に「一誠兆人感ぜしむ」といふは此の事なり。御察し下さるべく候。僕口上にて呶々するは、生來嫌ひにて右等の事も常には申さず候へども、上人の事故申出候。僕がこれに死ぬる處を黙して見て呉れよ。……征夷の罪惡を日夜朝暮口にせざるは大いに説あり。今幽囚して征夷を罵るは空言なり。且つ我が一身も征夷の罪を諫めずして生を憊む。されば征夷と同罪なり。己れの罪を擱きて人の罪を論ずることは吾れ死すともなさず。」

此の情理を盡した書簡を讀んだ黙霖は、この書簡の餘白に、朱で、かう書き込んでみます。「僕此の書を兩度讀む。其の中に泣きし所あり、微笑したる所あり、終りに至りて泣くに涕も出ぬ程胸塞がれり」又、松陰の「僕がこれに死ぬる所を黙して見て呉れよ」といふ一文の横には「よみしとき毛髮迄た立ちしなり。感じて泣くは此處なり」と書き付けてをります。「涕が出ぬ程胸塞が」ったのはすでに黙霖が、三年後の安政六年十月に刑死した、松陰の姿を明らかに予想してゐたからだと思はざるを得ません。

この後も、往復を繰返し、心底を吐露し合った二人は、最期に、實に打解けあつた書簡を残してをります。松陰は、その最後を「天、良縁を假さば他日相見るべし、良縁なくば天上にて相見るべし。僕狗死（犬死）すと雖も一片の精神萬古不滅、上人も同様なり、然れば天上の相見も期すべし」と結んでをります。天は、遂に、二人に、良縁を與へることなく、地上で相見る日はなかつたのですが、「萬古不滅」と爽かに言ひ切つた松陰の精神は、その書簡に、脈々として、傳へられてをります。

時間が參りました。纏まらず、充分意を盡せない處もありましたが、これで終らせていただきます。

「長寝しつるかも」

—世界に誇るに足る日本民族再生の道は—

国民文化研究会理事長、亜細亜大学教授 小田村 寅二郎



宮崎宮楼門の扁額「敵国降伏」

長寝しつるかも

元寇——祖国防衛の意志

歴代天皇の御歌

長寝しつるかも

お手許にお渡ししたレジメには「長寝しつるかも」といふ題のそばに「世界に誇るに足る日本民族再生の道は」といふ副題をつけておきました。「長寝しつるかも」についてはあとで申し上げますが、この副題だけを御覧になると、私の話の中で何か現状打開の方策が用意されてゐるのではないかとお考へになる方がおられるかもしれません。さういふ意味での御期待にお答へするものは何ありません。といふより、さういふ打開策をいくら並べてもどうにもならないところに来てゐる、それが現在の日本だと思ふのです。例へば防衛費をGNPの何パーセントにするかといふことが問題になつてゐる。しかしどんなに軍備が強大になつてゐたとしても、一体それで日本の国が守れるのか、また日教組がいただいてゐる革命思想がどんなに教育現場を荒廃させてゐるかは周知の事実だが、だからといって、強権を發動してそのリーダーたちを投獄してみても、本当の教育の正常化が可能なのか。いずれにしても打開策をあれこれ考へる、その以前にもっと大切なことがある、それが日本がいま直面してゐる課題と直接かゝはつてくるのが題にかゝげた「長寝しつるかも」といふ言葉なのです。

この言葉は古事記中つ巻、神武天皇の御東征の個所に出てまゐります。神武天皇は九州、日

向の地から瀬戸内海を東に軍をおすゝめになり、難波に上陸されますが、そこで激しい抵抗をうけ、一旦退いて紀伊半島の南に迂回、熊野の村に到られた時、「大きな熊、鬚髯ほのかに出で入ります。すなはち失せぬ」——大きな熊がほのかに出てきたかと思ふとそのまゝすうっと消えていったのです。すると「神倭伊波禮毘古の命みことたち倏忽しゅくごつにをえまし」——神武天皇は急に正気を失っておしまひになり、「また御軍も皆をえて伏しき」——全身すべてぐったりと正気を失ってしまった。それはその土地に住む荒ぶる神の毒気のために仮死状態になったことを示してゐるのでせう。

「この時に熊野の高倉下たかくらし、一横刀たちをもちて、天つ神の御子の伏せる地ところに到りて献する時に、天つ神の御子、すなはち寤さめ起ちて、「長寝しつるかも」と詔りたまひき」——ここで「長寝しつるかも」といふ言葉が出てまゐります。高倉下とは高い倉を支配してゐる人、熊野における有力者なのでせう。その人が天つ神の御子、すなはち神武天皇が伏せてをられるところに、一つの太刀をもつてきて献上する、すると天皇は忽ちに目を覚まし、起ち上つて「長寝しつるかも」——長く眠つてしまつてゐたなあ——とおっしゃった。「かれその横刀を受け取りたまふ時に、その熊野の山の荒ぶる神おのづからみな切り仆たふさえき。」——かうしてその太刀を天皇が手になされたとき、熊野の山の荒ぶる神たちは自然に切り仆たふされてしまった。敵はすべて薙はぎ倒されてしまったのです。私はこのことについてレジメには次のやうに書いておきました。

「この記述は、神武天皇が大和の橿原で日本国を創建されるに至るまでの間に、幾多の苦渋



のあとがあったことを示してをり、その一つがかうした説話になって伝誦されたのではなからうか、と思ふ。『長寝しつるかも』といふ御述懐の一言の語韻の中には、御東征と建国の御意志を一時たりとも喪失してしまはれたことに対する痛恨の悔悟がこめられてゐると同時に、長夜の眠りからさめて、いざ再び素志に向かって再出発しようとするに際しての、意気軒昂たる御気魄が烈々として息吹き出したことを感ぜしめずにはおかぬほど、深い意味あひをもつお言葉、と思ふ。」

神武天皇によって日本の建国といふ大事業がなしとげられたといはれますが、その間に天皇は幾度となく、どんなにか大変な事態に遭遇されたこととせう。その間の御苦闘の跡の一こまがかういふ形で伝誦されたのでせう。たとへ一時ではあつても、敵の毒気のために眠ってしまった。眠るといふのは建国への意志を喪失するといふこととせう。その状態からさめて立ち上つたときの天皇の御心、それを私たちは私たち

の心の中にさながらに蘇らせなければならぬ。それが、この合宿で願ってきた「心を鍛へる学問」のあり方だと思ふのです。

「長く寝てしまった」といふ悔悟の情と、それから再び立ち上って所期の目的にむかはうとする烈々たる意気と、その二つが、このわづかの言葉の中にこもってゐると思ふのです。

ここまで申し上げれば、私がどういふ意味でこの言葉を私の演題に使はせていたゞいたか、それはよくわかりだと思ふ。そのこともレジメに次のやうに書いておきました。

「眼を現代に転じて、さきの敗戦以降、今日に至る二十六年間の日本を考へると、敵の毒氣に魅せられたまゝ、祖国の独立保持への関心と決意を喪失してしまつたわが国民の姿が、まざまざと脳裡に浮んで来る。憲法・教育・軍事・行政、そして天皇についても。それらは現代版の『長寝』と評すべき大悲劇ではなかつたであらうか——」

斎藤先生や村松先生をはじめ多くの先生方の御話を聞かれて、今の日本では憲法も教育も軍事も行政も、すべてが大変なことになつてゐることがわかりだと思ひます。ではどうすればいいか、さう思ふ時私の脳裡をかすめるのは常にこの「長寝しつるかも」といふ言葉なのです。もっとも長い歴史をもつ日本民族ですから、その間、「長寝」した時期も多かつた、しかし、なかでも、敗戦後三十六年は特にひどい「長寝」だったのでないか、我々はその「長寝」から一刻も早く醒めて立ち上らなければいけない。居眠なのだから眼が覚めさへすれば、

そして意気軒昂たる再生の気魄をもって歩んでさへゆけば道はおのづから開けるはずだ。さう考へたいのです。

現在はまだ日本人の手による政治が行はれてゐる時期ですから、まだ外国が侵入してゐるわけではないのですから、まだ遅くはない。たゞこの現在をいい加減に放っておけば、さらにその立ち上りは困難になる一方でせうし、場合によっては間に合はなくなるかもしれないのです。

このことと一緒にいつも私の胸に浮ぶのは十九世紀の初め、フランスのナポレオンの軍隊がドイツを席捲したとき、ベルリン大学の学長であつた哲学者フィヒテが行つた「ドイツ国民に告ぐ」といふ演説です。この演説は数日にわたつて行はれましたが、その中でフィヒテは自分たちにとって、ドイツといふ国がどんなに尊い大切な国であるかを説いてゐるのです。そのなかでも特にドイツ語のもつすばらしい言葉の響きを君達は失ひたくないとは思はないか、もしもわれわれがドイツ語を失つたら一体どうなるかと切々と訴へてゐるのです。

私どももこの合宿で、言葉を通じて厳しい鍛錬をお互につゞけてまゐりましたが、我々がもしも日本語を失へば一体どうなるのか、我々日本人は日本語とともに生きてきた。日本語に真心を託し、その真心の託された言葉を通じて相手の心を知ってきた。その日本語を失つたときは、日本が独立を失ふときでせう。だが思へば戦後三十六年、日本人はあまりにも日本語を粗

末にしてきたではないか。フィヒテはナポレオンの軍隊の蹄がベルリンの市内に響きわたつてゐる最中に、その危機の只中においてこのやうな講演をした。それに比して、日本はいま自分の置かれてゐる立場に対してあまりにも鈍感ではないか。この「ドイツ国民に告ぐ」に比しても、現代の日本が「長寝」してしまつた姿は明らかでせう。

元寇——祖国防衛の意志

今年は西暦で一九八一年、これから七〇〇年を引いていたゞけば一二八一年、その年に何が行はれたか御存知ですか。その年は日本の年号でいへば弘安四年、弘安の役が行はれた時です。弘安の役とは元寇、すなはち元が日本に攻めてきた第二回目、その時から今年は七〇〇年に当るのです。元寇のことについて簡単にお話しておきますと、一二八一年の一三年前、一二六八年、すなはち文永五年に蒙古は高麗を征服したあと日本に服属を迫つて参ります。当時蒙古は全アジアを制圧（勢力の及ばなかつたのはインドとビルマの一部だけ）するといふ大変な勢力を誇つてゐた。その蒙古元が日本に服従を迫るのです。しかし時の執権北条時宗は元からの書面が無礼なため答へない。元は再び使を遣はす。だが時宗は太宰府に命じて元を追ふ。かうして元使来ること前後六回、その間時宗は九州地区周辺の海岸の整備を固めさせ、一方朝

廷によって全国の社寺に、祖国防護の祈祷がはじめられるのです。このお祈りといふことについて、現代の人はとかく軽く考へがちですが、決してさうではないと思ふ。全国の人が心を一つにして祈り続けるといふことは、そこに国民の強力な意志が統一されてゆくことです。このやうな困難に際しての一番大切な、いはゞ核になるやうなところを、朝廷の力によってしっかり守っていたゝいた、さういふことだと思ふのです。

かうして一二七四年、文永十一年、秋十月、遂に蒙古軍は日本に攻めてくる。この時の軍隊は約二万三千、対馬、壱岐を侵し、大変な残虐な行為を重ねて、博多湾に入り、上陸して戦ふのですが、御存知のやうに神風のために全滅、ばふはふの態で逃げ帰るのです。しかしその後、日本側も本格的に防衛体制を嚴重にして博多湾を中心に防塁を築き、再度の来襲に備へます。かくて文永の役より七年目、弘安四年、元の第二の来襲が行はれるのです。この時の軍勢は江南より海を渡ってきた江南軍十万、朝鮮半島を下り、朝鮮海峡を越えてきた東路軍四万、合せて十四万人余り。しかしこの時も神風のために、遂に蒙古の野望は挫かれたのです。

日本はこれまで外敵の侵入をうけなかった、これが日本にとってどれほど幸ひであったか、それはたしかに地形の上で島国であったといふこともあるでせう。しかしそれと同時に、この元寇の歴史に見るやうに精神の中心である朝廷と、政治の中心である幕府が心を一つにして、見事な舉国一致の体制をとることが出来たために独立を守り得たといふのが何より大切なこと

ではないでせうか。このことを忘れて、元寇の問題を語ることは出来ないと思ふのです。

ともかく我々の祖先が、外敵の侵入に対して全国民が決死の覚悟をもってこれに対処することが出来た。そのすばらしい歴史を思ひかへしていたゞくために、七百年といふ区切りのいい年を迎へてゐる弘安四年の話を申し上げた次第です。

これほどすばらしい歴史をうけついできたはずの日本が、一体何故こんなことになったのか。いろんなことが言はれてゐますが、私はやはり日本民族が居眠りをしてゐたからこのやうになったのだと、さう考へていかうではないかと皆さんに訴へたいのです。今までのことについてあれが悪かった、これが行き過ぎだったといくら言つてもどうにもならない。あれが悪かったらと思つたら、今後悪くないやうに自分を処していく、それが唯一の道だと思ふのです。

しかし今の日本ではさう考へさせないものが見方がある。それは例へば世の中が間違つてゐるのは、或ひは自分が道を誤つたのは誰かが悪いのだ、だから自分は誤つたし不幸だったといふ考へです。すべて責任を他に求めてゆく、お前はどうしてそのやうなことをしたのだと言はれた時にも、たゞ相手の悪いところだけを追及してさへ行けばそれで自分が成立すると思つてしまふのです。或は何か事をなさうとする時も自分の責任において、一人の力でものごとを行

はうとするのではなく、他の多くの人々の力を結集することだけを考へる、それも結局同じ考へ方から生れたものでせう。

八月の「国民同胞」にも書きましたが、七月五日の「日経」によればアメリカでもたしかにさういふ風潮はあった。しかし今はさういふ「ミー・デイケード」——自分が、自分がと主張しつゞけたこの十年間の風潮と訣別して、「献身の時代」に移らうとする考へが強く生れてきたと伝へられてゐます。だが日本では一体どうか、私は心配でならないのです。日本人は戦前、常に世のため、人のために生きるやうに教へられてきた。戦後さういふ考へはすべて捨て去られたやうですが、私たちはもう一度、かういふ大切な生き方をすなほな気持で見直すべきだと思ふのです。世の中がすべて世のため、人のためにならうとする、さういふ人達の集まりであればどんなに幸せな毎日を送ることが出来るでせう。それが本当の社会改革の原理ではないでせうか、所謂社会改革者たちは頭の中で組み立てられた政治の枠組みをもってきて、それを実現しさへすれば、すばらしい社会が生れるといふのですが、私たちはさういふテストに貴重な人生を提供するわけにはいかないのです。

なほ先ほどの「日経」の記事の中には、十代の若者たちの八一%までが「アメリカ人であることを極めて誇りに思ふ」といふ世論調査の結果も報ぜられてゐます。それに対して日本は一体どうなのか。何も最近アメリカで特別に愛国心教育が行はれたわけでもないでせう。たゞアメ

リカではそれまでのミー・デイケードの考へ方が誤つてゐた、それではどうにもならないといふ現実が目覚めたとき、それにすなほに従つただけなのでせう。インフレが続いて非常に生活が苦しくなつてきた、これではいけない、社会全体を何とかしつかり安定したものにしなければ自分自身の生活も安定させることはできないといふことに気付いた。そこにアメリカを誇りに思ふといふ彼らなりの現実的な精神が生れたと思ふのです。しかし日本ではどうか、実は日本でも、日教組も、総評もこれまでたててきた自分達のスローガンがもう通用しないといふことをちゃんと知つてゐる。社会党も共産党もこれまで通りではいけないといふことはわかつてゐるのです。例へば軍備の問題でもさうです。彼らは軍備に反対する。たしかに軍備の増強は心配になりませう。相手を殺す武器を沢山もつことは好ましくないはずだ、しかしそのことはこの平和な社会が外国の支配下に入らないことを條件にした上での話でせう。外国の侵略が現実可能性のあるものとして考へられる以上、やはり軍備増強にふみ切らざるを得ない、それが常識です。だとすれば人々はすなほにその現実に従へばいいのです。しかしイデオロギーの奴隷になつてしまつて人間性を失つてゐるため、そのやうに考へることができないでゐるのです。その点自民党はたしかにイデオロギーで動く政党ではない。しかし彼らは彼らで金にならない仕事には力を注がうとしない、その点世のため、人のためといふ素直な心のもち方が、政治思想の基本からすつぱりぬけ落ちてゐるところは矢張り社会党や共産党と同じなのです。

とはいへ長い歴史をふりかへてみますとさういふ、いはゞ「政治なき時代」とでもいふべき時代がこれまでになかったとはいへない。しかし概して、政治が駄目なときには国民がしっかりしてゐるのです、それが日本の国の姿だったので。例へば幕末でも政治は大きく乱れてゐた。吉田松陰にしても久坂玄端にしても、その渦中であつて、自分一人で一体何が出来るかといふことぐらゐは百も承知だった、しかしその一人でもやらなければならぬ時がある。さういふ原点に帰つて行動を起したのです。それが一波万波を呼んで明治維新が実現したので。この「一人でも」といふところをよく考へて下さい。今の人は常に集団を組まなければ行動しない。一人の人間性が集団の中に消えてしまつてゐる。戦後あれほど個人尊重などといふことを言ひながら、現在ほど一人一人の人間が衰弱してしまつた時代はないと思ふ。

ともかく、今の世の動き、政治のあり方がこれではいけない、といふことに目覚めた時には、「長寝しつるかも」といふ言葉のまゝに、自分一人でもそこに生れた決意を直ちに行動に移さなければいけない。その勇氣と決意以外に日本をよくする道はないのです。

歴代天皇の御歌

次に資料としてさしあげた歴代の天皇の御製についてお話いたします。その一番最初に私

は次のやうに書いておきました。

「『心の学問』と『知（頭）の学問』の相違がわかるやうになるために」

そしてその次に

「その素材例として、歴代天皇が『蟲』を詠ませ給ふた御製への理解度はどうなるのか」

と書きそへておきました。これはかういふことです。今の大学の教育では体育と頭の教育はできてゐるけれど、心を鍛へるやうな教育はすっぱりと抜けてしまつてゐる。そのために例へば天皇の問題を考へるやうな時にも、専ら知の方面から、頭の方面からの理解は進んでも、天皇の御心に迫つて天皇の問題を考へるといふやうなことにについては全くおろそかにされてゐると思ふのです。それでここでは天皇がおよみになった「蟲」についての御製を読みながらそれに対する理解度によつて、「心の学問」がどのやうに行はれてきたかを考へ、あはせて、天皇の問題の本質にふれていたゞきたいのです、まづ最初に江戸時代前期の靈元天皇の御製を読んでみませう。

蟲聲非一

さまざまの音をば野も（狭）せに鳴く蟲のおなじ思ひの露やわぶらむ

野も狭いほどにいろいろの音に虫が鳴いてゐる。その音色は異なつてゐるが、同じおもひに

ひえびえと置く露をわびしがってゐることだらうといふ意味です。

これもさぞ一つ思ひによる蟲のさまざま変る音には鳴くとも

この御歌も同じやうに、多くの虫はそれぞれ異なる音色で鳴いてゐるけれども、一つの思ひをもつて一緒に鳴いてゐる、同じ運命の中に生きてゐるのだらうといふお歌です。

意味はこのやうなことだと思ひますが、そのやうに解釈しただけではまだ頭の学問なので、そこからさらに進んで、虫の音に耳を傾けてをられる天皇の御心をお偲びすれば、はかないのちを精一杯に生きていかうとする虫の声が私たちの心に直接にひびいてくる。しかもそれらの虫には共通した一つの思ひがある。かうして一つ一つのもののいのちと、それを統一する世界と、その二つを内心に統べおさめられる天皇の御心が虫の音を通してしみじみ味はれるのです。しかも当時天皇方は幕府の弾圧に耐へながら、京の宮廷奥深くひっそりと生きてをられた。そのはれやらぬ天皇の御心を偲べば、歴史の姿がありありと感ぜられてくるのです。

次の御歌は靈元天皇の四代後の天皇、桃園天皇の御製です。天皇は僅か二十二歳といふ若さでなくなりますが数多くのすばらしい歌を残してをられます。

月前松蟲

暮るる夜の月まちいでて松蟲のみぎりにすだく聲のさやけさ

これは天皇十八歳の折の御歌です。「みぎり」といふのは軒から水の落ちるところにある敷石のこと、窓際のあたりといふ意味にとつていいでせう。その窓際になく松虫の声に耳をかたむけてをられる若い天皇の御心がみずみずしく伝はってきます。特に最後の「さやけさ」といふ言葉は身にしみますね。非常に力強いしめくくりで、私達の心にも直接ひびいてくるやうです。

次は桃園天皇の次の天皇、後桜町天皇の御製です。この天皇は女帝でいらっしやいます。

蟲吟露

百草の露をよすがに蟲ぞ鳴くおのがさまさまこゑをつくして（三十八歳）

「よすが」は「ゆかり、よるべ」といふ意味、多くの草に宿ってゐる露をよるべにして、一つ一つの虫がそれぞれ声を限りに命をこめて鳴いてゐる。これも一つ一つの虫のいのちに深く心を寄せられる御歌だと思ひます。

次は後桜町天皇より一代おいて次の、光格天皇の御製、この天皇のころは幕末も近く外国の船が日本の周辺を窺つてゐた時期です。

暮秋蟲

秋もやや暮れなむとする浅茅原あさじはらなく蟲の音もかれがれにして

秋もやや終りに近づいたころ、浅茅原に鳴く虫の音もか細くなってゆく、そのわびしい自然、それは人生のわびしさも偲ばせて、読む者をしみじみとしたおもひにさそひます。

次は江戸時代最後の孝明天皇の御製です。

叢 蟲

草むらのくさぐさ物をおもふとは蟲さへ知りて音にや鳴くらむ

この御歌になりますと、非常に思想詩的に感じられます。「草むらの」といふのは虫の鳴く場所であるとともに同音のくりかへしで「くさぐさ」の枕詞のやうに使はれてゐます。大切なのは次の「くさぐさ物をおもふ」といふところで、幕末のあの危急の時代に日本の統一のため、文字通り心を碎いて生涯を終へられた、その御心の直接の表現でせう。その私の心を虫までも知ってくれて、それにこたへるかのやうに虫が鳴いてゐる、その虫の声が身にしみることだといふ意味でせう。この歌など、本当に当時の状況の中に身をおいて心を働かせなければ到底出来ないと思ひます。

次の明治天皇は御生涯に十万首近い御歌を残してをられますので、虫をおよみになった御歌も多いのですが、そのうちいくつかを読んでみませう。

蟲

ひとりしてしづかにきけば聞くまゝにしげくなりゆくむしのこゑかな

蟲 聲

さまざまの蟲のこゑにも知られけり生きとしいけるもののおもひは

蟲聲欲枯

かれがれになりぬる庭の蟲のねはなかぬ夜よりもさびしかりけり

一首目は天皇の御体験に即した御表現が身にしみますし、二首目では単に虫だけでなく、すべて生きとし生けるものに心を注いでをられる天皇の御心が偲ばれてまゐります。そして三首目は本当に虫のいのちに心を寄せないでは到底生れない歌だと思ふのです。生命をいとほしむ作者の切々としたおもひが直接に感じられてまゐります。大正天皇にも次の御歌があります。

雨夜 蟲

蟲の聲かすかになりぬ小夜ふかく降る村雨の音にけたれて

行路 蟲

村雨のすぎし野道をわけくればくれぬさきより蟲ぞなくなる

村雨の音と虫の音の微妙な交錯、自然のいのちにふれるとはかういふことかと思はれます。天皇のことについて皆さんは随分否定的な発言を御聞きになることが多いと思ふ。天皇をピラミッドの頂点に位置する人だと考へ、たゞそれだけのことで天皇を理解したやうな気持ちになる人がどんなに多いか。しかし人の心を理解するのは人の心なので、さういふ既成の物差しで天皇の御心を測ることがいかにつまらない、無意味なことなのか、よくよく考へていたゞきたいと思ふのです。では天皇の御心を理解するにはどうすればいいのか、それには歴代の天皇さまはこのやうに実に多くの和歌をよんでをられる、その和歌を読み、それを味はひ、心で知るといふ努力をつゞければいいのです。頭で知るとどうしてもピラミッドの格好だけが先に目にちらついてしまふ。しかし心の方からはいつてゆくと、天皇の御心といふ具体的な事実の方に近づくことが出来るのです。さうして自分の目に写った事実を自分で判断すればいい、そこでは一切の物差しはいらない。さうしてはじめて私たちは天皇の問題を考へる糸口をつかむことが出来るのです。

だが天皇の問題を、頭だけで理解しようとする風潮は何も戦後だけではない、戦前でもさうでした。たしかに天皇、天皇といふ声は日本中にかまびすしかったけれども、天皇の御心を偲

ぶといふやうな学問は枯れはててしまつてゐた。そのため口で天皇と言ひながら、天皇さまの御氣持をおろそかにした人がどんなに多かつたか、さういふ人が国を誤つたのです。戦前からすでに大学でも天皇のことをまともに教へようとはしない。だから誰も天皇の事を知らないのです。知らないでにおいてあれこれ批判がましいことを言つてそれに一体何の意味があるか。こんな大切な、それこそ人類の文化の上から言つても文字通り宝といふべきものを知らないです。ごしてゐることを深く反省しなければいけないと思ふのです。

今日は虫についての御歌しか御紹介出来ませんでした、この他数々の御製を通して、是非とも自分の目で天皇の御姿に接していただきたいと思ひます。

○

なほ最後に一つだけ補足しておきますが、いつも申し上げるのですが、明治のはじめ、キリスト教が日本語に翻訳された時、ゴッドを神と訳してしまつた。そのため日本人が昔から伝へてきた神といふ概念が非常におかしなことになつてしまつたのです。日本でいふ神はわれわれと同じ欠点だらけの人間なのです。欠点は欠点なりに、たゞ真心を貫いて生きてゆく姿を神として仰いできたのです。だからそれは全智全能のゴッドとは全く違ふ。ところがゴッドを神と訳したためにその二つが混同されてしまつたのです。

それと関連しますが、神さまを拜む、私達も昨日の夜慰霊祭を行ひましたが、あの神を拜む

といふことを単に宗教といふことばで呼んでいいだらうか。元來宗教といふには、教祖と教義と教典と、その三つが揃ってゐなければいけないといふ。だが日本で神を拝むといふ時には、これらは何一つ備はつてゐない。だから私は嚴密な意味でこれを宗教と呼ぶのは誤りだと思ふのです。では神を拝むといふのは一体何か、私はそれは國民が國民として生きてゆく上での、祖先とのつながりの道だと思ふ。さう考へれば、靖国神社崇拜を宗教の一つだとして、キリスト教や佛教と相容れないといふ考へがいかに的外れた議論であるか、よくおわかりになると思ふのです。靖国神社には教祖もなければ教義もなく教典もない。たゞそこには国のためにたふれた数々の御霊がお祭りしてあるだけだ。それを單なる宗教と考へたので大変な混乱がおきてきたのではないか。しかしそのことについては、いろいろと議論をたゞかはせる前に日本の各家庭に、神棚と佛壇が祭られてゐるといふ簡明な事実を思ひかへせばそれでいいのです。佛教とキリスト教とその二つを信じるといふのは矛盾してゐることもかもしれない。しかし神を拝み佛を拝むことには何の抵抗もない筈だ。何故か、それは神を拝むことは御祖先を祭るといふ日本民族本来の儀礼だからなのです。そのやうに日本人が昔から伝えてきた單純な事実を確認してさへゆけば世の中はもっとすっきりしてくると思ふ。さうしてはじめて日本人本来の力が發揮されてくるはずです。それが日本人が長い長い眠りからさめる道だと思ふのです。



講

義

急変する国際情勢

— 祖国日本の明日を憶ふ —

国際政治評論家

齋

藤

忠



矢田一嘯筆「元寇」

世界に比ひを見ぬ純愛の国

先進國首脳會議の最も重大な目的

わが国民が関心を持たぬ眼前の変乱

日米安全保障条約廃棄の提案

アジアの渦乱の発端

日米関係に見る本質的変化

危機の本質に心付かなかった自由主義世界

共通の価値「民主主義と自由」を護るために

近づく新たななる世界の危機

最後の対決の段階に入る世界

裏目に出た「緊張緩和」

北大西洋条約機構、日本、およびANZUSの同盟

わが眼前の危急の事態

日本の採るべき道はただ一つ

専守防衛は百戦百敗の態勢

「世界を覆ふ巨大な暗影」

固有の権利としての集団自衛権

この人々の生死を超えた愛によって

自由主義諸國の結束と協力

世界に比ひを見ぬ純愛の国

故郷に縁薄く、祖国にも、また、縁薄かった半生でございます。英文、ドイツ文の評論執筆を生業として、國外の論壇で生きてまゐりました。したがって、わが祖国を遠く外から見つめる機会は多かったので。いろいろな國々を、或は外から、また内から、深く探り見て、それらの國々の偽らぬ真実の姿を、また、國民の生きかたを見きはめようとすることも、このやうな生業からは、当然のことであつたと言へませう。

その短かからぬ半生のあひだに、あらゆる視点から見たわが國を、世界に比ひない美しい國と思ふことが出来たことを、何よりも仕合はせと思ひます。美しい山河の姿、四季の移り変はり、すべて世界に比ひないものと思ひます。だが、それにもまして美しいのは、この國の人々の心でございます。その生き方でございます。

一億余の國民は、その血を一つにする同胞である。純血の民は、その命の源泉、皇室を中心として、純愛の社会を造ってまゐりました。美しいこの國土の自然を愛し、四季の移り変はりを愛で、此処に命の種を植ゑて、これを慈しみ育てながら、一族その故郷に定住して、比ひない愛の秩序を築いてきた。しかも、数千年の歴史をつらぬいて、変はらぬ道統を承け伝へて來

てをります。このやうな國家を、この地上に、他に見出だすことが出来ませうか？

あくまでも心優しく、素直な人々。だが、それゆゑにこそ、今日のやうな空前の危急の事態に直面するに到つては、これに対処する途を誤る危険なしとは言へませぬ。

まして、戦ひ敗れて後は、他の世界とはほとんど絶縁して、孤立の歲月を過ごしてまゐりました。國民の必死の努力によつて、滿目荒涼たる廢墟の中から再び起ち上つた日本。三十余年の歲月は、このやうにして、いつのまにか此の國を世界の首位を争ふ經濟大國に育て上げました。

だが、そのために、却つてわが國民は、眼前の平和と繁榮に慣れて、國境の外の世界にはほとんど関心を持たぬやうになつてしまつた。ひとを信じやすく、疑ふことを知らぬ心優しい國民であるだけに、眼前の危急の事態に対する意識も、また、これに対処する覺悟も、おのづから偏りがちにならざるを得ぬのです。

わが國民が関心を持たぬ眼前の変亂

眼前の大陸は、戦後三十余年、ただ一日の平和の日も無い戦亂の連続であつた。しかも、その動亂は、大陸の中央を占拠する二つの巨大な共產主義國家の凶惡な意図によつて計画され、

点火されたのであった。その空前の危急の事態に対しても、わが国民の関心は甚だ薄かったのであります。

たとへばカンボジアの問題一つを取ってみても——。東南アジアのこの國の人口総数は、八百五十万であった。それが、一九七〇年の共産主義革命の中で、四百万を失ってゐるのであります。革命の地獄を逃れてタイ國境にたどりつかうと、わが子を背負ひ、妻の手を曳いて、ジャングルの底を匍ひずり廻り、必死に逃亡を試みる人々。革命軍は、これを捕へて、情容赦

もなく殺害した。まことに、人類史上に多く例を見ぬ大虐殺であつたのです。

この國の首都プノンペンは、かつては三百万の住民を持つ繁榮した都市であつた。それが、革命の後、一年ならずして、一万の人口に急減したのであります。

都の住民のほとんどすべては、農耕の労働に狩り出されて、河畔の地域に拉し去られて居たのであります。後に残つた者は、ボル・ポトの率ゐる黨員と、革命軍の將兵



だけ。そのやうな悲惨の事態にも、平和と繁榮の中に日々を過ごしつつあったわが國民は、ほとんど関心を持ち得なかつたのであります。

ベトナムにしても、十余年にわたつてこの國を悲惨の限りの戦場と化した戦ひは、何のために戦はれた？ わが國の一部の文化人と称する人々は、これを「解放」の戦争として讚美した。「正義」の戦ひとしてこれを援けることを叫んだ。「米合衆國こそは侵略者」として、激しくこれを非難して居たのであります。

いま、その戦ひは終つた。米國は、あわただしく兵を引いて、アジアを去つて行つた。かつてこの戦ひを讚美した人々の言ふところが眞実であるならば、いまこそ、ベトナムに自由と平和は甦つたはずであります。

それにもかかはらず、この國の人々は、なにゆゑに、あわただしくも母國を棄てて、國外に逃れて行くのか？ 妻や子とともに、小さな舟に身を托して、明日の命も知らずに大海に逃れてゆく。しかも、この人々は、母國を棄てて海に逃れるために、多額の出國料を政府に支払はされてゐるのです。

アジアの渦乱の発端

第二次大戦終つて四年目の一九四九年、アジアには極めて重大な変化が起りました。ソビエト連邦の援助を持つ中国共産党は、つひに蒋介石總統の国民党政府を台湾に追ふことに成功した。この年、十月一日、中国大陸には、中華人民共和国といふ巨大な共産主義國家が成立したのであります。

その翌年、一九五〇年二月、ソビエト連邦は、ただちに、この國とのあひだに友好同盟の条約を結んだ。その条約の正文に、彼等は明白にわが日本を「敵」と規定してゐるのであります。

当時、わが日本は、ポツダム宣言受諾後、わづかに四年半の歳月を過ぎ得たに過ぎませぬ。國土は、ただ荒涼たる廢墟であつた。國民は、生きるすべをすらも知らず、必死にその日その日を過ごしてゐた。しかも、すでに前敵國の占領下に在つたのです。軍隊はことごとく解体されて、銃を執つて國を護るべきただ一人の兵士も居なかつた。

その完全な非武装國家の侵略を口にし、これを「敵」と規定して同盟の条約を締結したのであります。その二つの國家は、世界最大の國土と人口を擁し、世界最大の軍事力を有する共産主義大國。中華人民共和国ですらも、当時、すでに一二〇個師団、二百八十万の正規軍を保有してゐたのであります。その背後には、さらに、一億の民兵が在つた。ソビエト連邦については、言ふ必要があらうか？

この条約が調印されたのは、一九五〇年二月十四日。そして、その同じ年の六月には、朝鮮戦争が開始されてをります。朝鮮人民政府の軍は、南鮮「解放」を呼号して、韓國に侵入した。

だが、そのあとに続いて、十月二十五日、中共義勇軍も、また、朝鮮戦線に出動したのであります。元帥彭徳懷の指揮する二百万の大軍は、激浪のやうに三十八度線を越えて韓國になだれ込んで来た。しかも、彼等は、他をかへりみず、わが博多の対岸、釜山に向かつて、まっしぐらに前進して來てゐるのであります。

危機の本質に心付かなかった自由主義世界

この奇怪な行動の背後に中ソ友好同盟条約が在ったことは、いふまでもありません。その直前、十月十一日、中華人民共和國政府は、公然と、朝鮮人民政府援助を宣言してをります。國際連合安全保障理事会におけるソ連代表マリクも、また、十一月二十九日、これに関連して、米海軍第七艦隊の台湾退去を要求した。

國際連合軍の迅速な反撃が無かったならば、おそらくは、今日の日本は在り得なかつたであらう。これは、あきらかに、共產主義勢力の眞実の意図を天日の下に暴露したものであった。

東アジアは、戦後最大の危機に直面しつつあったのであります。

米合衆國も、この事態に、大きな衝撃を受けた。彼等も、また、はじめてソビエト連邦および中華人民共和國を中核とする共産主義勢力のアジア侵攻の策謀の重大さに気付いたのであります。

ソビエト連邦といふ共産主義國家の兇悪の本質に心付かなかつたのは、ひとり、わが日本ばかりでは無かつたのだ。米合衆國はもとより言はず、英國も、フランスも、大同小異であつたと言へませう。

いま、このやうなアジアの変乱を前にして、彼等は、初めてソビエト連邦の魔性の本質に気付いたのであります。だが、その時は、すでに、万事手後れであつたのです。

かうして、わが眼前のアジアは、相次ぐ革命の戦場となつた。朝鮮戦争終るより早く、張國華のひきゐる四万の中共軍は、アジア大陸中央のチベットを侵し、たちまちにして、これを征服し了りました。これに続いては、そのチベットを足場とするインド國境への攻勢。さらに、ホー・チミンの北ベトナムを表に押し立てての南ベトナム攻略。そのあひだには、國境を接するビルマにも、カンボジアにも、また海上のインドネシアにも、革命の動乱は続いたのであります。

フィリピンには、新人民軍の動乱。インドには、ナクサライトの革命。スリランカすらも、

北鮮のひそかに支援する革命の内戦によって、一時は存亡の危機に追ひ込まれたのだ。

同じやうな事態は、また、アフリカ大陸にも、中南米にも、中東にも、相次いで激発しつつあった。その中に在って、ひとり外部の世界の激変には何らの関心をも持たず、物質的繁榮に酔ひ痴れて、泰平の夢をむさぼりつつあったわが日本は、幸福であったと言ふべきであらうか？ それとも、不幸の極みと言ふべきであらうか？

近づく新たな世界の危機

この数年は、しばしば、世界危機の時代の入り口と言はれて來ました。今後十年のあひだに、世界中は、かつて経験せぬ危急の事態を迎へることになるであらうといふ。それは、八十年代の世界情勢を論ずる人々がひとしく口にすることなのであります。第三次世界大戦の破局は、すでに眼前に近づきつつあると言へるであらう。

だが、その危急の事態の原因を成しつつあるものが、一九六四年以來、急速に世界革命の方向を目ざし、狂気の軍事力拡充を進めてきたソビエト連邦の政策であることに就いては、西欧先進諸國のあひだでも、充分の認識を欠いてゐたと言へませう。すくなくとも、その認識の度は、きはめて甘かったと言はなければなりませんまい。

第二次大戦直前の一九三五年、モスクワに召集された第七回コミンテルン大会を発点として、自由世界の先進諸國は、完全にソビエト連邦の陰悪な策謀に操られて、同志相搏つ醜態を繰り返してまゐりました。その上に、一九六二年十月のキューバ事件の後には、さらに、クレムリンの差し伸べる「緊張緩和」の手に操られて、根柢の無い安心感に酔ひ痴れ、ソビエト連邦の飛躍的な軍事力拡充を許してしまひました。一九七二年、気がついた時には、すでに、何もかも遅過ぎたのであります。

ソビエト連邦の軍事力は、核戦力においても、通常戦力においても、すでに米合衆國を完全に追ひ抜いてしまつてゐたのです。

このやうにして獲得した軍事力の優位を背景として、ソビエト連邦の革命攻勢は、激浪のやうに、四つの大陸に拡がってまゐりました。アフリカに、中東地域に、またアジアに、次ぎ次ぎに、ソビエト連邦と深い関係を持つ共産主義政權が誕生したのであります。

今日のソビエト連邦は、はやくも、「一九八〇年代前半のあひだに、軍事力において米合衆國を完全に圧倒できるやうになるであらう」といふ危険な自信をさへも抱き始めてゐるのであります。

裏目に出た「緊張緩和」

だが、その「緊張緩和」の謀略は、反面において、大きな裏目に出た。まことに思はぬ形で、裏目に出たのです。

「緊張緩和」によって自由世界との交渉の道を開いたことは、いたづらに共産主義陣営内の動揺と混乱を招く結果を生んでしまった。自由諸國における人々の生活を垣間見た彼等は、自身の周囲の現実とは全く隔絶した自由と繁榮の生活が地上に存在する事実を知ったのであります。そのために、共産主義体制の不合理と虐圧に対する彼等の不満は、野火のやうに共産圏内に燃え拡がって行ったのであります。

ひとりソビエト連邦だけのことではありません。東ヨーロッパの衛星諸國の場合、この動揺は、いっそう大きかったのです。現在のポーランドは、その最も顕著な一例と言へませう。

緊張緩和の方略のために、共産主義世界は、つひに内部崩壊の危機に直面するに至ったのであります。

ソビエト連邦が、いま、執り得る途は、ただ一つである。もはや、これ以上、緊張緩和に多くを期待することは不可能であります。むしろ、危険でさへもあり得るのだ。

クレムリンは、やむを得ず、緊張緩和政策を後退させました。そして、猛然として、無謀の極みとも言へる冒險的攻勢に転じたのであります。

狙ふところは、自由陣営の最弱点を目ざしてこれを突破し、此処を爆破口として、全自由主

義世界を壊滅に追ひ込むことに在るのだ。

わが眼前の危急の事態

その最弱点の一つは、わが日本の眼前に在る朝鮮半島であります。第三次大戦の発火点となるものは、中東地域か？ それとも、朝鮮半島か？ 世界は（日本を除いての世界は）、今日、ことごとくその危惧を抱いて、これらの地域における情勢の変移に注目してゐるのです。

まして、その朝鮮半島に在る自由陣營の國、大韓民國が、どのやうにこの事態を憂慮してゐかは、たやすく理解できることではありません。わが國で一部の政党人や新聞が大騒ぎを続けた金大中事件の背後には、このやうな生死存亡の危急の事態が存在するのです。日本の朝野は、そのことについても、精確な認識を全く欠いてゐると言はなければなりません。

さらに、その朝鮮半島は言ふまでもなく、わが北方の固有領土、択捉、國後、齒舞、色丹の四つの島群におけるソビエト連邦軍の大規模の展開を、尋常の事態と思ふか？ わが石油、工業原料、食糧の海上輸送路の関門、マラッカ海峡を眼前に見るベトナム社会主義共和國の東岸を覆うて点列するソ連海軍の基地の列は、日本の存在をおびやかす何者でもないと思ふのか？ 朝鮮半島の東海岸にすらも、すでにソ連海軍の使用に委ねられた二つの基地、羅津および清

津が在るのです。

これに加へて、眼前の沿海州に、また、モンゴル人民共和国領内に展開するソ連戦略爆撃機の性能の飛躍的改善、そして、SS20を始めとする戦域核ミサイルの数の急速な増加。——すべては、わが日本が史上初めて直面するに到った危急の事態の本質を明らかにするものなのであります。万一にも、韓半島が、或は中國主陸が戦火の巷と化するならば、日本は、もとより、たちまちにして絶体絶命の窮地に追ひ込まれるであらう。

われわれは、いま、この憂慮に堪へぬ事態をありのままに直視し、認識するだけの勇氣を持たなければならぬのであります。

専守防衛は百戦百敗の態勢

さらに、わが國民が何よりも深く知らなければならぬのは、アジア主陸の前面に波濤に浮かぶ一連の列島としての日本の戦略的条件であります。

今日では、中距離核兵器と言はれる戦域核ミサイルでも、すでに数千キロの射程を持つのです。日本列島と、これを包む西太平洋のほとんど全域は、アジア主陸に基地を持つソビエト連邦の核ミサイルと戦略爆撃機群の攻撃圏内に完全に包含されて居る。

この國の安全を護るためには、侵攻する敵を、列島の外の海上、または空中で阻止し、撃破しなければならぬ。本土への侵入を許してしまへば、すでに、すべては終るのであります。この事態のもとで、わが國の野党の一部が主唱する「専守防禦」などといふことが、どうして可能であり得ようか？

野党や言論界の一部だけのことでは無い。わが防衛庁が久しい以前に発表した「防衛白書」昭和四十五年版も、たしかに、「専守防禦」をわが防衛の基本方針と定めてをりました。「自衛力の行使は、わが領土、領海、および領空の内においてのみ、許さるべきものである」といふ。戦後憲法の制約を前提とする限り、この退嬰的姿勢は、或は已むを得ぬことであつたかも知れません。

だが、現実のアジア・太平洋地域における兵器の展開の事実に照らして言ふまでもない。このやうな防衛姿勢は、所詮は百戦百敗の態勢に他ならぬのであります。

日本の安全を保持することが到底不可能であるだけでは無い。必ず侵略者に勝利を許し、この國を焦土の廢墟と化することは避け得られまい。

防衛とは、他の國家の好意に甘えて、その庇護のもとに生きてゆくことを意味しませぬ。みづから隷従的境涯に甘んじて、一身の安全を他の國家に託し、自身は無為にして眠りほうけることであつてはならない。西ヨオロッパ、および米洲、アジアの自由主義諸國との協力は、自

身の安全と存在を護るためには、当然果たさるべき責務なのであります。

まして、わが日本は、世界最大の海洋に浮かぶ海洋國家である。この國を覆ひ包む海は、ただちに米大陸に連なり、アジアの岸を洗ひ、さらに中東に、ヨオロッパに、またアフリカに拡がってゆく。このやうな海洋國家の特性として、その經濟活動は、世界のあらゆる果てまで及ぶのであります。

日本は、繰り返して申しましたやうに、世界最大の海洋の果てに浮かぶ四つの火山島であります。その國土は、ほとんど何ひとつ、言ふべき資源を産みませぬ。それにもかかはらず、悲惨な敗戦の後、わづかに三十余年の歲月のあひだに、廢墟の中から不死鳥のやうに起ち上がって、いまは、世界の首位を争ふ經濟的實力を持つ大國である。このやうな奇蹟的復活が可能であつた理由のすくなくとも一つは、日本が海洋に依存して生きる國家であつたことに在るのであります。

その海洋の安全と自由を護ることこそ、日本の安全と自由を護る道であらねばなりません。また、海洋によって結ばれる自由主義世界の安全を保持する道であらねばなりません。

もとより、廣大無辺の大洋を貫く無数の海上交通路を、日本一國の力で、ことごとく護り得る筈はありません。公海の自由を護り貫くためには、当然、利害を同じうし、運命を共にする同盟諸國と力を協せて事に当たらなければなりません。それは、集団自衛権の正当な行使であり

ます。

固有の権利としての集団自衛権

このやうな集団自衛権は、いふまでもなく、わが固有の権利である。まして、これは、國際連合憲章の定めるところに依つても、加盟國たる日本が当然護るべき権利であり、果たすべき責任であらねばなりません。

ただ、問題は、またしても日本國憲法であります。法制局が示した見解に従ふならば、「集団自衛権は、まさしく、わが固有の権利である。しかしながら、その行使は、現憲法の制約するところであつて、これを許すことは出来ない。」

集団自衛権がわが固有の権利であることは、明白に、これを認めてをるのです。だが、その固有の権利を行使することは、日本國憲法がこれを許さぬがゆゑに、断じて許すことは出来ないと言ふのであります。

日本がその生死を託する海上交通路の護衛の場合にしても、「わが商船が外國の海上武力によつて護られることは、差支へない。だが、日本自身がその自衛力を派遣して護衛に当たることは、憲法の規定に背反する行為である」と言ふ。

このやうな解釈の及ぶところは、わが自衛艦がアメリカ海軍の対潜哨戒機と協力して、兩國商船の護衛に当たること、また、当然、憲法の規定に背反する行為であるといふことにならざるを得ません。だが、これでは、わが祖國の命運を護ることは、果たして可能であらうか？ わが海上交通線の防衛は、國家の存在と安全を確保する上において、必ず果たさるべき責務であります。まして、これは、國際連合憲章の規定に照らしても、加盟國たる日本が当然保有する権利であり、必ず果たすべき責務なのであります。

集團自衛権は、日本も、明らかにこれを保有するのであります。憲法がこれを否定するなどといふことが在り得るか？ もし憲法が集團自衛権の行使を許さぬといふならば、われわれは、そのやうな憲法の存在をこそ問題にしなければならぬ。すくなくとも、世界の現実を無視し、祖國の存亡に眼をとざす三百代言的憲法解釈は、あくまでも、これを批判し、是正しなければなりません。

自由主義諸國の結束と協力

いま、祖國は、空前の危急の事態に直面しようとしてをります。この時にあたって、なによりも第一に考へなければならぬことは、他の自由主義諸國とのあひだの緊密、かつ強力な關係

の推進であります。急潮のやうに拡大しつつある共産主義世界の攻勢に対抗して身を衛る道は、このことの他には在り得ない。

今日までの自由主義世界は、この最も肝要な協力を忘れてをりました。それどころではない。却つて、共産主義勢力の奥の手ともいふべき「人民戦線」の謀略にあやつられて、彼等の前に「資本主義世界の内部矛盾」をさらけ出し、たがひに相搏ち、相傷ついで、存分に彼等の利用するに任せて來たのであります。

自由主義世界の先進諸國がたがひに対立し、たがひに争ふがゆゑにこそ、つねに共産主義世界の前に致命の弱点をさらし、彼等の利用するに任せて來た。共産主義世界を統率するソビエト連邦は、その弱点を思ふままに利用し、さらに、「緊張緩和」の仮面の下に急速に自由主義世界の軍事力に追ひ迫り、つひにはこれを追ひ越して、すくなくとも兵器の数量について言ふ限り、完全に自由陣營を圧倒するに至つたのであります。

先進國首脳會議の最も重大な目的

だが、それは、あくまでも、自由主義世界が共産主義勢力の眞実の意図に心付かず、その凶悪の戦略をも明らかにせず、ただ彼等の操るがままに、内部対立と抗争を続けて來たためであ

ります。もし自由主義諸國——特に、その先進諸國が固く結束して、力を協はせるならば、經濟力においてはもとよりのこと、軍事力においても、共產主義勢力を完全に圧倒するだけの實力を保有して居ることは、何びとの眼にも明らかであります。

自由主義諸國にとって、眼前の危急の事態を克服する途は、ただ一つである。彼等——わけでもアジア、アメリカ、ヨーロッパの先進諸國が、この事實を明白に認識することでありませう。そして、俱に固く結束して、世界の自由と平和を護るために、あらゆる努力を致すことあります。

とりわけ、アジアにおけるただ一つの自由主義大國、日本の参加が、この使命の達成の上にかに必要であるかは、今日までも、あらゆる機会に、西欧諸國が提言し、七年前のランブイエ會議に始まる先進國首腦會議に彼等が賭けたものは、まさしくそれであつたのです。

フランス大統領ジスカールデスタンを始めとする西欧先進諸國の首腦たちが、何のために、第一回會議以來、毎年繰り返されて來たこの重要な國際會議に、必ずわが日本の参加を要請して來たかを、深くお考へいたいただきたいのです。

他の参加諸國は、ただ一つの例外も無く、西ヨーロッパおよび米洲の國々でありました。さらに、また、ただ一つの例外も無く、ソビエト連邦の脅威に対して西ヨーロッパを防衛することを唯一の目的とする北大西洋条約機構（NATO）の加盟國であつたのです。その中に在つ

て、ただ一つのアジアの國、ただ一つのNATO外の國であるわが日本の参加が、なにゆゑに、つねに要請されて來たのか？ そのことに思ひを致すだけでも、自由主義世界の明日の運命に関して、わが日本の力がどのやうに重く評価されてゐるか、また、日本の活動がいかに熱い思ひをもって期待されてゐるかを知ることが出来るであります。

日本が、もし、この自由主義世界の結束に力を協はせ、自ら實質的な原動力となつて行動するならば、必ず共產主義世界の策謀を破砕して、全人類の平和と、自由と、繁榮とを守り貫くことが出来るであらう。そして、それこそ、わが日本自身が悠久の歴史の中に持ち伝えてきた國の道統を護り貫く道であらねばなりません。

まことに口惜しい限りではあるが、現在の日本は、いまだにその自覺を持たず、その希望を持たず、その希望をすらも抱いてはをらぬやうに思はれます。國防の問題一つを採つてみても、日本政府の防衛政策の基底は、自身の力と覺悟をもつて國の安全と平和を護ることに無い。すくなくとも、今日までは、さうであつたと言はなければならぬでせう。いはんや、自由主義世界の安全と繁榮に対する責任を進んで果たさうとする決意などは、思ひも寄らない。ただ、いたづらに、米・欧諸國の要求の前に、信念も覺悟も無く、右往左往するだけだ。

なによりも、わが日本が自由主義世界の最も重要な一員であるといふ自覺をすらも欠いてゐるのであります。今日の國際社会において、いかなる使命を果たすべきかの覺悟をすらも持た

てはゐないのであります。一言で申しますならば、対外政策の基底たるべき自國の立場、使命についての認識を、また信念を、全く欠いてゐると言はなければなるまい。

日米安全保障条約廢棄の提案

その頼りない日本の対外姿勢に、大きな変化が見え初めたのは、この五月、日米両首腦のワシントンにおける会談以後のことです。すくなくとも、日米兩國の關係は、この會談を機として、飛躍的な進展を見せやうとしてゐたのであります。

今日までも、日米兩國のあひだには、その前文において、「兩國共通の価値、自由と民主主義を護る」ことを目的として明記した「日米相互協力および安全保障条約」が在りました。だが、この條約における兩國の關係は、同様の他の條約にかつて例を見ぬ異例のものであった。

日本は、自身の存在と安全を護るための力を持つては居なかつたのであります。この國の安全は、ひとへに、米合衆國の軍事力によつて護られることになつてゐた。——いはゆる「片務條約」。米國民のあひだにも、「只乗り」を不満とする声は非常に大きかつたのであります。

この條約を即時廢棄せよといふ提案すらも、米合衆國内部には、すでに出現してゐた。しかも、その提案者が、現在米國における知日派の代表ともいふべき人物であつたことは、われわ

れにとつても、少なからぬ衝撃であつたのです。

アイザック・シャピロ。人も知るやうに、わが日本を出生の地とする論客であります。いまはすでに職を退きましたが、かつてはニューヨークの「日本協会」の会長をも勤めた人物。その問題の論文が掲載されたのは、國際政治問題の専門誌として人に知られた季刊誌であります。彼は、その論文において、日米安全保障条約を廃棄して、これに代はる新しい關係を日本とのあひだに取り決めること。そして、現在日本に在る米軍部隊を撤収するための交渉を日本政府とのあひだに開始することを提唱してゐた。

この論文以前にも、自國の防衛におけるわが日本の「不可解」な態度に、多くの非難が投げつけられて來たことは事実であります。「安保只乗り」は、たしかに、その最も主要なものであつた。

だが、そのやうな論議を展開してアメリカ國民の対日感情に水を差さうとした者は、ほとんど例外なく、わが日本の眞実の事態について精確な知識を持ち合はさぬ人々であつたのであります。或は、自身の政治的立場のために、アメリカ國民一部の反日感情を利用しようとする人であつたのであります。シャピロのやうな、いろいろな意味で日本を理解してゐた筈の人物から、このやうな意見が提起されたのは、かつて例が無かつたことと言はなければなりません。

こればかりか、カーター大統領は、韓國に在る米軍部隊の撤退をさへも、いったんは決定してゐた。台湾とのあひだの相互防衛条約をも、大統領の一存で廃棄した。東アジアの安全は、まさに、風前の灯ともいふべき状態に在つたのであります。

日米関係に見る本質的变化

その頼りない日米関係は、いま、新しい変化を遂げようとしてゐたのです。昨日までの「ゆるぎなき信頼関係」は、にはかに、「同盟」の關係に向かつて前進しようとしてゐたのです。

日米會議後に發表された共同声明は、「日米兩國のあひだの同盟關係は、民主主義および自由といふ兩國が共有する価値の上に築かれてゐる」と述べてをりました。このやうに、同盟關係の存在を明白に言ひ切つたことこそ、この日米會議における最も注目すべき成果であつたと言はなければなりません。これによつて、日本は、自由主義世界の先進諸國が結成する強力な結盟の主要な一員としての揺るぎなき存在を確認されたのであります。

今日、世界の安全と平和を根底より揺るがしつつかあるものは、さきにも申しましたやうに、「緊張緩和」の偽装下にソビエト連邦が急速に進めてきた軍事力の飛躍的拡充であつた。これによつて彼等が獲得し得た軍事力の優位を頼み、自由主義世界の反撃を封じて置いて、第三世

世界の新生國家の一群の中に疾風のやうに革命の鬭争を拡大して行つた行為であつた。自由主義世界の先進諸國は、このやうにして、到るところにおいて革命勢力によって包圍され、分斷されました。世界革命の陰惡な鬭争は、着々として、最後の目標に向かつて前進しつつあつたのです。——この危急の事態の正確な認識においても、日米首腦の会談における共同声明は、完全な合意を示してゐたと言へるであらう。

共同声明は、ソビエト連邦軍のアフガニスタンよりの即時かつ無条件の全面撤退を要求することを再認識してをります。さらに、西ヨオロッパ眼前のポーランドに起こりつつある事態についても、もしもソビエト連邦がこの國に武力介入を敢へてするならば、西側先進諸國は、必ず力を協せて共同の対応策を採ることを言明してゐるのであります。

わけても、ソビエト連邦が最近数年のあひだに中東地域の制握にあらゆる術策を弄して内面侵略を進めてきた事實は、自由主義世界の安全を祈る者にとっては、絶対に無視し得ぬ重大事であらねばならない。ソビエト連邦の中東支配の計画が目的とするところは、資本主義先進諸國の命を養ふ石油を抑へることによつて、彼等を経済的破局に追ひ込み、つひには相互のあひだに對立と抗争を激成して、一舉に世界革命の成就を狙ふことに在るのであります。

これは、日本自身にとつても、存亡に関する重大事であらねばならない。それどころか、ヨオロッパ、アメリカおよびアジアの多くの先進諸國のあひだにおいても、わが日本ほど、こ



れによって致命の打撃を受ける國は無いであらう。

その意味でも、日米共同声明がこの問題に言及し、中東およびペルシア湾岸地域で米國が採りつつある政策を是認し、支持する旨を確認する態度を明らかにしたことは、大きな収獲であつたと言はなければなりません。

共通の価値「民主主義と自由」を護るために

これと共に、日本自身の安全に関して断じて無視し得ぬことは、韓國の安全への保障であります。

鈴木内閣の韓半島の事態に対する今日までの認識と対策に甚だ心もとないものが在つたことは、否定できない。だが、日米共同声明が、ともかくも、その不安を解消したことは、当然、評価さるべきでありませう。

それにもまして、見逃してはならぬ重大な事実は、日米安全保障条約に対する的確な評価であった。共同声明は、「日米相互協力・安全保障条約こそ、日本の防衛および極東の平和と安全の基礎である」ことを宣言してをります。すでに日米安全保障条約の使命を確認し、これを基礎として日米およびアジアの安全と平和を護ることを共に誓約する以上、わが日本が、その誓約の実行にあたって、防衛の上の適切な役割の分担に応ずることは、あまりにも当然のことと言はねばなるまい。

ただ、心にかかるのは、会談後の記者会見における鈴木善幸首相の発言であります。「日米間の同盟は、軍事的意味合ひを持つものではない」と言つてをります。

この共同声明にいふ「アライアンス」（同盟）が単なる軍事的協力の意味を超えた総合的・全面的なものであることは、事実であらう。だが、「軍事的意味合ひを持つものではない」といふのは、不当な言ひ遁れといふ他はあるまい。すくなくとも、これは、日本を離れて國外では、通用することではございません。

日米両國は、共通の価値、「民主主義と自由」を護るために、全面的に協力することを、すでに誓約してゐるのであります。その「自由」を侵し「民主主義」を破壊する者の手からこれら共通の価値を護るためには、当然、軍事的協力を必要とするであらう。

経済協力といひ、また、外交活動といふものも、防衛の軍事的努力を伴はずして、何の成果

を擧げることが出来やうか？　すくなくとも、この言ひ遁れは、完全に非現実的であると言はざるを得ませぬ。

最後の対決の段階に入る世界

いづれにせよ、今日の世界は、地球の全域にわたって、共産主義世界と自由主義世界との対立が最後の対決の段階に入らうとしてゐる重大な時期に在るのです。しかも、その共産主義世界の中核を成すソビエトは、米合衆國の國務長官アレクサンダー・ヘイグが上院外交委員会で証言してをります通り、「ヨオロッパおよびアジアの二つの正面において同時に作戦を展開できるだけの巨大な軍事力」を、すでに作り上げてゐるのであります。

その軍事力を背景として、「民族解放闘争」を名分とする共産主義革命の攻勢は、風よりも疾く、世界のいたるところに浸透してゆく。

アフリカ大陸の西洋、アンゴラに生起した事態は、その早期の一例でありました。次いで、同じ大陸の北東岸、ソマリアに、またエチオピアに、キューバ軍を駆使しての革命闘争は、野火のやうに拡がって行った。

だが、それにもまして世界を衝撃したのは、その後、中東および南西アジアの諸地域に相

次いで起きた危急の事態であった。革命の闘争は、南イエーメンに、またアフガニスタンに、イランに、とどまるところを知らず、拡がって行ったのであります。

さらに、南アジアにおいては、十余年にわたるソビエト連邦の援助に頼って、遂に南ベトナム併呑に成功したベトナム社会主義共和国が、あらたにソビエト連邦とのあひだに善隣友好の条約を締結して、アジア革命のための最も有力な基地となり、日本の海上交通路制扼のための戦略的関門と化してゐる。このやうにして、自由主義世界は、いま、空前の危急の事態を迎へようとしてゐるのです。

自由主義世界がいま採るべき——また採らねばならぬ基本的政略は、眼前の危機に対処して共通の運命を衛るために、自由主義諸國の強固な結盟と協力を實現することであらねばならない。そして、そのための唯一の方策として考へ得るのは、米合衆國、西ヨーロッパ諸國、およびアジアの中核としての日本の三つの力を結合して、三つの大陸にわたる強力な同盟の体制を確立することなのであります。

北大西洋条約機構、日本、およびANZUSの同盟

今日までも、西ヨーロッパの安全を護るための同盟としては、北大西洋条約機構 (NATO)

○)が存在する。そして、アジアの側には、その中核たる日本と、米合衆國とのあひだに締結された日米相互協力・安全保障条約が在った。

これに加へて、米合衆國と大韓民國との米韓相互防衛条約。さらに、台湾に拠る中華民國とのあひだに締結された相互防衛条約を復活・強化することも、当然、考へられるであらう。そして、南太平洋地域には、オーストラリア連邦およびニュージーランドと共に米合衆國も参加したANZUSの共同防衛体制も存在するのであります。

これら、理想を同じうし、命運を共にする友邦との結盟をさらに強化し、拡大し、統合することこそ、いま、自由主義諸國が、採るべきただ一つの有効な方策であらねばならない。

この構想を、米合衆國は、すでに昨年（昭和五十五年）、わが日本に伝へてをります。またカーター政権の時期でありました。その伝達に当たった人物は、國務次官補ホルブルックであった。当時カーター政権における國務省の東アジア・太平洋地域担当の次官補。意見の公表がおこなはれた場所は、ニューヨーク市に在る日米協会でございます。

そこで行なつた演説の中で、彼は、明白に、一九八〇年代における米合衆國の基本的課題が、北大西洋条約機構、日本、およびANZUSとのあひだの同盟関係を強化し、三者を一体に統合することに在る旨を強調してゐるのであります。——「いふまでもなく、米合衆國がアジア・太平洋地域における安全保障体制の主要な一員として留まることの戦略的利益は、あま

りにも明白であると言はなければならない。しかしながら、そのためには、米合衆國と日本とのあひだの強力な関係を確立することが必要なのであります。これ無くしては、アジア・太平洋地域における強力な米國の政策は在り得ぬのであります。」

そして、彼は、さらに語を継いで、「この後、何年かにわたって、われわれは、日本を米合衆國および西ヨオロッパ諸國とのいやが上にも積極的な協力関係に引き入れるための歴史的な機会に、いくたびか直面するであります」とまで訴へるのであります。

この構想は、レーガン大統領の時代に入ってから、一層強化され、明確化されました。レーガン政権の世界政権における最も基本的な関係は、日本と西ヨオロッパ諸國とのあひだの同盟の関係を強化することなのであります。レーガン大統領自身、大統領就任宣誓の際にも、その決意を明白に述べてをります。「自由の理想をわれらと共に分かち合ふ隣邦および同盟諸國とのあひだに、米合衆國は、その歴史的結合を強化し、彼等に対する支持と誓約を堅持する。忠誠心に対しては、忠誠心をもって答へるであらう。——」

カーター政権当時の國務長官マスキーも、昨年十二月十九日、ロイター通信のインタビューに答へて、同様に重大な意味を持つ意見を述べてをります。彼は、北大西洋条約機構のアジア・太平洋地域への拡大に言ひ及んで、「日本は、北大西洋条約機構の正式の一員ではない。だが、事実においてはこの同盟の一員であると、米合衆國は考へてゐる」と述べてゐるのであ

ります。

日本の採るべき道はただ一つ

だが、このやうな自由主義諸國のあひだの全地球的な安全保障体制を創り出すためには、これを構成する國家の一つ一つが、可能なる限り強力な防衛の能力を保有することが前提であらねばならない。少くとも、米合衆國と、西ヨーロッパ諸國と、そして日本と、この三つの主柱がそれぞれに充分な防衛力を保持し、たがひに協力すること。それが協力の前提であり、条件であることは、言ふまでもありません。

事態は、すでに、自由主義全体の運命に直接の関連を持つ重大な危機にまで発展してゐるのであります。ソビエト連邦とこれを中核とする世界共産主義勢力の目的とするところが、共産主義世界革命である限り、そして、その目的の成就のためには如何なる兇悪の手段をも拒否せぬといふ事実が明らかである限り、日本の採るべき道は、ただ一つよりあるまい。自由主義世界の一員であり、支柱である事実を自覺する限り、自由主義世界の共通の運命を護るために進んで應分の努力を致すべきは、あまりにも当然のことと言はなければなりません。

その自由主義世界防衛に賭ける米合衆國の熱意がどんなに激しいかは、レーガン政権が、福

祉予算までも大幅に削減するといふ悲壯ともいふべき決意で、破局に近い経済の建て直しに必死の努力を重ねてゐる中で、国防支出にだけは思ひ切った増額を許してゐる事実一つを見ても、了解できるであらう。その防衛力確保のためには、第二次大戦当時の旧戦艦「ニュージャージ」や「アイオワ」などまでも、ふたたび現役に復帰させようとしてゐるのであります。これは、まさしく、戦時に準ずる姿勢と言はなければなりません。

もう一度、レーガンの大統領就任式における決意の表明を引きますならば、「敢へて自由の敵、われわれの潜在的敵対者に告げる。平和こそ、米合衆國々民の最大の願ひである。この願望を果たすためには、われわれは、交渉にも応ずる。自身を犠牲とすることを辞さぬであらう。ただ一つ、降伏だけは、断じて肯んじないのだ。現在も、また、未來においても——」。

これは、「緊張緩和」の仮面下の敵、ソビエト連邦に対する徹底的応戦の宣言なのであります。

「世界を覆ふ巨大な暗影」

ひとり米合衆國だけではありません。ヨオロッパにおける北大西洋条約機構の事実上の中核、西ドイツの首相シュミットも、また、四月九日、連邦議會での内外情勢についての報告の

中で、同じやうな決意を明らかにしてをります。「現在の世界には、これを覆ふ巨大な暗影がある。それは、世界の諸國が共に生きてゆく上の重要な原則を、ソビエト連邦が無視し、踏み及んで、一段と声を励まし、「もしソビエト連邦にしてポーランドに武力をもって介入するならば、それは、世界を完全に變へてしまふことになるであらう」とまで、警告してゐるのであります。

クレムリンは、はやくも、このやうな自由主義世界の動きに警戒して、これを阻止・抑圧するため必死の反撃に出ようとしてをります。フランス大統領ジスカールデスタン、西ドイツ首相シュミットに続いて、三月九日には、イギリス首相サッチャーにまで、ブレジネフ書記長の親書を送って、レーガン大統領がソ連首脳との会談に応ずるやう、説得を依頼してゐる。その動きの裏に在る狙ひは、言ふまでも無く、レーガンを孤立せしめ、米合衆國と北大西洋条約諸國とのあひだに對立を造り出すことであらねばなりません。このやうに、西ヨーロッパの主要な先進諸國に漏れなく働きかけて、その米國よりの離反を促さうとする外交的措置の連続は、ソ連建國以來六十余年の歴史にかつて見られなかつたことなのであります。

ソビエト連邦の首脳部が最も恐れ、最も警戒することは、自由主義世界の諸國がソビエト連邦を対象とし、目標として強固な協力体制を結成することなのであります。そして、これを阻

止するために何よりも利用すべきは、自由主義諸國のあひだの足並の乱れであり、対立と抗争の激化であらねばならない。

だが、西ドイツにおけるソ連戦略研究の権威、退役陸軍大將ウルリヒ・ドメジエは、労農赤軍の一將軍の言を利用して、「ソビエト連邦は、軍事力を、外交のための道具とは考へてゐない。彼等は、これを武器そのものとして考へてゐるのだ」と喝破してをります。これこそ、まさに、ソビエト連邦における指導体制の眞実の姿と言はなければなりません。

したがって、彼等をして軍事力の行使を躊躇せしめ、つひには思ひ止まらしめる道は、ただ一つだ。それが重大な危険を結果することを、彼等に深く思ひ知らしめることなのであります。

この人々の生死を超えた愛によって

いま、日本が迫られつつある選択は、ただ一つ。自由主義諸國——特に、アジア及び太平洋地域の自由主義諸國と緊く力を協せて、人類の自由と世界の平和とを飽くまでも護れるか。それとも、眼前の大陸に拠る巨大な共産主義の前に膝を折って、自らの祖国を失なひ、人類のすべてを独裁と虐圧の地獄に追ひ落とすか。そのいづれかであります。

しかも、この人類の運命を決定するものこそは、わが日本の動きであります。日本をその戦列に獲得し、これを完全に支配し、その力を存分に搾取し、駆使すること無くして、世界共産主義勢力の決定的な勝利は在り得ない。同様にして、わが日本を失っては、米合衆國も、西ヨロッパ諸國も、眼前の共産主義勢力最後の攻勢を撃伏して、世界の自由と平和を護ることは出来ない。そもそも彼等自身の安全を保障し、存在を維持することすらも、不可能であらう。戦後、すでに三十六年。いまこそ、日本は、占領の後遺症たる精神喪失状態を速やかに脱却して、祖國本来の面目に還らなければなりません。そして、それが同時に新しいアジアの曙となり、世界維新の大運動の発足の機会となることを期待したいと存じます。

その意味でも、四十年前の大東亜の戦ひは、新しい日本の発足点であったと言へませう。この戦ひに日本が掲げた戦争目的は、久しく西欧帝國の虐圧下に苦しんで來たアジア、アフリカの諸民族のために、その独立と自由とを奪還することであつた。

事実、日本は、この戦ひにおいて、自身を犠牲とすることによって、その戦争目的を遂げ得たのであります。インドも、スリランカも、オーストラリアも、また、マレーシアも、シンガポールも、ことごとく然りであります。今日のアジア・太平洋世界における日本の地位も、声望も、また、その結果である。

その戦ひのあひだ、私は、数多くの公職のかたはら、二つの大學で國際政治學を講じてをり

ました。戦ひの進むに伴って、多くの教へ子を戦場に送らなければならなかった。その今生の訣れの折に、送る者と、送られる者と、共に肩を抱き合つて、別れの宴を俱にしたことが幾たびかございます。

その時、必ず俱に歌つた歌。それは、皆さまはお笑ひになるかも知れませんが、いまも歌はれる「だんちよね節」でした。

戦況もやうやく悪化するに伴って、戦場におもむく若人の多くは、航空兵であつた。その人たちが別れの宴の終りに、必ず声を合はせて歌つたひと節は、「おれが死ぬ時や、ハンケチ振つて、友よ、あの子よ、さやうなら、ダンチヨネ。」

出征の人々の多くは、すでに結婚してをりました。妻も、子も、あつたのでございます。そのため、この後半の文句を変へて、「妻よ、わが子よ、ネ、さやうなら」と歌つてをりました。

火を噴いて燃え落ちる戦闘機の上で、白いハンケチを振つて、遠い故國のわが妻に、わが愛し子に、最後の別れを告げる悲しみが、どんなに彼等の心を打つたであらうか！「さらば、わが子よ、わが妻よ。父は、この南海の戦場に命を終る。だが、残る者たちの仕合せを、命かけて護つたのだ。必ず愉しく生きてくれよ」と、機上に別れの手を振る勇士たちの最後の姿。——会する者は、みな、頬を伝はる涙を拭はうともせず、肩を抱き合つて、飽かず歌つて

をりました。

あの日々の胸を裂く悲しみを、私は、今も忘れることが出来ません。また逢ふすべも無い勇士たちの笑って死に就いた心も、深く身に沁みる心地が致します。

この人々の生死を超えた愛によって、今日のわが同胞の仕合せは、わが祖國の榮光は在るのです。そして、アジアの平和は在るのであります。

歴史に学ぶ

—明治維新と現代—

文芸評論家

村
松
剛



元寇古戦場・籠原山

歴 史 の 見 方
過 去 と 未 来
歴 史 に 学 ぶ

宗 教 戦 争 と 日 本

歴史の見方

「歴史に学ぶ」といふ題で話しをすることになってゐますが、最初に出てくる問題は歴史とは何かといふことです。歴史といふのは、人生とよく似てゐる。どちらも取り返しがつかない、たった一回限りの事件の連続である、といふことです。あの時、ああすればよかった。もしあの時別の決断を下してゐたら、あるいはあの時もうちちょっと努力をしてゐたら、といふやうな思ひはだれにもあるはずです。すでに過ぎ去ってしまった事柄である以上、今さらそれを言つても意味がない。われことに於て後悔せずと宮本武蔵がいつてゐます。後悔しないやうに、一瞬一瞬に生命をうちこんで、努力して生きろ、といふ教へでもあるでせう。歴史もさうです。例へば、もしも織田信長が桶狭間で失敗してゐたら、あるいはもし日本が鎖国をしなかつたら、といふふうな議論はつきないところです。しかしこれもまた言つてみても仕方がない。要するに歴史も人生も一つの時間の流れであり、その流れをもう一ぺん溯ることは不可能です。理論的には光よりも早く走れば時間を溯ることも可能なはずですが、人間にはそれができません。四次元の世界には、現実には手を触れられない。逆説のないひ方をすれば、時間を溯れないからこそ、過去には手がつけれられないからこそ、歴史は美しいのです。ほろびしもの

は美しき哉。现实生活のもつ生臭さが歲月とともに消え、もうその形に手を加へることのできない芸術作品のやうに、歴史は立ってゐるのです。

歴史は一方的に進歩して行くのだといふ考へ方が、世の中にいまでも強く根を張ってゐます。これはひとつの迷信でせう。歴史は一方的に退歩して行く、といふ考へ方が迷信であるのと同じやうに迷信です。歴史が進歩するといふ考へ方は比較的新しいのでして、日本で言ふと明治維新以後、西洋で言へば十八世紀以後の発生です。過去の方が万時今よりよかつたといふ考へ方には何の根拠もないはずで、けれど今の方が過去より万事はるかにいいといふのも、あんまり根拠のある話ではありません。どっちも迷信だといふのは、それを指すのです。

例へば哲学一つを取つてもよろしい、と思ひます。今の西洋哲学者たちは、プラトンとかアリストテレスとかを一所懸命勉強してゐますが、彼らは紀元前四〇〇年代から三〇〇年代を生きた人たちです。釈尊はプラトンよりも少しはやく四〇〇年代のはじめに寂滅しました。孔子も同じころに死に、孟子はアリストテレスよりも十二歳若くて、紀元前二〇〇年代まで生きます。釈迦、孔孟、プラトン、アリストテレス。さういふ人たちが生きたこの時代を現在と比べたら、どう考へたつて哲学はいまよりもずっと榮えてゐたといふことになります。芸術を取つてみても優れた芸術を人類が生んで来た過程には一種のサイクルがありまして、古くは中期石器時代、この時代が洞窟に非常に見事な壁画を残してゐるのです。フランスのラスコーの壁画



といひ、スペインのアルタミラといひ、その大壁画は驚くべき名作です。新石器時代になりますと、日本の場合はちょっとこの定式はあてはまらないのですが、芸術は不思議に消えて、次は青銅器時代です。それも紀元前三〇〇〇年ころのシュメール、紀元前二五〇〇年ころのエジプトの壁画がすばらしくて、あとはエジプトだとトゥタンク・アメン(日本のマスコミ用語ではツタンカーメン)の生きた前一四〇〇年ころ、エーゲ海だと同じ時代のクノッソスが、絢爛とした芸術の花を咲かせます。その次は鉄器時代ですが、その初期はまるで駄目です。紀元前

一〇〇〇年ころに地中海周辺では鉄器文化の時代がはじまりまして、造型芸術が成熟するのは紀元前五〇〇年ころのギリシャです。あのギリシャの芸術に匹敵する美を、人間はその後生んだかどうか。ローマは大した芸術は生まず、ローマの滅亡後はもっと悪くなり、辛うじてルネッサンスの時代や天平から日本なら鎌倉時代までの彫刻がこれにやや近接してゐるでせう。現代の彫刻はどうである

か。芸術家たちはそれぞれ一所懸命仕事をしてゐるにしても、はっきりしてゐることは、そこには人間像が見失はれてゐるといふ一事です。

現代は経済的には、かつてない繁栄の時代です。この繁栄の時代は、一九六〇年ぐらゐから始まりました。六十年から七十年までの十年間の間に、日本のGNPは一人あたり四倍になったのです。ヨオロッパの当時EC六箇国もそれぞれ倍以上になりました、これは確かに進歩です。しかし、その六〇年から現在まで世界に見るに足る文学作品、美術作品が、ただの一つでも生まれただか。これはかなり重大な問題です。国際的に考へまして、アルベール・カミュが死んだのが一九六〇年です。アンドレ・マルロオはそれ以前から、少くとも小説は書かなくなつてゐた。この間死んだサルトルが最後の戯曲を書いたのが私の記憶では六十年でしたし、ヘミングウェイが自殺したのは六十一年でした。画家ではピカソもシャガールも大体この頃までに、最もいい仕事を終つてをります。川端康成さんの『眠れる美女』が、六十年ころの作ですね。現在は確かに繁栄の時代ですが、しかし、一九六〇年から二十年以上に亘つて国際的に評判になつた一級の芸術作品は一つもないのです。辛うじて三島由紀夫の、最後の四部作があります。これは殆んど例外といつていい。二十年以上にわたる芸術的不毛は、世界史上にも例がないのです。さういふふう考へていきますと人間の世界は技術面では確かに進歩してゐるにせよ、進歩などしない側面が明かにあるのです。

ところが十八世紀以来、つまり産業革命が始まった頃から、技術の進歩に刺激されて人間の文化全体について進歩信仰が出てきた。その信仰の波に、日本は明治維新のあとでちょうどぶつかったのです。日本は徳川時代を通じて、文化的水準はきはめて高い国でした。幕末に日本にきた西洋人たちが、一様にこれには驚いてゐる。但し技術水準は、低かったのです。といふのは鎖国の間が西洋では産業革命の時期でして、その間に技術較差ができてしまった。有名な話ですが、天誅組が文久三年に大和で挙兵します。文久三年といふと、明治維新の僅か五年前ですが、大和で挙兵して高取の城を攻めます。高取の城ではびっくりして大砲を取り出すのです。大砲と言つても家康の時代そのままの、つまり二四〇年前の大筒です。それを引っ張り出してきて丸い玉をこめて、燧石で火をつけて撃つたのです。よく二四〇年前の玉が出たと思ふのですが、その玉が攻めてきた侍の一人の頭にあつたのです。そしたらその侍の頭が割れて、お陰で彼は三日間耳鳴りがして眠れなかつた。これは実話です。疑ふ方は天誅組の記録をお読みになるといい。何といふ牧歌的な、ロマンティックな時代だったらうかと思ひます。しかし、これでは西洋の侵略には対抗できない。だから事態を悟つた日本人はそれ以来何とかして工業力を身につけ、西洋に追いつかうといふことを百年間考へてきた。この努力が今日の日本を作つたのですが、これが一方で日本人のものの考へ方にある種の歪みを与へてしまったことも事実です。それは例へば、文化に対する考へ方にも現はれてゐる。

文化といふ文字の入った言葉を、思ひ出していただきたい。文化塀、文化住宅、文化鍋、文化包丁、進歩的文化人などといふ変なものもあつて、だいたい碌でもないものに文化といふ字がくつついてゐる。かういふ文化住宅的文化観が、どうしてできたか。やはり西洋並みの物を作り出す、それこそが文化なのだといふきはめて唯物的な、片寄った文化観が近代日本を支配してきたからです。もちろん物も技術の所産ですから文化の側面であることは疑ひを容れませんが、それだけが文化かといふとさうではないのです。文化とは何か。それは人間の生き方の総体です。つまり、どんなに美しい日本語を喋るか、どういふおいしい食べ物を作つて味はひ分けるか、どういふ着物を作り出して品よく着こなすか、これが文化です。生き方は、地域により民族によりいろいろ違ひますが、それぞれの集団が作つてきた生き方の総体が文化です。さういふ当り前の事実が、明治以来の物質的なもの考へ方によつてとかく見失はれがちでした。歴史についても同じでせう。

進歩信仰は歴史が進歩といふ法則に基づいて動いてゐる、といふ考へ方です。その一変種がマルクス主義です。マルクス主義の歴史観では、社会を動かしてゐるのは生産関係であると教へてゐます。だから歴史の中の個々の人間が問題ではない、と共産党は主張してゐますし、われわれの立場は科学的社会主義だなどと宣伝してゐます。本気で、さう思つてゐるのでせう。唯物史観では過去・現在の権力はみんな悪で、歴史とは大衆の権力との抗争の歴史であるらし

い。例へば奈良の大佛を作ったのは農奴であるといふやうなことを、平気で言ふのです。冗談じゃないのでして、奈良の大佛を作ったのもし奴隷だと言ひたいのなら、つまり現場の労働力だけが問題なら、本当に奈良の大佛を作ったのは牛であるといふことになります。ものを運んだのは牛でせうからね。牛に文化が、形成できるわけがありません。奈良佛教は国家鎮護のためのものだったといふ。さうかも知れませんが、しかし鎮護といふ以上、民を護る気持を天皇はお持ちだったのですし、民衆にもその信仰があったから鎮める方にも役立ったのでせう。当時の人々の心にあった信仰といふ一番大事なものを抜きにするから、大佛の、いひかへれば歴史の、本当の姿が見えなくなり、人間が消えてしまう。

唯物史観は実を言ふと大もとはキリスト教、さらにそれを遡るとユダヤ教から出てゐるので。一神教の考へ方によりますと、すべては神の意志の表現です。一神教の世界観では一日一日の歴史が、すべて神によって作られて行く。かういふ考へ方は、日本人には一般にわかりにくいはずで。日本の神々は天地創造の神々ですが、歴史創造の神々ではありません。一神教の特質は神が宇宙を創造しただけでなく、歴史そのものを神が担つてゐるといふ考へ方にあります。

それを近代的に表現したのがヘーゲルでして、ヘーゲルは神といふ代りに絶対理性といふことばをつかつてゐます。絶対的に理性的なるものが、この宇宙を動かしてゐる。ヨハネによる

福音書では「はじめにことばありき。……ことばは神なりき」でしたが、この一神教の基本にある原理を、生産関係に置き替へたのがマルクス主義です。しかも、マルクス主義はユダヤ教の末期に出てきた天国信仰を受けついである。つまり今は苦しい。しかしいつの日にか黙示録の時代といふのがきて、最後の審判があつて、悪いのはことごとく滅び、選ばれた人間だけが天国に行く。この考へ方がキリスト教を経てマルクス主義に、そのまま入つて来たのです。しかし無階級天国信仰は問題外として世の中がさういふふうにある必然性をもって、本当に動いてゐるか。歴史に必然といふものはありません。初等物理学の法則は必然の世界でせう。物理学でも高級化すると、蓋然性の世界になりますし、現実の世界も必然性をもって展開してはなりません。簡単な話をしますと石が屋根から落ちるのは、いくつかの力が作用して落ちるのである。それは必然性ではなく、その日の風向きとか、いろんな条件が重なつて落ちて来る。その下に人間が通りかかつたとすれば、これは偶然です。

宇宙の蓋然性の世界を縫つて、人間の意志が生きて行くのです。

過去と未来

それでも人間は、何とかして先のことを知りたいと考へる。未来のことはわからないと思ふ

と、一層不安になる。易は、いつの時代にも盛んです。その易が未来学といふ名まへになったりもします。電子計算機を使ったりしても、やはり経済予測だつてなかなか当たらない。人間といふ複雑な存在のつくり出す未来は、そんなに簡単に数式化できるものではないのです。

人間はうしろ向きに未来にはいつて行くとは、ヴァレリーの有名なことばです。人間にわかつてゐるのは、過去だけです。だから過去の知見を未来に適応しようとして、「うしろ向きに」人間は未来に歩んで行く。ヴァレリーの言つてゐるのは、さういふことでせう。しかし歴史は二度と同じ形ではくりかへさないので。同じ恋愛体験は二度となく、同じ子は生まれません。だれでもが知つてゐる事実ですが、人間に錯覚は尽きないらしい。「戦争に法則などない」と若いころのド・ゴールは強調してゐます。彼は自分の体験から、戦争が常に思ひもかけない事件の連続であることをよく知つてゐたのです。戦争は政治の、ある非常に劇的な表現です。すから、戦争に法則がないといふことは、つまり政治には法則がないといつてゐるのと同じです。ところがド・ゴールによれば士官学校の秀才たちは、過去の戦訓ばかりで頭をいっぱいにしてゐて、そこからとり出された法則を現実に適用しようとするから間違ふ。

日露戦争の時に旅順を攻めた日本軍は、おびただしい損害を出しました。だから乃木さんは愚将である、と言ふ人がことに敗戦後多いけれど、私は必ずしもさうは思ひません。あの悲劇は、乃木さんの問題だけではなかつたのです。あの当時の日本全体の問題だつた、と申せませ

う。当時旅順港にはロシアの東洋艦隊がをりまして、日本ではこの東洋艦隊は日本陸軍が満州に渡るのを妨害するために、当然港を出て来て暴れ回るだらうと思つてゐたのです。だから旅順の要塞など竹矢来で囲つておくと、総參謀長の児玉源太郎はいつてゐたほどでした。ところが東洋艦隊は、かきのやうに港に閉ぢこもつて出て来なかつたのです。これは主として戦略思想の相違に起因してゐます。ロシアにはフォートレス・フリード・ドクトリンといふ戦略哲学があります。フォートレスは要塞でして、要塞艦隊主義です。一つの要塞の中に艦隊を置いておけば、それだけでその周辺の海には敵は近寄らないといふ考へ方です。その要塞艦隊思想といふのが、日本人には理解できませんでした。日本の海軍が学んだイギリスには、要塞艦隊主義思想などありません。陸軍の要塞に艦隊を守らせるのですから、これは陸軍国の思想です。バルチック艦隊を待つといふ考へもむろんあつたのですが、とにかく出て来ないからどうしてもこちらは、旅順の要塞を潰さなければならぬことになりました。ところが要塞を潰すといふことは、ヨオロッパの常識ではまず大砲を何十万発も打ち込んで相手の壁を砕き、そして初めて攻城戦といふ順序になります。乃木さんが連れて行つた伊知地といふ參謀長はフランスで勉強して、帰国して砲兵監になつた男です。ヨオロッパ型の常識を、頑固に持つてゐる。ところが大本營の方には、そんな準備はありません。何とか攻めてくれ、早く潰さないとその内にバルチック艦隊が来て、日本は二つの艦隊を相手に戦争をしなくてはならなくなる。さういつて、

攻撃をせかします。参謀長の伊知地は歩兵の用法を知らないうへに、頑固で融通がきかない。真正面からの肉弾戦を繰り返さざるを得ないといふ悲劇が、ここに生じたのです。その悲劇の渦中に立たされたのが乃木さんでした。乃木さんの「愚将」ぶりをわらふまへに、当時の日本が置かれてゐた情況、ロシア人の物の考へ方、さういふものを全部測つた上で自分を乃木さんの立場に置いたらどういふことになるか。ここで初めて歴史といふものが、生きて来るのです。

この旅順の戦訓を、ヨオロッパ人はじつと見てをりました。旅順は城攻めですが、野戦でもこれからはまず大砲と機関銃が前面に出て来る。旗を翻して歩兵が突貫するといふのは勇ましいかも知れないが大砲の前では無力である、といふことを主張したのがフランスの中佐ペタンです。ところが当時のフランスの参謀本部は、ペタンを相手にしませんでした。そのうちに第一次世界大戦がはじまり、事態はペタンの言った通りに動いて行つた。ここでやうやく参謀本部は「砲火は人を殺す」といふペタンの言葉の意味を悟つたのです。ペタンは四年間で、中佐から元帥になりました。そのペタンの弟子がド・ゴールです。フランスはマジノ線といふものをドイツとの間につくりました。地下要塞で、冷暖房装置がついて、中を鉄道が走つてゐました。フランスの全国防予算をそこに注ぎ込んだのですが、その時にド・ゴールは、とんでもないことである、といひました。まづ第一に、要塞を作つてその陰に隠れ、他の国と軍事同盟を

結んでも、他の国が助けてくれるわけがない。自分は要塞のかけにかくれて、おまへだけ戦へといふのでは先方もうんざりして軍事同盟は発動もしなければ機能もしないであらう。二番目に戦車が出現して来た以上、戦車の集団の機動力で要塞線は破られてしまふ。さう主張したのですが、誰も聞かなかつた。ところが第二次大戦が始まるに及んで、こんどはド・ゴールの言ふ通りになりました。彼は当時大佐だったので、臨時の准将になつて戦車師団の指揮を命じられ、次には国防次官になり、敗北後はイギリスに逃れて准将の身で自由フランスを組織するのです。

過去を振り返るのはいいけれど、過去に縛られてゐる人間には未来は見えない。しかし、同時に私たちにとつて唯一の財産が過去であることも事実です。未来を見るためにはやはり過去に学ばねばならない。過去に学ぶといふことは、過去に縛られることではありません。逆に過去を軽蔑するところからは、何事も出ては来ないでせう。残念ながら敗戦後の日本では、過去はすべて悪かつた式の歴史観がずい分長い間横行しましたし、今日でもその気配が濃厚です。理由の一つは、敗戦による自己嫌悪症です。フランスとかドイツとか、ヨオロッパの戦争の中で生き続けてきたすれっからしの国々でさへ、敗北時には激しい自己嫌悪症を起して来たものです。日本の場合は史上最初の敗戦でしたから事態は更に深刻でした。そして加ふるに、東京裁判といふものがあつたのです。東京裁判はまことに無茶な裁判でして、戦勝国が敗戦国を

一方的に有罪だと決めつけた。つまり彼らは、歴史を裁いたのです。

歴史を裁くことができるのは、神だけであるはずで、最後の審判に類することを、平気で彼らはやってのけました。のみならず、自分たちに都合の悪い証言は一切これを拒否したので、私はあの東京裁判は、許し難い行為だと思つてをります。ただしもっと許し難いのは、これを丸呑みにしてしまつた日本人の方でせう。当時の日本人は空襲によって痛めつけられ、生活は我慢の限度まで殆んど来てゐました。それに戦争末期には、陸軍の軍人の高慢さに対する恨みもひろがってゐたのです。そのやうな下地もあつて、東京裁判イデオロギーを受け容れた。さらに左翼の革命勢力の意図が合はさり、過去に対する自己嫌悪、といふよりは憎悪大合唱が起りました。天皇制も元号もいけない、防衛力を保持することもいけない、つまり日本が国家の体裁を持つことが一切いけないといふやうな風潮の根は、ここにあるのです。くりかへしますが、歴史は学ぶ対象です。過去を捨て去つたり、過去を憎悪の目で見ようとする態度のままへには、歴史は姿をあらはしません。さういふ考へ方からは、未来への智慧もまた出ては来ないのです。

歴史に学ぶ

一般の史書よりは歴史小説や歴史を描いたドラマを読んだほうが、誰にとっても面白いでしょう。教科書の教へる歴史は昔も無味乾燥でしたが、今はもっとさうです。歴史小説の方が何故面白いかと言ひますと、あそこには歴史上の「もし」が生きてゐるからです。歴史に「もし」は、むろんありません。歴史はすでに完結した世界です。ところが歴史小説の魅力は、その「もし」をもう一ぺん目のまへにおいてくれるところにあります。例へば織田信長を描いた物語の場合ですと、作者は桶狭間前夜の織田信長の立場に読者を立たせます。こちらは結果を知つてゐるのですが、にもかかはらずもう一ぺんそこで奇襲に成功するかどうか不安をもつて見まもる。作者の筆力で、いつの間にか自分が信長にさせられてゐるのです。つまり歴史の終了させた「もし」を、もう一ぺん生きる。ここに一般に歴史小説の持つ面白さがある。だからと言つて私は何も通俗的な歴史小説やTVドラマを、推薦してゐるわけではありません。申し上げたいのは、歴史小説が寄つて立つてゐるその基盤の大切さです。過ぎ去つて二度と帰つては来ない過去に、もう一度自分を立たせるといふこと、その時に私たちは、まさに歴史の中を生きてゐるのです。歴史の魅力の中心的な部分が、ここにあります。歴史に学ぶみちも、これとべつにはあり得ません。

例へば明治維新の時に、自分がその場面に立たされてゐたらどういふ態度をとつたか。あるひはもっと遡つて豊臣秀吉の時代に、秀吉の立場に立たされたら、どういふ外交上の態度を

取ってゐたか。秀吉は朝鮮に出兵しました。今でも韓国に行くところ、その被害を聞かされます。韓国は半島ですから南と北と両方からの侵略の場にされまして、百何回か侵略を受けたさうです。そのうちで一番ひどかったのが蒙古にやられたときと、秀吉の出兵だったといひます。特に加藤清正が、ずい分寺などを焼いてゐるのです。では秀吉は、どうしてあんなことをやったのか。ある人々は秀吉は晩年脳軟化症状を起こしてゐたのだと言ひますが、冗談じゃないので、脳軟化症のいふとおりにあれだけの軍隊が動くものではないのです。秀吉といふ人は、大変な外交家でした。

秀吉は朝鮮出兵したその同じ時期に、マニラに降伏勧告の使者を送つてゐるのです。マニラの総督は、びっくりしました。スペイン、ポルトガルは、それまでにアメリカ大陸に上陸してマヤ、インカ、アステカを滅ぼし、フィリッピンとマカオとを占領して最後は日本だと思つてゐたら、日本のはうから降伏勧告の使者が来たのです。白人としては初めての経験だったので、そこで何が何だかよくわからないといふことにして、秀吉の名護屋の陣営に使者を送りました。その使者について来たのがフランシスコ派の修道士たちだったので、この修道士が人質として残った形をとって勝手に京都周辺で布教を始めたのです。それで秀吉は、激怒しました。降伏を勧告したら宣教師が来て勝手に布教を始めたのです。それで秀吉は、激怒しました。降伏を勧告したのには、理由があるのです。そのまへの織田信長はキリスト教のイエズス会の

宣教師たちを、非常に優遇しました。フランシスコ・シャヴィエルが日本に来て、日本の教育水準は非常に高いから布教に適してゐるといふ報告書を出しましたので、イエズス会士たちがどっと訪日したのです。これはある意味で、ヨオロッパの宗教戦争の余波を日本が受けるといふことにもつながって行くのです。プロテスタントとカトリックとの宗教戦争の渦中に出来上がったのが、イエズス会でした。その頃カトリックの教会、つまりローマ法王庁と、スペイン、ポルトガルとは同盟関係にあり神聖同盟のいはば前線部隊としてイエズス会は活躍してゐました。簡単に言へば布教とともに、侵略の手先の役を演じたのです。日本にもこの国を占領するつもりで来ました。ところが来てみて驚いたことには、彼らが来るより少し前に日本には鉄砲が伝来して、宣教師たちが来た頃には日本全土に十万挺ぐらゐの鉄砲があつたのです。これは白人にとっては、信じられない事件でした。そこで日本巡察士のヴァリニアノが本国に手紙を書いてゐます。「日本占領は諦めたほうがいい。兵隊が強すぎる」。それに「無理してこの国を占領しても、この国には資源がないから無駄である」と書いてゐるのです。その辺今と余り変らないのですが、それでも出先のイエズス会士たちは何とかして武力を使って日本を征服しようとする考へを捨てませんでした。日本が駄目なら、明を占領しようとも考へた。明は武器が日本より貧弱でしたが、ただ占領には兵力が足りません。兵力はヨオロッパから持って来るのですが、当時の船は一隻にせいぜい三百人程度しか乗せられません。そんな程度の船で

ヨオロッパからはるばる大兵力を持ってくることは、非常に困難です。三百隻を動員しても、兵力は一万しかはこべません。そこで再び、日本の問題が浮上して来るのです。

日本のキリシタン大名を使って、すなはち日本の兵隊を明に持って行って戦はせたらいいと考へたのです。秀吉の方は信長の時代に一向一揆との戦いで宗教の持つ恐しさを身に滲みて知ってゐました。一向一揆は国内の宗教信者ですが、カトリックは外国の宗教で、しかも外国の勢力と結びついてゐる。そのキリスト教徒の軍隊が万一攻めて来た場合、日本のキリスト教徒武士は十字架に対して鉄砲は撃てませんから、当然向うにつくでせう。それをやられたら大変だと、秀吉はかねがね思つてゐたのです。もしも明をスペイン、ポルトガルが抑へた場合には、明がアジア経営の基地になります。当時の日本人が知つてゐた侵略とは、元寇です。元がシナ大陸から海を渡って攻め込んできた。白人が明を支配したら、同じことが起こるんじゃないか。これを秀吉は心配したのです。そこで秀吉は、不思議な外交を展開してゐるのです。

小西行長と平戸の領主松浦、この二人がマニラに使者を送つて、「明と戦ふおつもりならばわれわれがいつでも援助しませう」と言つてゐるのです。小西行長が秀吉の許可なしにこんなことをやれるわけがなく、秀吉が明らかに小西、松浦に命じてさういはずと解するべきです。つまり明を白人が占領して勝手なことをされたら、今度は日本が危ない。だから日本が軍事力を提供することによって、向うが明を根拠地にして日本を攻めることのないやうにしよ

う。これが秀吉の判断でせう。この工作は、さうとしか理解のしやうがないのです。そして事実、この小西行長と平戸の松浦がマニラ総督にさういふ提案を行なった直後に、秀吉自身は日本のイエズス会の長、日本はまだ準管区だったので準管区長になりますが、コエリヨといふ男を大阪城に呼びます。あなた方は明を攻めたいのだらう。それなら兵力は日本が提供しませと、いつてゐます。そのかはり外航用の船を日本に貸せ。明に渡海するための軍艦を二隻、船員つきで貸しなさい。日本は外航用の大艦を製造する能力を、当時持っていなかったのです。それを寄せといふことを、コエリヨに秀吉は要求したのでした。これは小西行長に言はせたことと、同じ戦略の表現です。要するに明を、白人だけに占領されては困る。軍事的要衛は、日本がある程度押へておかなければいけない。ただそのためには日本には船がない。スペイン、ポルトガルには兵力がない。それなら両者協力して明を占領しよう。あなた方は明の中で、カトリックをいくら布教してもよろしい。日本は寧波あたりの軍港を抑へる。これが秀吉の考へ方だったやうです。

翌々年、天正十五年に、秀吉は九州に来ます。九州でコエリヨに、再会するのです。コエリヨに会ふまでに秀吉は九州を一巡しまして、キリシタン大名によって無数の神社やお寺が焼かれてゐるのを目撃し、激怒してゐます。その秀吉が博多にゐる時に、コエリヨが軍艦に乗って訪ねて来るのです。外海航行用の船を持って来たのではなくて、外洋には出られない平底船に

乗り、しかも重武装して、提督のやうな格好で現はれたといひます。それで秀吉は、怒りました。カトリック教会は日本と協力する意志を持たないのみならず、軍事力をもって秀吉を恫喝しようとしてゐる。日本を占領する計画を、捨ててゐない。そこでコエリヨと会ったその日、六月十九日のうちに、秀吉は外国人バテレン追放令を布告するのです。つまり秀吉の出した外国人バテレン追放令は、ポルトガルと同盟関係が結ばずに、逆にキリスト教勢力が日本を占領しようとしてゐる、といふ判断の結果であり、そのことに對する報復措置でした。もしもコエリヨがこの時に秀吉の言ひ分を聞いて軍艦二隻を持ってきてゐたら、——これが重要な「もし」ですが、——日本・ポルトガルの連合艦隊が出来上がってゐました。さうするとその後の日本の運命は、ずい分変わったらうと思ひます。少くとも朝鮮經由、明に行く必要はなく、朝鮮出兵はなかつたはずで。

かういふことでポルトガルとの連合艦隊が成立しなかつたものですから、マニラに降伏勧告の使者を出したのです。ところがマニラからフランシスコ派が来て、勝手に布教を始めたので秀吉は侮辱されたと感じました。外国人バテレン追放令を出し、イエズス会士を実際に追放はしなかつたまでも、とにかく九州に押し込めたと思つたら、フランシスコ派が勝手に布教を始めました。これは見逃し難い侮辱であるといふので、日本人も含めて二十六人を擱まへ、わざわざ長崎まで引張って行って処刑したのです。何のために長崎まで連れて行ったのか。海外に對す

るデモンストレーション、つまり外交です。一方イエズス会とマニラ総督府も、負けてはいません。この二十六人を、聖人にしたので。キリスト教徒は日本で其の後、十万を単位とする数が殺されてゐますが、秀吉に処刑された二十六人だけが聖人です。秀吉の処刑も外交手段なら、これをすかさず聖人にしたのも外交です。秀吉は明に直接行く道を断たれた。そこで今度朝鮮に使者を出すのです。「明に軍隊を送るから通してほしい」。朝鮮のほうが許すはずはなく、朝鮮出兵といふことになりました。朝鮮出兵もまた、今申しました大きな外交の枠組みの中で見なければならぬ。ところが現代の日本の歴史家は不思議にかういふ問題について触れようとしないのです。

家康の大阪攻めだって、さうです。徳川家康はイギリス人を政治顧問にしてみました。三浦按針です。イギリスは当時スペインと交戦中でしたし、オランダもスペインと戦争をしてゐました。だからイギリス、オランダなどのプロテスタント国は、カトリックの悪を家康に大いに吹きこんだのです。家康も三河の一向一揆を、経験してゐます。秀吉以上にある意味では宗教の恐ろしさを知つてゐましたし、当時のスペイン、ポルトガルなどのカトリック勢力の侵略意図をよく知つてゐました。ただし彼は秀吉と同じやうに貿易は推進するつもりでをりましたので、三浦按針の力を借りて太平洋を横断する船まで作つてゐるのです。ところが秀吉の息子の秀頼は、カトリックに対して好意的でした。秀頼のカトリックびいきは当時有名で、大阪城に

は宣教師がゐたのです。家康が何より恐れてゐたのは、大阪城がカトリック勢力と結びついてスペインの支援下に戦ふといふ事態だったのです。大阪攻めに先立って家康はキリシタン禁令を出し、加賀にゐた高山右近を大阪冬の陣のその年に、フィリピンに追放します。大阪城が落ちてからしばらくあとが島原の乱です。江戸時代を通じて日本人の中には、キリスト教に対する恐怖心が強く残りました。島原の乱以後徹底的な鎖国令が出るのですが、鎖国と言っても朝鮮との貿易はそのままでしたし、オランダ、イギリスとも幕府は交易をつづけようとしてました。イギリスは興味を持たないで、来なくなつたのです。正確に言ふと鎖国といふよりは、キリスト教社会と日本は縁を切つたのです。

さういふ一連の事件後二百数十年を経て、幕末にペルリの黒船が来た。その時日本人は何に一番恐怖心を持ったかと言ふと、またキリスト教徒が思想侵略に来た、しかもかつてないほどの軍事力を持つてきた、といふことです。明治維新の思想的起爆剤は、キリスト教の侵略―思想侵略ですが―にたいする歴史的恐怖心だった、と言って差しかへないと思はれます。秀吉や家康が警戒してゐたのはカトリック諸国による直接の軍事侵略ではなく、武士が洗脳されてしまふことでした。キリシタンは秀吉の時代には流行でしたが、眞面目に信仰を抱いた武将も少数ながらゐたのです。

高山右近と内藤如安とが、さうでした。苦勞人の秀吉は本物の信者と流行のキリシタンかぶ



れとを見分ける力をちゃんともってゐまして、外国人パテレン追放令のあとで本物のこの二人を呼び、信仰をとるか大名の地位をとるか、どちらかをえらべと迫ってゐます。彼らは信仰をえらぶとこたへ、加賀に預けられることになりました。

幕末の思想家が、水戸の会澤正志斎、萩の吉田松陰以下怖れたのは、やはりこの思想侵略です。
(日程上はこの後「質疑応答」の時間であったが、前半の講義を補足する形で更に講義が展開された)

宗教戦争と日本

日本は西洋の宗教戦争の影響をまともに受けた唯一の国である、と申し上げてよろしいでせう。宗教戦争は、一應カトリックとプロテスタントとのあひだの戦争です。そしてプロテスタントといふのは、ルターの有名なカトリックに対する九十五ヶ条の糾弾状に端を發した運動であるといふふうに、常識的には理解され

てゐます。確かにさうには違ひないのですが、実はそれだけでは言ひ尽せない問題がここには含まれてゐるのです。十五世紀から十六世紀にかけてのヨオロッパは、統一国家群の出現期だったのです。統一国家群の形成過程の軋みの大爆発が、宗教戦争でした。統一国家の出現にヨオロッパでは非常に厄介な問題が一つあって、それがローマ法王庁だったからです。ローマ法王庁はその支配下に大小の教会を持ち、各教会は教会領をもつてゐまして、法王庁はそれ自体一つの分散された大国家だったのです。統一国家をつくるのには、これをどうにかしなければならぬ。

統一国家がどうやって出来て来たかと申しますと、鉄砲と大砲の発明です。大砲の整備には、鉄砲よりもっとお金がかかる。十七世紀の初頭にトレントを攻めたフランス軍が浴びせかけた砲弾の数が十五万発、と伝えられます。これは日露戦争の時の旅順港総攻撃(第一回)で日本軍が使った砲弾数より多いのです。当時としては、大変な費用でせう。そのかはり中世型の騎士団では、これに対抗できません。歴大な経済力を握って大砲を装備した君主が出現したら、地方豪族などは全部征服されてしまふ。つまりは、中央集権国家の成立です。封建地主は軍事力の牙を抜かれて、ただの宮廷官僚になるのです。ヴェルサイユが、その明快な表現でせう。日本はそこまでは行かなかつたのでして、鉄砲は輸入され日本で大量生産したけれど大砲はわづかしかない。大砲を馬で曳く技術が導入されなかつたので、戦場にもって行けず、あま

り役に立たなかつたのです。大砲を揃へてゐなかつた徳川政権は、奇妙な形の政権になりました。幕府は一應は中央政権なのに、大名の軍事力の牙を抜くまでにはいたらなかつたのです。だから江戸時代は、徳川中央政権と各地に独立した大名のゐる封建制度との、奇妙なアマルガムです。ところがヨオロッパの場合は、大砲の力で一気に統一政権がつくられます。その過程で邪魔になつたのは全歐に大司教領、司教領をもつローマ法王庁ですから、ローマ法王庁と各国との冗巴の戦争になるのです。約百年以上続いた宗教戦争は、ある意味では大砲が原因だつたと云つても過言ではないでせう。

この宗教戦争の波の中を、うまく生抜いたのがイギリスです。イギリスは早くローマ教会と縁を切つて英国国教といふものを作り、イギリス国王が国教会を支配下に置きました。フランスの場合も、比較的うまく行つた方でせう。フランスはガニカリズム（フランス主義）と呼ばれる政策を採り、教会の大司教、司教の任命権をローマ教会と交渉して国王が握つたのです。それでもフランスはその後、バルテルミーの大虐殺といふ有名な新教徒虐殺を起こしてゐますが、とにかく混乱を何とか生き延びた。この対立の波を生き延びそこなつた例が、ドイツです。ドイツは神聖ローマ帝国の時代でして、皇帝は当然カトリックです。神聖ローマ帝国の後継者ですから、法王から皇帝は加冠されます。ところが諸侯の方にはプロテスタントがゐたり、いろいろですから内戦が続き外国の軍隊が入り三十年戦争といふことになる。この時の分

裂がゲルマン国家の成立を遅らせて、ビスマルクの出現までドイツは統一出来なかった。ビスマルクがやっと統一したのですけれど、元神聖ローマ帝国の根據地、オーストリアは別でしたから、ゲルマンの大統一には手が届かなかった。それを初めて実現したのが、ヒトラーでした。しかしご承知の通りヒトラーの帝国は悲劇に終り、ドイツはいまだに分裂してゐます。イタリアはどうかと言ふと、法王庁が真ん中にゐまして事あるごとにイタリア全土の統一を妨げてきました。だから中世いろいろの都市国家群が、その後も残ってしまったのです。おまけにイタリアの場合、南部と北部と人種が違ふのです。北部はゲルマン系が早い時期から入つてゐますし、南部はアラブ系です。さういふ人種問題も加はつて、いまだにイタリアは統一国家としてうまくいかない。申しあげたかったことは、ヨオロッパ十六世紀の宗教戦争をうまく切り抜けた国が、今日でも栄えてゐるといふ事実です。ここで失敗した国は、その傷から今日でさへ立ち直つてゐないのです。この新教側と旧教側との対立が、外では植民地争ひになつてあらはれました。

日本が独立国として強力でなかったら、フィリッピンのやうに植民地にされてゐたでせう。ところが日本は断固として独立国としての地位を守りました。秀吉にしても家康にしても、決してTVドラマに出て来るやうな凡庸な人物ではなく、当時の世界の中でいかに外交的に切り抜けるかに苦心した人々です。独立国として生きる以上、さうせざるを得ません。そして終局

的には日本は、ヨオロッパの宗教戦争の余波であるイエズス会を拒否し、キリスト教社会すべ
と縁を切るといふ形で、その独立を保たうとしたのです。ところがそれ以来二百年を経て
ヨオロッパでは産業革命が進行し、さらにナポレオン戦争の圧力から解放されたヨオロッパ諸
勢力が、日本近海まで来ることになりました。もともとペルリの黒船までは、日本人はさほどの
恐怖心を抱きませんでした。外国船撃拂令といふものが、出てゐたほどです。なぜペルリの来
艦に日本人が震へあがつたかといふと、その理由は簡単です。ペルリがつれて来た四隻の軍
艦、サスケハンナイ以下の四隻は、ボンベ・カノンといふものを積んでゐたのです。ボンベ・
カノンといふのは、砲弾の中に火薬が入ってゐるのを発射する砲です。

一八二五年にフランスのペクザンといふ軍人が、戦術輪の本を書いた。軍艦も中に火薬の
入った砲弾を積むべきだ、といふ主張です。それまでの海軍は、鉄丸をとばしあつてゐまし
た。中に火薬をいれずと、そのぶんだけ鉄丸の重味が減って衝撃力が減少するのです。しか
し鉄丸では、命中しても船は沈みません。穴があくだけです。トラファルガーの海戦で、砲弾
で沈んだ船は一隻もなかったのです。軍艦も陸軍と同様に大型の榴弾砲を採用し、その重量
に耐へて運動性を保つために蒸気機関を併用すべきだ、といふことをペクザンは主張しまし
た。帆船の技術は当時非常に発達してゐまして、逆の方向から風が吹いて来ても走れるやうに
なつてゐたのですが、風が全然ないと動けませんし、小回りがきかない。だから蒸気機関を併

用すべきだ、といふ考へ方です。この本が非常に多く読まれて、当時の清で英訳からの漢語訳が出てゐたのです。これを吉田松陰は、平戸で読んだ。もうこの時期には日本人は、蒸気機関とボンベ・カノンとは一対であるといふことを知つてゐたのです。松陰がベグザンの訳本を平戸で読んだのが嘉永三年で、三年後にペルリの艦隊がボンベ・カノンを積んで江戸湾に来た。中に火薬が入った砲弾が落ちれば、江戸は火の海になります。これで江戸中が震へ上がったのです。日本人は吉田松陰にしてもあるひは松陰より先輩の高嶋秋帆や佐久間象山にしても、西洋の事物を知ることについては実に敏感でした。知つてゐたから、不安に駆られたのです。ペルリが軍事力を持つて行なつたことがらは、明かな恫喝外交でせう。まともな神経を持つてゐたら、大砲で脅かされて国を開くなどといふ降伏に等しいことはできません。攘夷を当時の人々が謳へたのは、むしろ当たり前です。ただし幕末のまともな攘夷論者の中で、本当に攘夷がつかぬかと思つたひとはゐないのです。開国は窮極的には不可避なのだが、日本人の魂といふことを考へた場合には攘夷を主張して、その両面で行かなければいけないといふのが、水戸の徳川斉昭以下、松陰にも桂小五郎にも共通の考へ方でした。一方幕府の方は、幕藩体制という封建制度と中央集権の混淆形態、これは外国からの侵略がないから維持出来たのでして、いよいよ外からの危機が現実化したときには、六百万石の大諸侯にすぎない幕府にはこれに抵抗する経済力も軍事力もありません。幕府の担当者はそれを知つてゐました。幕府に自信がな

くなれば、一体どこに国の中心としての權威を求めらるか。これは天皇以外に、なかつたので。幕府の威信が低下したとき、自然に彼らは天皇といふ古くからの權威にすがらざるを得なかつた。

日本といふ国は、權威と權力とを巧みに分けて来たのでした。權力の中心が藤原氏にあらうと、平家、源氏、北條氏、足利氏、次には徳川の手中にはいらうと、朝廷はつねに權威の中心でした。徳川の權力が衰へれば、朝廷がごく自然に國民的の中核となります。この構造があつたからこそ明治維新といふ大革命—と呼んでよろしいと思ひますが—を日本は非常に少い流血で生き抜くことができたのです。さらに日本の幸せは、明治時代を通じて近代化の推進者と精神的指導者とが同一人格の中に融合されてゐたことです。明治天皇です。そのおかげで維新以後の文明開化時代も、日本人は新旧両派間の内戦なしに生きのびられました。

現在の世界を見回して、經濟は別として、社会的、政治的に安定してゐる国はどこかといふと、まず北歐三国でせう。イギリスはアイルランド問題を抱へてはいますが、一応安定してゐるといってよい。それからニュージーランド、オーストラリア、カナダ、みんな立憲君主制の国々です。共和制の国といふのはどうも不安定でして運営がむづかしい、大統領に強權を与へ過ぎると、元首が政治に直接まきこまれて、ニクソンのウォーター・ゲイト事件のやうな騒ぎが起りかねません。かと言って大統領をシンボルとして行政府から外しますと、元首はその

民族の文化的歴史的統一のシンボルであるはずなのが、大統領は選挙でえらばれるのですから、ついこの間まで隣りに一緒にゐた男が急にえらばれて、「余は民族の統一と歴史的文化的シンボルであるぞ」。どうもこれは、説得力がありません。君主と行政機構とをべつにした立憲君主制といふ制度は、民主主義を運営して行くのにも非常に有効な作用を果す。

日本にはさういふ權威が、二千年来ずっと続いて来たのです。一回捨てたら二度と戻って来ない、大變に貴重な宝物です。さういふことは、いろんな国を見たらすぐわかる常識ですが、その常識がいまの日本ではどうも通用しなくなつて来てゐる。日教組教育のおかげ、といふべきでせうか。根本はやはり、東京裁判いらいの自己否定、自己憎悪です。變な先入主にわづらはされなくて、古来の日本人の知恵にもういっぺん謙虚に学ぶ必要がある、と思ひます。

明治維新当時、われわれの先輩は、突然奔入して来た産業革命の巨大な波の中で、植民地にならないうためにあらゆる努力を傾けなければなりません。当時の国際的な力関係にも幸ひされて、日本はこの大波を乗り切ることができました。

明治維新から日露戦争まで丁度三十六年です。明治三十七年に日露戦争が起こります。日露戦争は西暦で言ふと一九〇五年におほり、大東亞戦争が始まるのが一九四一年です。日露戦争が終つてから大東亞戦争が始まるまで、丁度三十六年になります。そして今年、敗戦後三十六年です。三十六といふ数字にどういふ意味があるのかはべつとして、明治維新から日露戦争

までの三十六年、日露戦争から大東亜戦争までの三十六年と数へて来ると、明治以来第三期の三十六年周期の終りに立ってゐることになるのです。現在の国際情勢が非常に大きな変動期、変換期にあることは、申し上げるまでもありません。

はっきりしてをりますことは、日本は地理学的な状況からみて、アジア大陸が太平洋に接する部分を弧をえがいて包んでゐるのでして日本を支配するものは太平洋を支配する。さういふ立場に、日本はおかれてゐるのです。これほど良質の港湾にめぐまれた国も、ヨーロッパなどでは少い。地理的状况に関する限り、今も昔も日本の置かれてゐる状況は變つてはをりません。国際環境もロシアはむかしから巨大な軍事を擁して南下の機会をうかがつて来ましたが、朝鮮半島は昔も今もゴタゴタしてゐますし、シナ大陸も同様です。その中で日本は生きるのみちを、明治維新以来模索して生きて来たのです。日露戦争のときには、ロシアが太平洋に出ることを禦ぐために、イギリスは日本と同盟しましたし、アメリカは好意的中立を保ちました。日本を、ロシアにたいする太平洋の防波堤にしようとしたのです。ところが日露戦争で勝利を収めた日本は、つよくなりすぎた。アメリカにとっては、防波堤のはずだった日本が、太平洋をはさんで競争相手となつたのです。これを叩きつぶすのが、アメリカの太平洋戦争の目的でした。ですからアメリカは日本に武装を禁じ、非武装憲法まで押しつけて行つたのです。ところが三十六年を経てアメリカの経済力、軍事は弱体化し、日本にもう一度防波堤の

役割を演じてくれと、頼んで来てゐます。勝手なものです、それが国際関係といふものでせう。

また長い目で考へれば、アジア大陸からの圧力にどう対抗するかが、日本の地理的状況からいって宿命的課題といへます。敗戦は歴史の目から見ればたくさん事件のなかのひとつにすぎず、敗戦後三十六年の虚脱症状もつかのまの一挿話です。また一挿話でなければ、経済が榮えても国はほろびてしまふ。歴史に学ぶことを、現在の国際情勢は日本人に改めて求めてゐると考へる次第です。

■ 短歌創作

短歌創作の意義

— 短歌創作導入のために —

株宝辺商店社長

宝
辺
正
久



元寇防塁

五七五七七

田安宗武の歌論

戦歿学徒の歌

今上天皇終戦時の御製

柿本人麿の「旅の歌」と防人の歌

五七五七七

朝から気にしてをりました雨がやうやく上って、これから阿蘇登山に出かけるわけですが、歌も出来ていゝ遠足だったなあ、といふふうにあつて欲しいと思ひながら、一時間ばかりお話をさせていただきます。

この合宿教室に参加したものは全員「短歌」を作る、といふことになつてをります。日頃作つてをられる方もいらっしやいます、初めてだといふ方が大部分かも知れません。五七五七七といふ短歌形式はよくご存じのはずですが、まさか自分が短歌を作ることにならうとは、と戸惑つてをられるかも知れません。私は最近、ある高等学校の若い先生が自分のクラス全員に歌を作らせた、その記録を読みました、生徒にとつては全く初めての経験ですが、みんな作つてゐる。上手下手を超えておもしろい。その巻頭一首目にかういふ歌があります。「大雨で電車遅れてまた遅刻梅雨がなければ遅刻もない」教室から梅雨空をながめながら、ともかく一生懸命、短歌を作つたのでせう。何かしら思ひをあらはした、この気持はほほゑましい。大體、五七五七七になつてゐる。だが何だかバラバラで、漫画のコマをつないだやうに思へます。名詞で止めてしまつたり、「てにをは」（助詞）を省いたりするからでせう。

短歌は「一首一文」を原則とすると言はれてゐます。印象を概括して文章を二つか三つつらねて一首とし、一首の統一は気分的な想像に委せるといふのは、短歌ではまちがった作り方になると思ひます。五七五七七は制約ではありませんが、ゆるがせに出来ないこの詩型の中で私達は歌を作つてゆかねばなりません。勢ひによつては主語と動詞がさかさまに置かれることはあつても、バラバラにならないで一首は一文として整ふほどの、一貫した感情がなければなりません。歌はうとする思ひに心を集中すること。そしてあれもこれも言つてしまった、といふのでなく中心点を一つに絞ることが大切になります。

この合宿は阿蘇の山々にとり囲まれて行はれてゐます。第一日目の快晴はすばらしいものだった。お天気が崩れて今朝まで雨が降つて、何も見えなかつた。やうやく雨が上つて今阿蘇山は半分ほど雲に隠れ、広々と続く青田は眼前にある。様々な経験を重ねて、そして目をこの風景に放つ時、それぞれの気持で「ああ、いいなあ」と思ふでせう。そこに自分の新鮮な心の動き、喜び、あるいは「美しいなあ」と感じる切なる思ひがあるわけです。その切実な思ひに心を集中する時、広い、さはやかな、美しいなあと思ふ気持をだんだん言葉に移すことが出来ると思ふ。ぼんやりとただ五七五七七になればよいといふのでなく、「いいなあ」と思ふ気持をそこに集中して歌にしてみる。さうすると自づから言葉がバラバラにならないで、一続きの言葉になつてくると思ひます。

田安宗武の歌論



田安宗武といふ人は徳川八代將軍吉宗の第二子で、松平定信の父に当ります。国学に精進して賀茂真淵の研究を庇護したのも彼です。万葉調の歌を遺してゐて、正岡子規は実朝以来の第一人者だと言つてゐます。

この田安宗武に『歌体約言』といふ歌論があります。短い文章ですが、その始めのところを読んでみます。

それ歌は人のこゝろをたねとして、よみいづるものなれば、我心につくろひたることなく（我が心を飾ったり気取ったりすることなく）すらすらとよみいだすべし。しかれば、すなほなる人は歌のこゝろもすなほに、あるはかたくなに（片意地を張ったり）

あるはたはれたるは（ふざけた人は）うたにもその色のあらはるゝなり。人ごとになわがころのうちのよしあしは、わきまへ知りがたけれど、読みいでつれば、我心にもよしあしのしるく（はつきりと）しらるゝなり。さてあし（悪い）とおもはば、はづかしければ、心をあらためてよみかへぬべし（詠み直さねばならない）。言葉を修めてその誠を立つと、聖ひじりの給ひけるも、かかることなるべし。かくしてこそ人の心をすなほにするたより（てづる）ともなるべけれ。後の風（すがた）の歌はおのが心にもなき、あさましくたはれたること、あるは、むげに（言ひやうもなく）おろかなることなどを、めづらしきさまに、いひかなふるをむねとし侍るほどに、心をすなほにせざるのみか、害（わざはひ）をさへ得ぬべくなりゆくめり。たいへん易しい言葉で述べられた優れた歌論だと思ひますが、歌は「我が心につくろひたることなく」「すなほに」詠むのがいいのだと言つてゐます。後の世の歌は、正直に思へば自分の気持とは違つた心を、めづらしきさまに、大げさにうまく言はうとするから心そこなを害ふものだと言つてゐます。歌を作ると、普通ではわが心のうちのよしあしがわからないものだが、それが驚くほどはつきりわかる。心にもないことを言つてゐたと気が付いたら、恥づかしいから、心をあらためて、自分の心にすなほにならうと努力して、言葉を選び直す方がいいのだ、と言つてゐるのです。

田安宗武が範とし、良い歌だとしてゐるのは、今読んだところからも想像されますが、「歌

体約言』の終りの方にかう言つてゐます。「臣が（自分が）まなぶこゝろは、専ら人麿赤人の風情をたふとむ。且つ古の風はありのまゝによむものなれば、あるは喜び、あるは悲しみ、あるは親しみ、あるは疎んじ、あるは賞め、あるは戒め、あるは楽しむなどのごときも、あざやかに見えて、誠に天地をも動かすべし。」また、かういふ言葉もあります。「古言をたふとみてたゞしく心をのぶるものを古の風といふべし。」

歌における古のすがたと後の世のすがたの違いについての田安宗武のこの歌論には深い感動を覚えます。私共がこの合宿で皆さんにお勧めし、私ども自身も歌を作らうと励んでをりますのはたゞ趣味として歌を作るといふ心境では全くございません。心をすなほにして、ありのままによみたい。「誠に天地をも動かす」やうな記紀万葉以来の歌を知り、それに感動するからであります。

宗武自身の歌を一首だけ御紹介ませう。

ひむがしの山のもみぢ葉夕日にはいよいよ赤くいづくしきかも

（東にある山が夕方になると西日を受けて、もみぢ葉はいよいよ赤く、何とも美しく見える）

正岡子規が「歌話」の中でこれを紹介し、次のやうに激賞してゐます。

所謂歌よみなる者をして此歌を評せしめなば、子供の作りたるやうなりとや笑ふらむ。

「いよいよ赤くいつくしきかも」などいへる子供の言葉に似たるだけ面白味あり。此平凡及ぶべからず。

かういふ誰でもが使ふ易しい言葉で、飾らず素直に正しく歌はれた歌をよむと、山のたたずまひ、紅葉の色もありありと想像されて心が和みます。この平凡及ぶべからず。誰でもが真似の出来ない「いにしへぶり」と言へるものでせう。

戦歿学徒の歌

いはゆる歌よみの歌、いはゆる趣味の歌、そんな心持で歌を作らうとしてゐるのではないと申しましたことを繰り返して申し上げます。私共年配の者は、丁度あなた方と同年の頃、大東亜戦争に参加しました。当時二十何歳の青年達が実に沢山の歌を詠んで戦地に行き、戦死してをる。さういふことがつい三十数年前にあった。戦死のほかには道はあるまいと自分の思ひを歌に託して出て行った、実に多くの学生達がゐた。これは一体どういふ事だらうか。「いのちささげて（戦中学徒・遺詠遺文抄）」正統二一巻が一昨年刊行されてをりますので、その中から二首御紹介します。

大君の御楯となりていでてゆく我ならぬ思ひを君にささげむ

うつそみはよし砕くともはらからのなさけ忘れじ常世ゆくまで

前の歌は吉田房雄さんといふ方の歌で、今この合宿にいらっしやる小田村寅二郎先生宛に、出征の数日前に書かれた手紙にある二首の中の一首です。「我ならぬ思ひ」といふことばに目が止まります。謙虚で沈痛なひびきが感じられます。歌のあとにこんな文章がつづいてゐます。「万感交々胸中を去来致しまして言葉もございません。元気にやってきました。」自分は戦地に行くのだが、小田村さん達はこの日本に留って、当時戦争指導をめぐるまちがった思想を正さうとして憲兵隊の弾圧を受けながら奮闘してをられる、その小田村さん達を以て自分は一人大君の御楯となつて出て行かうとしてゐる。その我がおもひ、あるいは我一人の思ひとも言へないやうなこの思ひをあなたに捧げよう、と歌つてをられる。

その次の歌は松吉正資さんといふ方の歌です。松吉さんも亦学業中途で応召するのですが、出発前の秋の一時を故郷で過ごし、この歌を書き遺すのです。連作の中の一首です。日本を守る、祖国に殉ずる志とその意味を繰り返したことでせう。そして「はらからのなさけ忘れじ」と歌つてゐます。今この合宿に彼の弟さんが来てゐます。「はらから」とは自分と共に、自分の志と共に育つてきた弟や妹でもありません。あるいはふるさとの人すべてに対して「忘

れじ」と歌ってゐるやうに思はれます。

吉田満さんの「戦艦大和の最期」といふすばらしい文章があります。お読みになられた方が多いと思ひますが、あの中で大和のガンルーム（若い少中尉の士官次室）で海兵出身の士官と学徒出身の士官とが激論するところがあります。海兵出身の士官が「国のため、君のために死ぬ、それでいいぢやないか、それ以上に何が必要なのだ」と言ふのに対して学徒出身の士官は、「君国のために散る、それは分る、だがそれだけでは嫌だ、個人の生死、国家の存亡が結びつく何か価値といふやうなものが必要なのだ」と反問して大激論となります。この論争と似たやうな経験は私にとつても思ひ返されるものがありますが、いま二つの歌を読みながら、いささか別の感がありますので、それを申し上げます。

さまざまに国を思ひ、わが生死を思ひ、親を思ひ、友を思ひ、そしてそれと別れて決死の旅に出てゆく、その切実な感情を自分の意志に統一して出来るのが「歌」だらう、とこの二首については考へられます。君国のために死ぬといふ一言、その事をわがことばで言はうとする時の惑ひ、大和艦上の論争の種は歌作の努力の中ですべて経験されてゐたとも言へませう。歌を作る途中では、なかなか言葉が見つからない、つづかない。いい加減でやめたいと思ふ。けれども、心に適ふ言葉で表現しようといふ心を貫いてこそ歌が出来るのです。歌が出来るといふことは、歌を作らうといふ意志に心が統一されてゆく過程そのもの、と言へませう。

戦歿学徒の歌は、心を定めた青年の歌です。自分の思ひを、正しくありのままに述べようとした歌です。強い感情を言葉に乗せるといふ仕事は途中で止めてはいけません。いい歌といふものは、さういふ作者の努力によって、実に感動に堪へないものがあるのです。

今上天皇終戦時の御製

短歌は、もとより五七五七七の詩型によって歌はうとするのですが、さっと歌ってみると案外その詩型をはみ出ることがあります。「字余り」と言ひますが、例へば源実朝の有名な歌、ものいはぬよものけだものすらだにもあはれなるかなや親の子をおもふ

下の句が七七とおさまるところを、ここは八八となつてゐますが、それが却つて歌の重みを増してゐる。深い感動がこもつてゐるからでせう。だから「字足らず」はいけません。「字余り」はさう気にしないで作つていいのです。（『短歌のすすめ』六十六頁参照）
今上天皇がこの度の大戦の、終戦時にお作りになられた御製の中に、かういふ御歌がございます。

爆撃にたふれゆく民の上を思ひいくさとめけり身はいかならむとも

大分字余りだとお気付になりませう。五七六七九。天皇のお気持は思ふだけでも恐れ多いことですけれども、自分の一身はどうあってもいいから、これ以上に民を死なせるわけにはいかない。戦を止めるといふ非常の御決意を遊ばすに至る複雑深刻の御思慮が偲ばれます。感余つて字余りになるはかはなかつたと思はれるこの御歌について、作者天皇もこれでよしと思はれてゐることです。あれこれの御宸慮に堪へられつつ、戦をとめるといふ一つの御決断を採つて動ぜぬお姿が、そのままに御歌のすがたになつてゐるかと思はれます。字余りの歌でありながら、「いくさとめけり」といふ御決断によつて、一首は流れるやうな勢ひを感じさせられます。だからたとへ字余りであっても五七五七七を誦すると同じリズムに乗せて、朗々と音読誦できるやうに慣れることが大切だと思ひます。

感動によつて、作歌上の字余りはあり得る、許されるといふことを申しましたが、「連作」といふことにもふれておきます。

歌は始めから一首きりに歌はうと思はないのがいいと思ひます。歌はうとするものの中に没頭しますと、いろいろ思ひは展開する、それを一首の中に何もかも詠むわけにはいきませんか。次に、次々に何首にも詠んでいかうと思つた方がいいのです。例へばこの阿蘇を展望します。目をやれば心が開ける思ひです。青々とした稲田の広がり、それから目を移せばまだ晴れやらぬ

阿蘇の山々、といふ風に二首にも三首にも続けて作って見よう、と始から思った方が作り易いだらうと思ひます。一首でも構ひませんが、何もかも歌ひ込まうとせず、歌の中に一つのポイントを置いてその感情を述べていくといふ心持で作られるといいと思ひます。

柿本人麿の「旅の歌」と防人の歌

正岡子規の「歌話」の中にこんな言葉があります。「歌は全く空間的の趣向を詠まんよりは、少しく時間を含みたる趣向を詠むに適せるが如し」そして、

田子の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ不盡の高嶺に雪はふりける（赤人）

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ（実朝）

など数首を例証にあげてゐます。赤人の歌は、田子の浦を通して出て見れば、と作者の自分の動きをそのままに、時間的に推移するがままに歌ってゐる。実朝の歌も同じやうに、箱根路をわが越えくれば、と歌ひ出されてゐます。自分の歩みを写して、そのまますらすらと詠み出してゐるところは、歌を作る上で、なる程なあとと思ふところです。絵が全く空間的な作品であ

り、音楽は時間と共にある芸術形式ですが、三十一音の短歌では（一般に詩について言へることですが）、三十一音に詠みあげていく時間を要し、詠みあげると共に消える時間的性質に支配されてゐますから、自づからものの動いていく姿、時間を含んだ趣向を写し易いといふことは納得できる事です。と同時にここで子規が例歌として挙げた、赤人や実朝の歌のリズムを味はっていく上で参考になると思ひます。

そこで、防人さきもりの歌と人麿まろの旅の歌を読んでみます。天智天皇二年（六六三）、百濟を助けようと派遣された日本の大軍は、唐・新羅連合軍に白村江で敗れ朝鮮半島から退却するのですが、直ちに防備を固めるために防人の制度を作り、関東、東国の兵が最前線九州防衛のために派遣されます。万葉集卷二十に防人の歌として集録されたのは、更に天平勝宝七年（七五五）、交替のために筑紫に派遣される東国兵達の歌ですから、白村江以来九十年が経過してゐます。柿本人麿が活躍したのは持統、文武朝ですから、この天平勝宝七年よりも六十年位前のことです。

大君みことの命かしこみ磯いそに触り海原うのはら渡る父母を置きて

これは助丁すけのよほろ、丈部はせつかべのみやつこ造人ひと 麿まろの歌ですが、助丁といふ官職には十八歳で任命されますから、十八歳くらゐの青年の歌でせう。「大君の命かしこみ」、大君の御命令を畏むといふ慎ましい、いさぎよい表白ですが、大伴氏に語り継がれ、更に白村江以来つゞく非常の時に、防人の

兵達に広がっていった言葉かも知れません。「磯に触り」、海路うみつちのかしこき（おそるべき）、さまざまひやるべし、とは万葉集古義の著者鹿持雅澄翁かもちまさずみの解釈です。「海原渡る父母を置きて」、故郷はるかに父母を偲びながら、一人船上にあって征旅に赴く、その心の内と作者の動きをそのまま偲ぶことのできる歌ではないでせうか。

水鳥の発ちの急ぎに父母に物言ものはず来けにて今ぞ悔しき

忘らむと野行き山行き我来れど我が父母は忘れせぬかも

東国を慌しく出発した青年達は、陸路をとって難波の地迄行って、難波から海路また危険な船旅をつゞけて任地筑紫、対馬などに赴いたやうであります。「忘らむと野行き山行き我来れど」、このことばのリズムには、父母を思ふ強い情を抱きながら、歩きつづける強健な若者の心と体の動きを乗せてゐるやうに思はれます。

さて難波は当時の都大和に最も近い外港ですから、大陸外交の玄関でもあり、統一国家建設のための交通拠点でもあったのでせう。その様な時機に、地方官としての要務を帯びた人麿は、ここを出発地とし、ここを帰港地としてたびたび往来したやうですが、その海路は、開かれて久しいものであったと思はれます。そこで、人麿がこの海路を往来し、多くの歌を詠み、

その歌はまた多く伝承され、防人達はこれらの歌を心に覚え、同じ海路に行く時に旅をかなしみながら思ひをのべて歌を作った、といふことは両方の歌を読み味はへば、まちがひなくさうであつたらうと思はれることです。

万葉集卷三にある柿本朝臣人麿の羈旅の歌八首は有名な歌であります。

玉藻苅る敏馬みぬめを過ぎて夏草なつぐさの野島のじまの埼に船近づきぬ

敏馬、野島それぞれに現在の神戸、淡路にある地名です。どこそこを過ぎて、どこそこに近づくといふ単純な歌ですけれども、この地名に作者が感じたであらう懐かしさがなければ作れない歌でありませうし、ここを通る後の世の人達にこの歌が伝承されて、心深くあはれに回想された歌であつたと想像されるのです。（『短歌のあゆみ』一〇一頁以下参照）

淡路の野島の埼の浜風に妹が結びし紐吹きかへす

稲日いなび野のも行き過ぎがてに思へれば心恋こほしき加古の島見ゆ

ともし火の明石大門あしとに入らむ日や傍かたぎ別れなむ家のあたり見ず

天さかる夷ひなの長道ながちゆ恋ひくれば明石の門より大和島見ゆ

今、私はむしろ人麿の歌、あるいは人麿が集めて遺したかも知れない古歌集の歌が東国の果

の若者達にも語り継がれ、自らも防人の歌を遺したといふ「歌の道の伝承」を味はって驚くのです。その歌は源実朝に受けつがれ、田安宗武にひきつがれ等して、「古言をたふとみて、ただしく心をのぶるもの」と自覚されてきたのです。

素直な気持で、自分をいつはらず、心を集中して一所懸命に作ってみよう、さう申し上げてお話を終ります。

創作短歌批評

福岡教育大学教授
山田輝彦



元寇歌碑（宮崎宮境内）

批評と添削
はじめに

は じ め に

たゞ今から諸君が創作された短歌についての全体批評を始めたいと思ひます。

昨日午後、宝辺正久先生によって、短歌創作の導入講義が行はれ、それをうけて、諸君が創作された短歌を、主催者側の数名の者が選別し、ガリを切り、更に事務局の方々が殆んど徹夜で印刷して、こゝに四十頁、約五百首が収録された歌稿が出来上りました。少くとも一首は、どこかに諸君の歌が入ってをりますので、どうか心して読んで下さい。

昨日、斎藤忠先生の国際政治についての講義の中で、先生は戦争中に出陣して行く若い人々と歌ったダンチヨネ節を歌はれました。聞いてゐるうちに涙が出て来て、人がゐなければ声を上げて泣きたいやうな気持ちになりました。斎藤先生は、国際政治に関してはトップレベルの評論家で、その書かれたものには、いつも正確な情報に基づいたシャープな分析があります。しかし、先生の論には、さういふ客観的な資料の奥に、いつも燃えるやうなもの、訴へかけて来るものがあります。私は常日頃、それを不思議に思つてをりましたが、それは斎藤先生といふ方の中に、詩人が存在してゐたからだと始めて分つた次第でした。あれだけの情熱をもって世界の軍事情勢を分析される方、しかも八十歳といふ御高齢の先生の心の奥に非常に純情な、清

らかなものがあることを知って心打たれました。これは無断で転載しましたので、お叱りを受けるかも知れませんが、おゆるしを頂くことにして読ませていただきます。

火の国にけふひとり来て阿蘇の嶺の淡き雲見つつ堪へ難かりき

夕空にはかなく浮かぶちぎれ雲手を振りて佇たつわれは旅びと

あはれこの寂寞の野に咲く花のその名も知らずただ摘みてみる

生くるとは悲しきものよ寂寞の小路に白き名も知らぬ花

ポエジーを心に湛へてゐる人にして、はじめて人の心をゆさぶる評論も書けるのです。これは、政治家も、学者も、教育者も同じことで、特に教育者は詩人でなければならぬ。それは巧みな詩を作るといふことではなくて、自然の動きや、人間の心の微妙な動きに敏感である人といふ意味です。松陰先生の心の中にも、やはり詩人が存在してゐたと思ひます。それが、あれだけの多くの青年たちを惹きつけたのではないか。明治維新の志士たちは、殆んど例外なしに歌を詠んでゐます。ロシアのテロリストや、フランス革命の主導者たちが例外なく詩人であつたといふやうなことは寡聞にして知りません。しかし、維新の志士たちは殆んどすべての人が身にしみるやうな歌を残してゐます。斎藤先生が紹介された平野国臣の歌、



君が代の安けかりせばかねてより身は花守となりけむものを

さういふ歌心に支へられて明治維新は成就されました。これは世界のどこにもない社会変革です。外国のレボリューションのやうに、徹底的に敵を抹殺する革命とは全く違ってゐたと思ひます。危機を決定的な破局に到らせなかつたのは、やはり歌心が日本を支へてゐたからだと思ひます。さういふ意味で、日本人は非常に詩的な民族だと言へます。

昨日、宝辺先生が非常に明快な導入講義をして下さいましたが、それを聞いて、ともかくも歌の形をしたものができる。これはやはり一言語、一民族、一国家といふ世界に特殊な民族の特性ではないでせうか。多少は分らないところのある歌も、その人の心になって努力すれば、お互ひに意味が通じ合へるといふことは不思議なことです。外国で「詩人」といふのは常人にはない特殊な才能を持った人といふ意味なのですが、日本人は一度の導

入講義で、ともかく定型詩のやうなものが作れるといふことに改めて注目させられた次第です。

さうは言っても、歌を作ることが初めての方には、随分苦痛だったと思ひます。さういふ苦しみを表現したものを、二つばかりあげたいと思ひます。念のために申しますが、高い立場から槍玉に上げるといふやうな意味は毛頭ありません。強ひて言へば、比較的批評しやすいからといふことになりませう。

刻々と締切り迫る和歌提出どうしようかと焦りつゝのるばかり
(熊本大学 深田 章)

この気持はお互よく分ります。これを次のやうに直してみたらどうでせうか。

刻々と和歌提出の時迫りいかにせむかと焦りはつゝのる

余りいゝ添削ではありませんが、かういふ気持は初めての方はみな経験されたことと思ひます。「あゝ、彼もやはりさうだったのか」と少しは気が楽になれることとせう。もう一つ例を上げませう。

ふろに入りうたをよまむと横みれば横の人も指をおりつつ
(九州大学 中野 毅)

この気持も分りますね。身にしみるやうでせう。次のやうに直してみました。

ふろに入りうたをよまむと横みればその友もまた指おりてゐつ

「横の人」といふのと「その友」といふのは全然違ふでせう。班も違ふし、学校も違ふし、会話もないけれども、同じ合宿だから「友」と呼ぶと、それだけでもうある連帯感が出て来るのです。次は心打たれた一首です。

杖つきて一步一步に力こめ講義室までひたすら進む

（山口大学 山田 朗）

足が悪いので杖をついてゐた山田君の姿を何度か見まして、あゝ、こんなにしてまでも合宿に参加してくれたのだなあと、非常にありがたく思ひました。かういふ歌をよむと、主催者としてといふよりも、人間として非常にうれしく思ひます。

以下数首について、具体的に指摘してゆきたいと思ひますが、後で行はれる班別の相互批評のときの参考にしていただきたいと思ひます。短歌の相互批評といふのは、この合宿独自の行事と思ひますが、相手の心になつて考へて上げるといふことが大切です。高い所から、第三者的にケチをつけるといふことではなく、「君はどういふことを詠みたいのだ。それならこの表現では分らんじゃないか。自分がかうすればいゝと思ふのだけども」といふやうな批評になつてほしいと思ふのです。

班別で語る友らの言の葉を吾が内に秘め想ひめぐらす

(愛智学院大学 森高 準一)

「吾が内に秘め」といふ部分が概括的すぎるのです。心の中でその言葉を味ふとか、もう一ぺん噛みしめてみるとかいふことでせうが、それはこの合宿の「班別討論」といふ経験を経た人が、自分の体験でカバーして始めて理解できるのです。歌といふものは既に客観的な存在で、作者を離れて一人立ちをするわけですから、作者が補足説明をしなければならぬやうな歌は不完全なものといふことになります。これは初心者には酷な要求ですが注意しておきます。そこで、この歌を最小限度に訂正すれば次のやうになりませうか。

班別で語る友らの言の葉を聞きつつ一人想ひめぐらす

霧深き阿蘇の大地につつまれて母娘おやこの馬はしずかにたてり

(佐賀大学 小野 伴美)

この歌も意味は大体分ります。しかし「大地につつまれる」といふことはあまり言ひません。「天地につつまれる」とか「自然につつまれる」とは言ひますが。これは上の「霧」といふ言葉の連想から「つつむ」といふ言葉が出て来たのでせう。次のやうに直してみました。

阿蘇山の深き狭霧につつまれてしづかに立てり親子の馬は

「親子の馬」といふところに焦点があるわけですから、それを一番最後にもって来て強調するため倒置法を使ふわけです。それから、この歌の字面をよく見てみると、「母娘の馬」と書いてあります。母馬といふのはあるけれども、娘の馬といふのはありません。仔馬には余り性別は意識しないものなのです。こんなところにも細かい注意が必要です。

霧かかる火の山々はみえねども踏み立ちたるの感はひとしお (亜細亜大学 上野 栄一)

「踏み立ちたるの感はひとしお」といふ表現は、意味は分りますが、何かちょっと舌足らずで不正確です。自分の足下に阿蘇を踏んでゐるといふ強い実感が詠みたいのですね。それを卒直に詠めばいいのです。それから「火の山々」といふのも客観性が乏しいのです。次のやうに直してみました。

霧かかる阿蘇の山々見えねども踏みしむる大地の力感ずる

師の言葉友と語りし我心得んこと多き阿蘇望みつつ (第一薬科大学 福島 修)

これも非常に好意的に解釈しますと、先生の言葉を聞き友と語って、阿蘇を望みながら生活を
する中で、多くの収穫を得たといふことが言ひたいのだらうと思ひます。もしさうだとする

と、この歌は切れ過ぎてゐます。「師の言葉」で切れ、「友と語りし我心」で切れ、「得んこと多き」で切れ、「阿蘇望みつつ」と四つに切れて、心情の連続性とか統一性とかが全くないので、焦点がぼけてしまふのです。次のやうに直しました。

阿蘇望むこの地に集ひ師の言葉友の言葉に多く学びぬ

わが身をばつつみおおせるこの霧をはらいとばしてあそにまみえむ（国学院大学 宇野 健）

「つつみおおせる」といふ言葉が、自分をすっぽり包んでゐる意味だらうといふことは想像できるので、読む人が一番ひつかかるのは「はらいとばして」といふ言葉が強すぎる点にあるのです。「古事記」の神々なら別ですが、表現がオーバーにならぬやうに抑制することが大切です。

わが身をばおしつつむごときこの霧をはらして阿蘇の山見まほしき

「見たい」といふ意味を表はすときに「まほし」といふやうな言葉を使ふのは、諸君の段階ではむづかし過ぎると思ひますが、このやうに直してみました。いづれにせよ「はらいとばしてあそにまみえぬ」は無理な表現だと思ひます。いい歌といふのは、技巧の勝ったきれいな歌とか、誇張された言葉で作られた歌ではなく、自分の感じた思ひとか、自分の見た自然とかが

正確に写され、正確に自分の言葉になってゐるといふことなのです。今の自分のこの気持は、どういふ言葉で表現したら一番正確なのだらうか、さういふ言葉をさがして定型に組み上げる努力が必要なのです。「青い空」といっても、嵐のあとの雲間から見える空と、乾燥した日の青空とはみな微妙に違ふでせう。ブルーの青と、エメラルドの碧は違ふでせう。その時の一番ピッタリした言葉を選ぶことが必要で、さういふ言葉で表現された歌は、必ず人の心を打つものになるのです。

斎藤先生の講義を聞いて

遺言と語れる師ひとの話聞きおもしろもよらず涙こぼれる

（多摩美術大学 久保 正）

同じ経験を持つてゐるわたしどもにはよく分りますが、「遺言と語れる」といふところが、やゝ正確さを欠きます。「私の遺言と思つてお聞き下さい」といふ意味が言ひたいわけでせう。それから、詞書がありますから、歌の中に「師」といふ言葉を繰り返す必要はないわけです。次のやうに直しました。

遺言と聞きませといふみ言葉に思はず涙こぼれぬるかな

霧の阿蘇登る車に牛の群れ車を止めて大名行列

(高千穂商科大学 大塚 修)

読まれた内容は充分に分るのですが、問題は突如として「大名行列」といふ狂歌的表現が出てくるところにあるので、それが爆笑を誘ふ所以だと思ひます。牛の群が長々と列をなして横切つてゐるといふことが詠みたいのでせう。それから、「車」といふ言葉が一首の中に二度使はれてゐます。場合によつては二度使つた方がよい場合もあるのですが、この場合には無駄ですから、避けるべきでせう。次のやうに直したらどうでせうか。

霧の阿蘇登る車をさへぎりて牛の群長く道を横切る

横切つたのか、車と同じ方向に長い列が続いてゐたのか、はっきりしませんが、要するに「大名行列」といふ表現は、ほかに詠みやうがないから、これにしておかうかといふことで安易に選ばれた言葉としか思はれません。意識的なユーモアなら、それはそれでもっと適切な語の選択があつてよいと思ひます。

輪読をすれば思ひは古への偉人のもとへとんでゆきたり

(熊本大学 米山 雅彦)

聖徳太子の御言葉を輪読したときの歌だと思ひます。詠まんとするところは実によく分ります。たゞ、自分の思ひが古代の偉人のもとへとんでいったといふ表現が、少々推敲を要するの

ではないでせうか。

輪読の文字をたどれば古への人の心に近づくごとし

さういふ気持ではないかと思ふのですが、どうでせうか。

霧の中姿を見せぬ阿蘇の山乙女のごとくいとほしきかな

（防衛大学 沢口 明廣）

阿蘇山といふ山は、少なくとも「乙女」といふイメージとはつながらないと思ひます。たゞ姿が見えないから、その神秘的なところと関連して「乙女のごとく」といふ言葉が出て来たのではないかといふ氣もします。また最後の「いとほし」といふ言葉も、もともと憐愍の情をかけるといふ様な氣持の言葉ですから、阿蘇山にはふさはしくないのではないか。むしろ敬慕の情をあらはす「したはし」といふ語の方がよいのではないかと思ひます。それともどなたか具體的に「乙女」のことを考へられたのかとも思はれますが、それにしても唐突の感があつてしっくりしません。あとで検討して下さい。

霧立ちて姿を見せぬ阿蘇の山まだ見ぬ人のごとくしたはし
といふやうに直されたらいゝと思ひます。

親馬につきそふ子馬いたはりしあたたかき心わが親思ふ

（亜細亜大学 高崎 睦朗）

「親馬につきそふ子馬いたはりし」という上の句の「いたはる」といふ述語の主語は何かといふことが問題になります。もちろん、子馬をいたはってゐるのは親馬なのですが、この表現では親馬は主語にはなりません。歌は韻律をもった文章ですから、文章としての構成がはっきりしてゐないと文意が通じません。これは散文の場合と同じです。だから、この上の句は「親馬のつきそふ子馬いたはれる」といふやうにすればいゝのです。この「の」はもちろん主格を表はす「が」の意味です。それから「あたたかき心わが親思ふ」も意味が必ずしも明瞭ではありません。親子の馬の姿を見て、そのあたたかい心が伝はってくるやうで、改めて自分の親のことを思ったといふ意味でせうが、さう理解するためには、読む方が相当の努力を要請されまゝす。さういふ意味では、短歌形式の制約の中で正確に表現できてゐないといふことになりまゝす。

親馬のつきそふ子馬いたはれるその姿見てわが親思ふ

さうすると言はんとするところが正確に出て来るでせう。更に表現に工夫を凝らすと、もっと深い感動の表現もできると思ひます。

見晴せど阿蘇の千里に霧煙る友の姿をただ待ち立ちぬ

(神戸大学 植田 裕之)

この歌も意味が分らぬ歌ではありません。草千里には霧が立ちこめてゐる、その霧の中で

「あいつ早く来んかなあ」と思って、立って見てみるといふ意味でせう。たゞ「見晴す」といふ言葉は、晴れた日に高い所からずっと遠くを見るといふ意味で、霧がこめてゐる中で「見晴す」といふことはもともとできないことなのです。言葉の使ひ方が間違つてゐるのです。また「霧煙る」のところで歌が切れてしまつてゐるので、一首としてのリズム感がなくなつてしまひます。歌は原則としては一首一文なのだといふことを念頭において次のやうに直してみました。

見渡せど草千里には霧こめて友の来たるをただ立ちて待つ

群雲に面隠した阿蘇山の誇れる姿みえぬなりけり

（防衛大学 藤永 映章）

「面を隠す」といふのは不正確で、やはり「姿を隠す」といふべきでせう。「誇れる姿」といふのは誇らしい姿といふ意味でせうが、この歌の表現通りなら「誇れる」は述語で、阿蘇山が自分を誇つてゐるといふ意味になつてしまひます。また「面隠した」といふのは口語の表現です。短歌はもともと文語の定型詩ですから、文語表現にすることが必要です。また、一首の中に二度同じ言葉を使はぬ配慮があることは、先刻述べた通りなので「姿」といふ言葉を二度くりかへさぬやうにするならば次のやうになるのではないでせうか。

群雲に姿隠して阿蘇山の雄々しき山なみついに見えこず

バス中で詠^{なが}め見てゐる景色より自分の足で立った阿蘇の山 (早稲田大学 坂本 政司)

「詠め」といふのは、声を長く引いてうたふといふ意味なので、こゝではやはり「眺め」でなければいけないでせう。遠くから見ると、きれいだけれども、じんと体に実感として伝はって来ない。しかし、実際にしっかりと足を踏みしめると、やっぱりうれしいといふ意味でせう。これも「自分の足で立った」といふやうな、口語の表現ではいけません。全体が散文的で感動が表現されてゐないので、折角の実感がこちらに伝はって来ないきらいがあります。

バスの窓に遠く眺めし阿蘇山に己れの足で立ちしうれしさ
さういふやうに詠めばいゝのです。

ああかなし牛がモウモウ霧の中うまくはれば心もはずまむ (熊本大学 塘内 正義)

すつきり空が晴れば心も弾むだらうが、霧が立ちこめてゐてかなしいといふ意味でせう。それにしても「ああかなし」は余程のことでないと思はないので、これはちょっとオーバーな表現です。それから、牛の鳴き声を「モウモウ」と片仮名で表記してありますが、これもやはり一つの強調になります。かういふオノマトペ、擬音を片仮名で書くといふことは、短歌の中ではなるべく避けた方がいゝのです。霧が立って先が見えないことを「ああかなし」とは言は

ないでせう。残念だとは言ふでせうが。かういふ実感と表現のアン・バランスが一番歌を駄目
にしますし、時には滑稽にもしてしまふのです。

放牧の牛なきてゐる霧の中この霧晴れば心はづまむ

「霧」が一首の中で二度くりかへされますが、かういふ場合は許されるでせう。

火の山で迎える夜明け厳かにたたふる光美しきかも

（国際経済大学 竹下 慎一）

朝の景色を詠んだ歌ですが、「火の山で迎える」といふのは、阿蘇でキャンプをしたことに
なります。

阿蘇の地に迎ふる夜明け厳かにただよひそむる光美し

さういふふうにすればいい。「火の山」といふと、何となく観光ポスターなどでなじみの言
葉なので、すぐ歌に浮んでくるのですが、使ふべきところに使はれないと、薄っぺらで実体の
ない言葉になってしまひます。今は言葉そのものが商業ペースで風化してしまつてゐることを
忘れないでほしいものです。

霧の中阿蘇の山並うすらいで我胸中と同じなりけり

（防衛大学 清瀬 羊司）

この歌で分りにくいのは「山並がうすらぐ」といふ意味で、それは、山の姿が霧のために

はつきりしないのか、それとも霧がうすらいで山がはつきりしてくるといふのだらうか。後者のやうにとると、意味が全く逆になってしまひますが、おそらく、自分の胸も何かすつきりしないところがあるのだが、同じやうに霧がこめて阿蘇の山並みもすつきりしないのだといふやうな意味にとれるのです。ともかく、逆の解釈の可能性を残すやうな表現の曖昧さは注意して避けるべきでせう。こゝで私は「うすらぐ」を「はつきりしない」といふ意味にとって次のやうに直しました。

霧こめし阿蘇の山並み晴れやらぬわが胸中と同じなりけり

大阿蘇の噴煙を見て思ふことこれも日本の自然なりけり

(防衛大学 新聞 弘治)

いろいろな意味にとれる歌なのですが、一番残酷なとり方をすると、当り前のことじゃないかといふことになるわけです。しかし、おそらく作者は、日本にはこんなに美しい自然があるのだなあといふ感動を表現しなかったのでせう。さうすると、昨日の宝辺先生の導入にあったやうに、自分の感動を直接述べなければいけないので、これでは概括的な感想になってしまうのです。そこで、次のやうに直しました。

大阿蘇の噴煙を見て思ふかな日本の自然はかく美しき

あるいは、最後を「かくもうるはし」としてもいいでせう。

いまはただ疲れしからだのみなれど生きづく山に心洗わる

（広島大学 森末 泰雄）

連日の合宿行事に疲れ果ててしまったが、美しい山の姿に心が洗はれるといふ意味の歌です。問題は「生きづく」といふ言葉です。これは「息づく」ではないし、強ひて解釈すれば生命力を感じさせるやうなといふ意味でせうか。ともかく辞書にない言葉の使ひ方ですから検討を要します。あるいは、「山の緑に」とか、「山の命に」とかいふ表現なら分らないことはないのですが。作者は「生きづく」といふ言葉を、何かこれ以外の言葉では満足できないやうな気持ちで使ったと思ふのですが、やはり問題が残りさうです。

熊本の火の国阿蘇は曇り空白煙見えず雲見ゆるのみ

（亜細亜大学 副島 満）

この歌は、同じやうな言葉が何度も使ってあって、くどすぎる、丁寧すぎるわけです。例へば「熊本の」と「火の国」といふのは大体同じことで、「白煙」といふのは噴煙のことです。上の「熊本の」は分つてゐるから省略していいのです。

火の国の阿蘇の山並み霧こめて噴煙見えず雲見ゆるのみ

これでも「霧」とか「雲」とかいふ類似の語が重なって、もう少し整理した方がよいのですが、前よりは少しは良くなるだらうと思はれます。

ろうろうとダンチョネ節を歌われしその御声には悲しさあふる

(福岡教育大学 是松 秀文)

斎藤先生のことを歌はれたものです。私も合宿中の体験の中で、何を詠まうかと思ったとき、まっ先に先生のことか頭に浮びました。だから、作者の心情はよく分るのです。しかし、あの時の先生の歌声を「朗々と」と詠むことが正確なのかどうかといふことです。あの時の先生の声は「朗々と」ではなかったと思ひます。「しみじみと」といふ言葉の方がぴったりきます。あるいは、もっと適当な言葉があるかも知れません。

それから「歌われし」の「わ」は「は」ですね。できるだけ歴史的な仮名遣ひを使って下さい。諸君は国文研の合宿に来られた方なので、ついでに申しますが、現代仮名遣と当用漢字といふものは、戦後の占領政策の中で、日本民族の文化に一番大きなマイナスになったものです。諸君は新仮名と当用漢字だけに満足しないで、歴史的な仮名遣が読め、使へ、略字体でない漢字も読めるやうな修練をして下さい。さうすることが、日本の文化の伝承に繋ってゆくと思ふからです。

おもむろに通り過ぎゆく親子牛おとめはおどろきわれはほほえむ (長崎大学 松本 憲明)

女子学生の諸君は、びっくりりして、声をあげて驚いてゐるけれども、それは女性だから仕方がないとして、私は男だから悠然とはほゑんでゐるといふ意味ですね。何となく笑ひを誘はれるやうな作ですが、この歌の焦点はどこにあるのかといふと、「おとめはおどろき」といふところに、作者の一番の関心があるのではないかと思はれます。それなら、次のやうに詠まれたらどうでせうか。

おもむろに道を過ぎゆく親子牛をとめらおどろきの声あげてをり

「おとめはおどろきわれはほゑむ」といふやうな、比較対照的な表現が入って来ますと、歌が理屈っぽくなり、中心がはずれて分裂して来ます。一番感じたところに絞ってゆくことが作歌の場合には大事なことです。

以上、いくらか問題のある歌を批判し、訂正することに力を注いで来ましたので、いゝ歌を読む暇がありませんでした。学生諸君の歌の中で比較的好い歌だと思はれるものを二、三紹介しておきます。

次の連作の作者は、合宿の途中でお父さんが病気だといつて帰られたさうですが、病状がよくなって、また復帰されたと聞いてゐます。仮名遣ひなど、多少の誤りがありますので、それを直しておきます。

父の病にて途中帰宅せるにつきて

突然の報せとあれば不孝にも父の病をついうらみけり

戻り来と笑顔にていふ先輩にさしぐむ涙こらへて手をふる

うしろ髪ひかるる思ひきはまりて走る阿蘇路はかなしかりけり

(東京大学 大畠祐一郎)

もう一つ連作短歌の例をあげておきます。

齋藤忠先生の御講義を聴きて

学徒らはうづまく思ひもそのままに妻よ児等よと歌ひ給ひぬ

涙ため声も限りに歌ひたるその御心のひたにかなしき

教へ子をかのみいくさに送られし師の御心のいかばかりかな

(九州大学・大学院 弓立 忠弘)

以上で全体批評を一応終了しますが、最後に諸君のお手もとにある『短歌のすゝめ』の中の、和多山儀平君の歌と一緒に読んでしめくくりにしたいと思ひます。和多山君は、われわれの学生時代の友人で満二十一歳で戦死しました。これらの歌はその二年前、十九歳の時の歌です。昭和十七年八月頃の作だと推定されます。その年の十二月に学徒出陣がありました。さういふ緊

迫した時代に、彼は友人たちと旅行しました。牛深といふ天草の港から、熊本の方へ帰って来る途中の、海上の様子を詠んだ連作です。自然のリズムと共に、命が躍動するやうな歌です。

牛深を立つ

わだつみの波しきうちて砕けちる大きいはほのすがた雄々しも

わだつみのただ中すすむ船の上に弓張月をあかずながむる

真弓まゆみなす海原ゆけばつらなれる島山はるけしくれゆくそらに

触へさきる波の音ききつつ大空の星をながめぬむれぬままに

この旅にまいで来ざりし友どちはいかにしあるらむしたはしきかな

いなづまかあらずあかりかぬばたまの夜空かけりてきらめく光は

渦うずまける白水泡しろみづなわあはく一筋にはてなくつづけり来し方のぞめば

ほのぐらきあかりの下に吾がともはもはやいねたりねいきのよろしも

あまつそらふりさけみれば月の暈かさしるく出でたり明日は雨らし

島と島のはざまいゆけばたちまちにうしほははやみ舟躍りゆく

北の方指さすごとく七つ星今日もいでたり友らしぬばゆ

上下にゆるるるままにひたすらに吾が乗れる舟何処ゆく今

ふるさとの家はかなしもこのゆふべ吾いづちゆくとしのびてあるらむ
もちふねは
百千船泊つる港辺にぎはしくあかりてりたり人影も見ゆ
汽笛ならしゆるやかにこの港辺に吾が船は入るひびきあげつつ

実に自由な歌でせう。戦争中は思想の統制があつて、学生たちは厭戦の思ひに後髪を引かれるやうにして戦場に行ったといふのは、誇張された嘘です。軍国主義イデオロギーに押へこまれたやうな心から、こんな自由な歌ができる筈はないからです。一人の人間が思ひをこめて生きたといふ尊さを離れて、軍国主義イデオロギーとか、侵略戦争とかいふ概念だけで戦争を裁くといふことだけはして欲しくないと思ふのです。抽象論として、戦争は悪だといふのは自明のことです。当時の戦争指導者たちの犯した思想上の誤りについては冷静な批判が必要なことは論を俟たないところです。けれども、名もなき民が、国家の危急に際して、命がけて真心を捧げた事実を、一般論に解消してしまつては相済まないことになりませう。平和はいいことですし、平和でなければなりません。しかし、「反戦平和」とはイデオロギーであり、そこから本当の平和が生れるとは考へられません。どうすれば平和になるのか。それは、一人一人の日本人が、人の心や自然の動きをしみじみと感じられるやうな人間になることです。そのことが、本当の平和といふものを実現する最も近道なのです。人の心や自然の動きを、敏感に微妙

に感じとる心、そしてそれをこの美しい日本語に定着できるやうな人が、一人でもふえること、それが本当の平和に繋ってゆくのだと思ひます。どうぞ、もう一度歌をつくる意味を考へ、修練を深めていたゞきたいものだと思ひます。



講

話

終戦の御詔勅

農林漁業金融公庫副総裁

小田村 四郎

昨日、慰霊祭が行はれまして国のために命を捨てられた先人の御霊をお祭りいたしました。が、お手許にお配りしたレーガン大統領の就任演説をお読みいただくと、戦死者に対するそのやうなおもひが東西どこの国でも変りないことをおわかりいただくと存じます。それにしても一国の大統領が就任に際して先人の偉業を讃へ、かつ命を国に捧げた無名戦士をこれほど心のこもった言葉で偲んでゐるといふことは本当にすばらしく、二千年の歴史と伝統を有する日本の政治家がどうしてかういふことを国民に向って語れないのか、非常に情なく思はれます。

また慰霊祭の折に「海ゆかば」を歌ひましたが、昭和十七年、私が東大にをりましたころ、昼休みにいつも校庭で体育部の指導のもとに海軍体操を行ってをりました。その最後には必ずこの「海ゆかば」を合唱いたしてをりましたが、そのころのことを、この歌を歌ふたびに思ひ出します。その翌年、昭和十八年十月、皆さま御存知の出陣学徒の壮行会が明治神宮外苑で行はれました。その折の映像がよくテレビなどで放映されますが、それは常に出征してゆく学生たちはかはいさうだといふ考へのもとに演出されてゐるやうです。しかしさういふことは断じてない。当時男子は満二十歳になれば必ず軍務に服することになってをりましたが、たゞ教育上の配慮によって在学中はその徴兵を猶予するといふことになってゐた。ところが戦局が急を告げたのでその猶予をとりやめ、一般の男子と同じく兵役に服することになった。さういふ当然のことが行はれたにすぎません、勿論誰も喜んで軍隊に入らうとは思はない。しかし国家の危急に馳せ参じるといふことには誰一人疑ひをいだく人はゐなかつた。従つてこの政府の措置に不満をもつたやうな人は私の知つてゐる限り、友人の中で誰一人ゐなかつた。当時慶応義塾の塾長であつた小泉信三先生なども、「当時の学生たちはそれを待つてゐたやうに受け入れた」とその著書の中に書いてをられます。私たちは戦争の犠牲になつたなどとは誰も考へなかつた。そして軍隊に入つて実に勇敢に戦つたのです。一億の国民がすべて力を合せ、奮励努力して戦つた。それは世界戦史上特筆すべきことだと思ふのです。

しかし戦勢は日に日に利あらず、遂に八月十四日、御聖断が下り、ポツダム宣言を受諾するのです。私は当時見習士官として、東京の市ヶ谷にあった航空総軍司令部にをりましたが、十四日の夕方私の宿から市ヶ谷の方を眺めてをりましたところ白い煙が幾筋も立ち上ってをりました。これは陸軍省や参謀本部が機密書類を焼却してゐたのですが、私は今でもその煙が鮮かに私の心に焼きついてをります。その翌日、終戦の御詔勅が玉音放送としてはじめて国民の前に流れました。私たちは戸山が原で青々と澄み切った夏空のもと、真夏日の照りつける中で、玉音を拝聴いたしました。今日はその御詔勅を皆さまと一緒に拝読したいと思つて壇に立ちましたが、時間がございませんので、その一節だけを読ませていただきます。

「帝國臣民ニシテ戦陣ニ死シ、職域ニ殉ジ、非命ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セバ、五内為ニ裂ク。且戦傷ヲ負ヒ、災禍ヲ蒙リ、家業ヲ失ヒタル者ノ厚生ニ至リテハ朕ノ深く軫念ス



ル所ナリ」

五内といふのは人間の体のこと、体が引き裂かれるやうなといふ非常に強い御表現を使つてをられるのです。

「惟フニ今後帝國ノ受クベキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラズ、爾臣民ノ衷情モ朕善ク之ヲ知ル、然レドモ朕ハ時運ノ趨ク所、堪ヘ難キヲ堪ヘ、忍ビ難キヲ忍ビ、以テ萬世ノ為ニ太平ヲ開カント欲ス」

このところは私どもが何度も何度も繰返し拜誦したところ です。

「朕ハ茲ニ國体ヲ護持シ得テ、忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ、常ニ爾臣民ト共ニ在リ（略）宜シク挙國一家子孫相伝ヘ確ク神州ノ不滅ヲ信ジ任重クシテ道遠キヲ念ヒ、総力ヲ将来ノ建設ニ傾ケ、道義ヲ篤クシ志操ヲ鞏クシ、誓ツテ國体ノ精華ヲ発揚シ世界ノ進運ニ後レザランコトヲ期スベシ」

私たちは涙ながらにその御詔書を伺ひました。一部の例外はあつたにせよ、一億の国民すべてがさういふ気持で玉音放送を聞いたのです。

八月二十九日にマッカーサーが厚木飛行場に到着、九月二日ミズリー号で降伏調印式が行はれ、その後占領行政が開始されます。一般には八月十五日が境であつたと言はれますが、実はさうではなかつた。境は占領行政の開始以前と以後で別れるのです。そのことは八月と九月の

新聞を対比していたゞけば一目瞭然です。言論機関がいかに占領軍に屈伏して行ったか、それに伴って国民の意識がいかに変化して行ったか、その詳細について最近文芸評論家の江藤淳さんが『忘れたことと忘れさせられたこと』といふ書物に克明に書いてをられます。

時間がありませんのでこれで終りますが、私は今日、日本はまだ国家ではない、半国家である、モラトリアムの国家であると思つてをります。未だに国家の態をなしてゐない、これをどうするか、それは終戦の詔書、そして当時の国民の気持、占領軍の手が加はる前の、日本国民の純粹な気持、そこに帰る以外にはないと思ひます。さういふ意味からしても終戦の詔書を繰り返し拝誦していたゞきたい。日本再建の道はこれ以外にはないと確信してをります。

ソヴェイエト抑留の体験

亜細亜大学教授

宮脇昌三

いま小田村さんがいい話をして下さいましたので、私はその続篇のやうなことをお話いたします。

私は国民文化研究会の前身である昭信会に属してをりましたが、その諸君の中では割に早く軍隊にまゐりました。そして終戦の時は関東軍に属して満州にゐたのですが、御存知の通りソ連軍が一斉に侵入して参りました。これは日ソ不可侵条約の明らかな侵犯ですがそれだけでなく、ポツダム宣言の中にも敗戦国の将兵は速かに家郷に帰って平和の業に従ふことが出来ると

いふ条文がありますが、それも見事に破棄してしまつた。しかも、当時の関東軍司令官山田乙三大将が、ソ連の極東軍総司令官ワシレフスキー元師と会見して、戦後処理について約束をとりつけてゐたのですがこれをも無視して、軍人だけでなく役人等も含めて一挙に捕虜にしてソ連国内に大量移送いたしました。その数実に六十五万から七十万といふ大変な数字に上つてをります。しかもその数は正確にはつかめない。一人一人の命をいかに粗末に扱つたか、想像を絶するものがあります。さらにそのうち十萬位の人達が異郷の地で空しく生涯を終つたのです。

私はその時第三軍司令部参謀といふので朝鮮に近い間島省の延吉といふところをりました。が、その年の十二月、荷物列車に押し込められてシベリアに送られ、遂にウラルを越えてタンボル州のラーダといふところに収容されました。丁度十二月の極寒のころ汽車で輸送されてゆく。明りもなく、食事もなくに食べない。そのうち汽車はバイカル湖畔を通りました。雪がはげしく降ってくる、広い湖でむかうの岸などは見えない。雲が低く垂れて波の音だけが聞える。明日は銃殺が待つてゐるかもわからない。さういふ時、日本の国は一体どうなつてゐるだらうといふおもひが激しく私の胸にわき上りました。その時よんだ一首の歌は今でも心からはなれません。それは、

捕はれてなすすべ知らぬ憤り祖国の空に届けとぞ思ふ

といふ歌でした。日本のことは全くわからない、丁度そのころ「日本天皇を極東軍司令官の隷属下に置く」といふ情報がはいつて来て、煮え返るやうなおもひをいたしました。バイカル湖畔を通りながら、あれを思ひ、これを思ひしてゐると、日本の四つの島が夕暮の中に、本当にぼんやりと、まことに頼りなげに浮んでゐる、さういふ幻想のやうなものを抱きながら、暗澹としたおもひで輸送されて行ったことをありありと思ひうかべることが出来ます。

それから先程申しましたラーダへ、さらにカザンといふ大きな町のそばのエラブカに移され、昭和二十三年の夏からシベリアに送られました。エラブカで私が大変な反動的な奴だといふので、随分ひどい目にあって、お前なんか当分日本には返さないぞと脅されたことも度々でした。

では一体ソ連は何のためにこれだけ大量の者を捕虜にしたのか、それは労働力が欲しかったことと、日本人の思想を洗脳して日本に革命をおこす時の戦力にしようと思つたことと、その二つです。



従って徹底的に労働をさせられ、洗脳もはげしかった。所謂吊しあげ、人民裁判といふ、今中国で行はれてゐるやり方と同じ手口でやられました。だがこのソ連の意図は果して成功したかどうか、私はこの点を非常に重視いたしたいと思ふ、といふのは、たしかに労働力はフルに使った。だがもう一つの目的、日本を共産革命にもってゆく戦力にするといふ目的はどうか、私はこれは失敗だったと思ふからです。彼らは随分洗脳をした。しかしかうして教育された連中も日本に帰ったら殆んどが消えてしまつてゐる。それより地球上にはじめて出来た共産国家の実態とはこんなものかといふことを六十万の日本人が見てきた。そのことが余程重大ではないか。口ではうまいことを言ふけれど、この現実ではたかが知れてゐる、六十万のシベリア抑留者がさういふことを腹に入れて日本に帰って各地に散つて行つたのです。もしソ連がその六十万の人間をそのまま、日本に返してゐたら、日本人は共産国家の実態を知らないまゝに、かへって共産主義に靡いてゐたかも知からない。それは何とも言へないけれども少くともソ連の当初の意図は明らかに失敗したと思ふ。

いづれにせよソ連といふ国はさういふ見透しが出来ない、計算の出来ない国だと思ふのです。計算が出来ないといふことは人の気持がわからないといふことでせう。人の気持がわからなければ天下は動かない。さういふことを理解出来ないところに、ソ連といふ国の一番大きな弱点があると思はれてなりません。

シベリア抑留の体験を通しての感想ですが以上で話を終らせていただきます。

桑原暁一君のこと

元日特金属工業^(株)

常務取締役

加納 祐五

私はいま御紹介いたゞきましたやうに、小柳先生の御講義の中で数々の言葉を紹介されました桑原先生と同級で一緒に勉強いたしました。勿論同級とは言っても桑原先生は私の占有物ではないので、皆さんもかけがへのない大切な先生として思っいていらっしやるでせうが、私は同級生といふことで特に親愛の氣持が強い。それは私の私情かも知れませんがさういふ氣持を禁ずることが出来ないのです。

それで私が桑原君から——やはり親愛の情をこめて桑原君と呼ぶことを許していたゞきたい

のですが——桑原君から聞かせていたゞいた話、それを導きとして近頃感じてゐることを簡単に申し上げたいと思ひます。

私は近頃いろいろ防衛論を読んでゐますが、その中に次のやうな議論があつた。それは「世の中には軍備を増強しろといふことをいふ者が多いが、あの新宿の町を歩いてゐる若者の群れを見てみなさい、あれで一体戦争が出来るか」といふのです。

さあ、皆さんこれをどう思はれますか。同感なさるでせうか。私はさうは思ひません。彼らも国が存亡の危機に立つたら、必ずや戦場で戦つてくれるでせう。私はさう信じてゐます。さういふ信頼をもつことが出来なければ一体何を語ることが出来るのですか。

桑原君はかねがね次のやうなことを言つてをります。

「世の中にはあんちゃんとか、やくざといふ人だつて沢山ゐるのだ。だが戦場に立つたら彼らも立派に戦つて死ねるの



だ。それが煩惱即菩提といふことなのだよ。頓悟入信といふことなんだよ」

佛教の言葉でわかりにくいかも知れませんが、簡単に言へば、本当の信を得るといふことは、なにも勉強を沢山しななければならぬといふことではない。いろいろな欲望にまみれたやうな生活をしてゐても本当のいのちにつながることはすぐ出来るといふことです。頓悟入信の「頓」といふのは「にはかに」といふ意味です。そんなに暇をかけないで、たちまちに機縁にふれば信に入ることが出来る、さういふ意味です。桑原君はさういふやうに話してくれました。

先程の防衛論を言った人の本心を察してみると、実は戦ひたくなかったのは彼自身なのです。だがそのことを一口も言はないで、何の関係もない新宿の若者の話をして、だから国を守るといってもそれは無理だといふやうに話をもつてゆくのです。こんな侮辱がありますか、こんな傲慢な態度がありますか。

親鸞は「南都北嶺のゆゝしき学匠たち」といふことを言つてゐます。南都とは奈良、北嶺は比叡山、そんなところでは権勢を誇つた学者ぶつた僧たちが幅をきかせてゐた。親鸞は自分のいふことを信じてもらへないならば、南都北嶺のさういふ学者先生のところへいらっしやいと云つたのです。

私達と違ふのは新宿の若者ではないのです。それは我が身をかばひながら若者のせむにする

やうな学者ではないか。皆さんは新宿の若者と同じだと言へば怒りますか？ そんなことはあるまい。皆さんはその若者と違ったエリートでも何でもありません。同じ人間ですよ。皆さんといへば語弊があるかもしれない。われわれは皆さんなのです。もし違ふところがあるとするれば、このやうな集りに集り得て、国の命に触れる機縁にめぐまれてゐるといふこと、たゞそれだけです。彼らだってさういふ機縁があれば立派に入信してくれますよ。今すぐに。

では皆さんがこのやうな有難い機会にめぐまれたのは何故ですか。それはこのやうな合宿を営んでいたゞいた国文研の皆様のなみなみならぬ御努力の結果でせう。しかしさういふ力よりもっと深いものがある。それは何か。それは国の命といふことではないでせうか。

親鸞は「弟子一人持たず候」と言ひました。それは何故か。若し親鸞が自分のはからひで自分の説を唱へ、弟子を作ったのなら自分の弟子でせう。しかし親鸞が説いたのは決して自分の計らひではない。佛さまの御慈悲をうけたそのためなのだ。それならば自分には一人の弟子もゐるはずだ。親鸞はさう言ったのです。同じことですね。国文研も自分のためにやゝてゐるのではない。おそらく国の命といふものに促されてやゝてゐるにすぎないのです。それなら、極論すれば国文研なんかどうでもいい、国の命に触れる方が一人でも多くなればそれでいいです。

この信といふものは一度得ればなにもさう勉強を重ねなくてもいいのです。しかし一度得た

らあとはどうでもいいといふものではありません。信といふものはまた失はれやすいものであるのです。それを救ってくれるのはたゞ友達しかないので。皆さんはこの山でかういふ機会をもち、また友達をもつ機会に恵まれました。もうあと一日しかありませんが、本当にいい友達を得て山を降りられることを心から希望してご挨拶いたします。

お話したい二つのこと

高千穂商科大学教授

高木 尚一

時間が迫ってまゐりましたので簡単に二つのことについてお話しておきたいと思ひます。その一つはいま加納さんがお話になつた桑原先生のことです。おととひの青年研究発表の折に、小柳志乃夫さんが、桑原先生がいつも口ずさんでられた明治天皇の「いかならんことあるときもうつせみの人の心よ豊かならなむ」といふ御製のことについてお話になりました。その御製について桑原先生が言はれたお言葉、それをそのままお伝へしますと、「自分はこの明治天皇の御製一首に支へられ、導かれてきたのだ」といふお言葉でした。

桑原さんについての思ひ出はいっぱいございますが、アルバイトで寿司屋をやって見事失敗して、毎日毎日すっぱい飯を食ってゐたとか、さういふことを全然包みかくさず笑ひながら話してくれる人でした。それによく勉強されよく本を読んでをられました。それを自分の痛感の中で充分咀嚼して、独自の表現で述べる。それがまた実に示唆に富んだものでした。それが一つ。

もう一つどうしても話さずにゐられないのは、斎藤先生が若い戦士が旅立ってゆくのをダンチョネ節で涙ながらに見送ったとおっしゃいました。あのお話を聞きながら強く胸に蘇った一つの思ひ出です。

私は昭和二十年の初め頃には、産業報団会から派遣されて、さんざん爆撃され、殆んど機能を失つてゐた川崎航空機の明石工場といふところをりました。そこではもう飛行機を作る能力は殆んどないのです。飛行機の生産台数は一日平均一機ないし二機。そしてその近所に特攻



隊の人が泊りこんでゐるのですが、出来上った飛行機に乗ってそのまま突込んでゆくのです。もっともその間の事情は軍機になってをりましたからよくはわかりませんが、そのやうな状況でした。

ある日私の泊ってゐる宿屋に二、三人の特攻隊の若い将校が来て、それで泊めてくれといふ。宿の方では「うちはお米がないと泊められない」と言つたところ、実はここで出来た飛行機に乗ってそのまま突込んで行くのだといふことを言つたらしいのです。それで宿屋ではびびりして万難を排して泊めた。そしてその翌朝二、三人の戦士がわづかお手伝ひさん一人に送られて、飛行場の方にむかつて旅立って行つたのです。私は陰ながら見送つたのですが、その時はその事情を知らされてゐなかつたのでそのまま別れてしまつたのです。戦士たちは談笑しながら常に変らぬ態度で悠々と出かけて行つた。その人達が果してそのまま突込んで帰らなかつたのかは知りませんが、事情を知らされたあと、あの朝の出陣の場面を思ひおこすと本当に胸が迫るのです。かうして八月十五日に終戦を迎へたのですが、私はそのひとつひとつの光景を心に刻みながら、これから皆さんと一緒に話し合つて、そしてお国のために力をつくしてゆきたいと思つてをります。

■ 青年研究発表

教員生活における一つの体験

福岡県立福岡農業高校教諭

小 林 至



元軍使用の兜

只今ご紹介にあづかりました小林です。現在福岡県立福岡農業高校で教師をしてをります。私は、大学時代の昭和四十四年から三年間、毎年この合宿を経験して大学を卒業し、教職の道に進みました。私の専攻は体育ですが、最初のころは自分が経験したスポーツの喜びや苦しみを、授業を通し、あるひは陸上競技を通して生徒と共に経験し、また特に部活動に於ては何とか全国大会に出場させて、私が高校時代に感激したその総合開会式の感激を生徒にも味はせたいと思ひ、一生懸命部活動の指導に精を出してをりました。たゞそのやうな生活でしたので、自分自身を振り返ったり、物をじっくり考へたりする事が少なくなつてをりました。そして昭和五十四年に現在の高校に変はつたのですが、その時もう一度教師として自分自身を見つめ直し、自己研鑽をしたいと思ひ七年ぶりにその年の霧島合宿に参加したのです。

ところが私はその合宿で、大学時代には味はふ事の出来なかつた経験を致しました。それは、明日の夜も慰霊祭が行はれますが、その合宿での慰霊祭の時の体験です。私は御霊をお迎へするかがり火の薪組みや祭場作りをお手伝ひして、祭の時にかがり火の点火係になつたのですが、慰霊祭が厳粛に取り行はれ始めますと、私は大学時代にこの合宿と一緒に参加して共に学んだ今は亡き或る友達の事が偲ばれてきました。かがり火を点火し、目の前で舞ひ上る火の粉一つ一つに、日本の為に尊い生命を捧げられた全ての御霊と一緒に、今は亡き友の霊が強く感じられ、私に語りかけ、見守つてゐるやうな気がしたのであります。私は、私達の肉体は

滅びても魂は不滅であるといふ事が、亡き友を思ふ時本当に実感として迫ってきて、そのことをはっきり確信いたしました。自分は今、国の為に生命を捧げられた全ての御霊とのつながりの中に、生きてゐるのだといふことを強く実感し、感謝の念で一杯の合宿でありました。

さて、私は教員生活をして九年目になります。現在、テレビ、新聞で盛んに校内暴力などが報道されてをりますが、その渦中にある一つの体験をお話ししたいと思います。私の学校でも最近教師に対する暴力問題がおこったり、頭髮服装問題で生徒達が授業ボイコットをするやうな事件もありました。生徒間では、弱い者いじめが非常に広がって、弱い連中は体育館の隅っこや図書館、あるひは職員室の廊下に避難してゐるのです。そのやうな弱い連中は、教室にゐると弁当を食べられるとか、物を買ひにやらされるとか、金銭を強要されるとか、随分ひどい目にあはされるのです。しかもそれが日常茶飯事になってしまつて最近では善悪に対して無感覚な生徒が日に日に増えてきました。特定の生徒が問題であれば手のつけやうもありますが、学校全体がそんな雰囲気に含まれてゐるのです。

私は陸上競技部の顧問をしてをりますが、その部員の上野広光君といふ生徒が本年五月に退学いたしました。そのことについて少しお話ししたいと思います。上野君はねぎ専門の園芸農家の二人兄弟の長男として生まれ、三歳の時に農業機械に手を挟まれて右手首が先からありません。その事で小さい時からみんなにからかはれ、馬鹿にされて、小学校、中学校時代はぐれて



よく喧嘩をしたさうです。しかし、中学校の時に陸上部に入り短距離選手として目標ができ、自分の片手首がないハンディを克服して一生懸命練習に打ち込み、部活動の喜びや苦しみを経験して、少しは落着いて父の農業を継ぐ決心をして本校に入学してきたのです。もっとも入学してきた彼の印象は、だぶだぶズボンに片手をつっこんで、大変横柄な様子でしたが、接触していくと実に素直で礼儀正しい所を持った生徒でした。しかし、学校全体が荒れてゐるといふこともあって、人に馬鹿にされたくない一心でつっぱったり、喧嘩もするやうになりました。か

うして一年生の時に陸上部室で喫煙をしたり、あげくのはては授業中に早飯をしてゐる所を先生に注意されて頭をこづかれたのに対して、かっとして先生の衿首を掴むといふ事件をおこしてしまひました。その事が教師に対する暴力行為として職員会議では退学させるべきだといふ意見も出ました。しかし私は彼が陸上で励んでゐる姿は真剣で素直な所があり、誰も練習をしてゐない夏休み、一人で

黙々と走ってゐる姿や、トラックの草を取ってゐる姿を見、又手首を失つたハンディを考へた時、ぜひとも農業後継者として一人前になって卒業させるべきだと痛感して、担任の大音先生と一緒に強く訴へ、本来なら退学になる所を無期の家庭謹慎といふことで結着をみました。

その後いくらか落着いた彼は、二年生になり、ある先生から生徒会長の立候補を勧められたのですが、悪僧連中からも担がれ、結局生徒会長に選ばれました。私はこの機会を生かして人の上に立つ心構へについて話したり生活態度、服装言葉遣ひなどを注意して彼が、自分を押へ、良い方向に行くやう願つてをりました。そして三年生になつたときには、新入生を迎へて彼は生徒会長として校内で乱れてゐる頭髮服装問題に取り組みました。入学式の時には、新入生にむかつて父兄がをられる中で頭髮服装を正しくしようと訴へ、一年生に対する服装頭髮のチェックが行はれました。しかしなかなか効果はあがりません。上野君は再三の生徒会の呼びかけにもかかわらず、一年生が直して来ないのに生徒会長としてメンツがそこなはれたといつて大變腹立たしく思つてゐたやうです。そのころ彼は陸上部の練習に来るといつも、私に「年度の一年生は横着だ」とこぼしてゐましたが、彼は心のうっ積を陸上で汗に流す事によつて安らぎを得てゐるやうに思へました。だが、どうしても心のうっ積ははれなかつたのでせう。一年生に対する校歌応援歌の指導の時にそれが遂に爆発してしまつたのです。一年生全員を柔道場に入れ校歌の指導が行はれる中で彼は竹刀を持ち、やくざまがひの言葉を吐いて脅しをかけ

て指導したらしく、その事が行き過ぎた威圧行為として一年生の担任から抗議があり、生徒会長としてあるまじき態度だと指摘されたのです。彼と食堂で会った時、私は「君の最近の精神状態はおかしい。やけっぱちになってゐるやうな気がする」と言つて、もっと自重するやうに注意しましたが、彼からは弱々しい返事しか返ってきませんでした。そんなとき新入生歓迎遠足が行はれましたが、彼は違反した服装で登校し、指導部の先生に注意を受けたのです。ところがそれに対して「去年も私服の生徒がゐたのに注意しなかつたじゃないか」と烈しくくつてかかつたのです。このやうな彼の問題行動に対して、学校として本人・両親を交へた教育相談がなされ、強く自重するやうに勧告がありました。そして、その教育相談があつた翌日またも授業中に先生とトラブルを起こし、ごみ箱を放り投げたため、遂に職員会議に於て退学勧告処分が決定されたのです。その日に指導部の先生と担任の先生が自主退学を勧めに行きました。が、結論は出なかつたやうです。その早朝に彼の両親から私に電話があり、藁をも攬む気持ちでなんとかならないでせうかと言はれた事には、本当に心が裂かれるやうな思ひがしました。その日の午後、いよいよ決心して退学の挨拶御礼に来られた両親に対して私は申し訳ない気持ちで一杯でした。たゞ私にとって唯一の救ひは上野君がお世話になつた先生方に御礼を述べ、すがすがしい態度で学校を去つて行つた事でした。

彼は現在運送会社の配車係の仕事をしてをりますが、夏休みの初めの陸上の試合に、彼はわ

ざわざ会社から休みをもらって応援に来てくれました。ところがその時の彼の姿は実に生き生きとしてゐました。さうして彼は現在の心境を「学校で経験した事を大切にし、来春、一から出直して定時制でもいいから高校だけは卒業します」と明るく語ってくれました。私は彼が退学処分に対して何一つ愚痴もこぼさず来春、一から出直しますと語ってくれたすがすがしい姿に心打たれました。その時彼は今もなほ私を信じてくれてゐると思ひました。さう思ふと私と彼との間に今から本当のつき合ひが始まったやうな気が致しました。話の途中で今さらのやうに陸上競技を通して養はれた気骨と、その内面に隠された純情を感じました。今私は彼の今後を温かく見守り、相談相手として教師、生徒の関係を越えた一生のつき合ひをしていきたいと思つてをります。

明治天皇の御製に「教師」といふ御歌があります。拝誦してみます。

朝夕にまもり育つるをしへ子はうみの子のごとかなしかるらむ

「守り育つる」といふ言葉がありますが、その守るといふ言葉に私は親鳥が雛鳥を翼の中に身をもつてはぐくんである姿を思ひ浮べる事ができます。「守り育つる」といふ言葉の中に、さはやかな力のこもった感じが致します。その愛情の強さといふものが教育の本質のやうに感じられるのです。下の句に「生みの子のごとかなしかるらむ」とありますが、教師は教へ子が

自分が生んだ子供のやうに身にしみて可愛くてたまらないであらうと、教師の子供に対する愛情の切実さを思ひやられての、ありがたいお言葉を拝するのであります。

朝夕にまもり育つるをしへ子はうみの子のごとかなしかるらむ

私はこの御歌をくり返しくり返し味はひ、明治天皇が、その胸の中に描いてをられたさはやかで力のこもった教師の姿に少しでも近づくやう努力し、日々生徒の心に接していききたいと念願してをります。そして、同じ教師を目指してゐた今は亡き友の御霊も、私の至らない歩みを見守ってくれてゐるやうに思へるのです。

瀬上安正先生のお言葉

熊本市立花園小学校教諭

吉 永 美 子



元軍使用の鐙

只今、御紹介頂きました吉永でございます。現在、熊本市の小学校に勤務してをります。

私が学生時代この合宿に参加したのは、今年と同じ阿蘇で行なはれた時でした。先輩の熱心な勧めで参加しました私は、ここで知り会へた友達や、お会ひできた先生方とかけがへのない心の繋りを持つことができました。これを機縁に就職してからも、数回参加させてもらっています。

今日はこの合宿でお会ひできた瀬上安正先生に教へて頂いた事を中心にお話したいと思ひます。先生は、五高、東大を出られ、熊本県庁に林業を専門として勤務されてをられました。国民文化研究会の繋りの中で学ばれた方で、私達は学生時代から指導して頂いてをりました。

私が合宿に参加する度に、先生は、

「やあ、来てみましたね。頑張ってください。」

と、片手を上げ笑顔で声をかけて下さいました。私は先生にお会ひする度に心が軽くなった事を覚えてゐます。大学卒業前に先生から

「教育とは、年上の方が年下の人の世話をできるやうにすることですよ。」

と、聞いた事があります。その時は当たり前の事みたいに感じ、深い意味を考へることもありませんでした。しかし教職について六年経った今でも、そのやうな子供を育てることはできてゐませんし、勿論、自分自身を振り返ってもいかに困難な事かと強く感じ、いまさらのやうに先

生のお言葉がありがたく思はれます。

教職について四年間は、天草の小さな島の小学校で、純朴な子供達と優しい先生方に囲まれて無我夢中で、またそれほど苦勞する事もなく過ごしました。天草の小学校から現在の熊本市内の小学校へ転勤した私は、日頃、御無沙汰してをりました瀬上先生に住所変更の葉書を出したことがあります。それから一ヶ月位経って、先生とお会ひした時に、思ひがけなく

「やあ、元気でしたね。葉書では元気がないみたいだから心配してゐましたよ。」

と、言葉をかけて下さいました。合宿では何度もお会ひしてゐたのですが、挨拶をかはす程度で親しくお話した事はあまりなかった私は、一瞬とまどひを覚えましたが、私は先生がおっしゃった葉書といふのは住所変更の葉書の片端に書いた近況報告の文だとわかりましたが、何と書いてゐたのか内容までは覚えてゐませんでした。先生は書いた本人さへも忘れてゐるような文に心を留め、心配して下さつてゐたのです。私にはその事がとても有難く思へました。と同時に先生の御心の深さを知りました。新しい職場で先生方とも打ち解けて話せず、その上、一年生担任で毎日毎日気疲れしてゐた私の事を、二、三行の文で察して下さいました先生の御心に触れ、私は人を思ひやるといふことを初めて学んだやうな気がしました。日頃、接する事のない人の身を案ずる心といふものは、いつも心にかけておかなければ出でこないと思ひます。何気ない言葉の中に、いつもと変はらぬ笑顔に先生の暖かい気持が込められてゐます。私はそれ



までの緊張してゐた気持ちがほぐれ心が軽くなりました。わずかに、三行の文に人の生き方を感ずる心を持ってをられた先生の御心を思ひますと、先生にずっと見守って頂いてゐるやうな気がしました。

先生は、一昨年の九月、突然交通事故で亡くなられたのですが、その後も度々先生のことが思ひ出されてきます。それは先生のいつもと変はらぬ優しい笑顔です。先生は直接に自分の考へを押しつけられる方ではありませんでしたが、絶えず優しい眼差しでその人が今何を考へてゐるか心を込めて話を聞いて下さいました。奥様からお聞きした話ですが、先生は、学生の姪御さんが話しかけてくるのにも、一生懸命返事をなさってゐたといふことです。私達は短時間ならともかく、長時間になると、ついいい加減な返事をしがちです。相手が子供だからと言って、適当に受け答へしないで、一つ一つ丁寧に答へてをられた先生は本当に人の心を大切にしていた方だと思ひます。私は先生の御姿そのものに人との接し方を学んだやうな気が

します。それは言ひ換えると、いつも細やかな心遣ひを持って人に接する接し方と言つていいかもしれませぬ。

○

先程申しましたやうに、私は現在、小学校五年生を担任してゐます。私のクラスに古荘君といふ男の子がゐます。この子を受持つと決まつた時、同僚の先生から、

「ベテランの先生に代はつてもらつたら。」

と、すすめられました。といふのは、彼は自分勝手に集団のきまりが守れず、休み時間になると、下級生に悪戯をしてまはるので、全校の児童から注目されてゐるような子供だったからです。私も最初担任としてやつていけないのではないかと不安もありました。しかし愛情を持つて一生懸命接すれば良くなるのではないか、自分の手でどうにかしてやりたいと思ふ気持ちでそのまま受持つことにしました。古荘君は塾通ひもして厳しく育てられたと聞いてをりましたが、彼の御両親は共働きで十分に面倒をみてをられない様子でした。前の担任からもよく叱られてゐるのを見てゐましたので、愛情不足ではないかと思ひ、長所に目を向けて見守つていかうと思ひました。友達とも離れて一人で遊んでゐましたから、クラスの子供達にも、

「古荘君の良い所を見つけて遊んでね。」

と話かけました。四月当初は彼も温和しくあまり目立った行動もせず、他の先生方からも、

「五年生になって落着いてきたね。」

と声をかけられるやうになりました。私はこれならどうにかなると安心しました。五月になつてすぐ、彼の家の家庭訪問の日、私は朝から、五年生になつて良くなつた事を話さうと心が弾んでゐました。その矢先、下級生の見えてゐる前で通路に放尿をしたと聞かされました。彼に理由を尋ねてもただニヤニヤしてゐるだけです。私は彼がどうしてこんな事をしたのか理解できませんでした。そんな事があつて彼の一举一動が急に気になり出しました。授業中、机の周囲に道具を散らかしてうろろしたり、休み時間にいつもつくつく一人の男の子を苛めたり……今までなるだけ賞めようとしてゐた気持も次第に薄れ、私は

「人の迷惑になる事は止めなさい。」

と注意することが多くなりました。その度に

「ぼくしてゐないよ。」

とすまして答へ、ますます気持がわからなくなりました。毎日毎日同じ事の繰り返しの中で、私は自分の無力さを感じ始めました。勿論、古荘君一人が私の心を煩はしてゐた訳ではありません。車の中からお金を盗んでゐた子供の居た事、何度注意しても質の悪い悪戯を止めない子供のある事、そのやうな事の一つ一つを思ひ起こす度に私の心は暗くなる一方だったので。

子供達は、毎日どんな気持で私の話を聞いてゐたのだらうか。私の話はただ子供達の耳を素

通りしてゐただけだったのだらうかと考へた時、私は子供達とどう接していいのか分からなくなり教育に対して自信を持たなくなりました。そして気持の晴れぬまま学校へ通つてゐました。「このままではいけない。」と思ひ悩んでゐる時、私は子供の非ばかりを責めてゐた自分に気づきました。既に反省してゐる子供の心の中を思ひやることもなく、外に現はれた結果だけを見て叱つてゐた事だけが気になり出しました。子供の気持も考へず自分の気持だけを押しつけてゐただけが思ひ出されてきます。どうしたら子供の姿をありのまま受入れられる教師になれるのだらうか。子供の心の中まで思ひやる事のできる教師になれるのだらうかと考へてゐる内に、ふと私は瀬上先生の事が思ひ出されてきました。思ひ出を辿っていくと、いつもと変はらぬ笑顔で、私の心の中に、

「伸び伸びとやりなさい。大らかな気持で子供とつきあひなさい。」
と語りかけて下さるやうな気がしました。私は、先生の暖かい笑顔を思ひ出し、先生に見守られてゐるやうな安心感を覚えめました。先生の深い御心の中にすっぽりと包み込まれてゐるやうな気がして自分自身の心が広々としてきました。自分だけの気持でがんじがらめになつてゐた私は、視野が開け、もう一つ先へ進めるやうな気がしました。先生に見守られてゐるといふ安心感からか、私自身今までより、じっくりと落着いて子供達の姿を見る事ができるやうになりました。帰りの会などでも、

「君達が悪い事をする、お母さん達はどんな気持ちになると思ひますか。お母さんが悲しむやうな事はしてはいけませんよ。」

と、周囲の人の心を考へた言葉遣ひに目を向けることができるやうになりました。こんな具合に、子供達と接していきますと、授業中、古荘君がノートを取ってゐる姿が見え、給食の時、牛乳当番の友達を手伝ってゐる姿が見えてきました。そんな彼に、

「よく頑張ってるね。」

と、声をかけると、恥づかしそうな顔が返ってきました。私は初めて彼の心をかいま見た気がしました。一人一人の心に近づくといふことは、子供の姿を虚心に見つめることから始まるやうな気がします。私はまだ古荘君や他の子供達の心に十分語りかけてゐるとはいへません。しかし、今、私と子供達との長い道は始まったと思ひます。

「教育とは、年上の人が年下の人の世話をできる子に育てることだよ。」

と、おっしゃった先生の御言葉が、今改めて思ひ出されてきます。人の心に思ひをはせることができるやうな子供を育てる事は、本当に難しいことです。けれどもそれに一歩でも近づいて行けるやうに、先生の御心を偲びながら、私自身の心を養っていききたいと思ひます。

先人の心にふれる道

日本興業銀行資金部

小柳 志乃夫



志賀島蒙古塚より西を望む（元軍の水路）

唯今、ご紹介戴きました小柳です。

学生時代、毎年この合宿教室に参加させていたゞきましたが、この合宿を通して私が学んだことは数多くございます。歴史の問題、国家の問題、或いは友情の問題など様々なことを教はり、自分でも書物を繙いて学んでまゐりました。しかし、この合宿教室で学んだ最も大切なことは、さうした国家の問題等に関する種々の知識ではなく、それらの問題に対して、どれだけ自分自身の心を働かせて行けるかといふ点にあったと思ひます。この心を働かせるといふことについて私自身考へてまゐつたことを述べたいと思ひます。

私が大学に入学致しましたのは、昭和四十九年でした。当時は、すでに学園紛争も一段落してをりまして、学内は平穩無事そのものでありました。しかし私が大学に入りまして最初に感じましたのは、クラスの中で左右を見回しても本当に澆刺として生きてゐる学生が少ないといふことでした。確かに頭のいい学生はゐましたけれども、魅力のある学生は少ない。また、講義についても耳新しい内容の講義はありましたが、自分に迫まってくるやうな講義は聞けませんでした。さういふ満ち足りぬ思ひを持ちつゝも、次第にその空気の中で流されて毎日を送つてをりました。

当時の私の学生生活を思ひ返しますと「口さきの深さくらべ」といふ言葉が思ひ出されまゐります。この言葉は、江戸時代の国学者、鹿持雅澄かもちまさずみといふ人の言葉です。雅澄は、『万葉集古義』

といふ書物を遺してをりますが、その書物の中で当時の歌壇の主流をなしてをりました古今集を「口さきの深さくらべ」といふ言葉で批判してをります。「口さきの深さくらべ」とは、心の思ひの深さ、感動の深さではありません。気の利いた奇抜な新しい表現をしようといふ姿勢であります。

ひるがへって私の入学した頃の事を思ひ返しますと、友人との話にしても、講義の内容についても「口先の深さくらべ」といふところに終始してゐたやうに思はれるのです。確かに学園紛争当時のやうなイデオロギッシュな議論は影をひそめた。しかし、「口さきの深さくらべ」といふ、いはば知的なお遊びの中で、学問の問題も人生の問題も真剣に考へ直されることなしに流されていったやうに思ひます。

ところが、この合宿教室に参加致しましてさういふ「口さきの深さくらべ」とは全然違ふ世界を私は感じました。合宿の班別討論ではさういふ口先での巧みな発言は厳しく問ひつめられる。本当に思つてゐることを正直に述べようといふ。「思ひやりを大切にする」とか「友情を大切にする」といふけれども、今日の前に苦しんでゐる友人のことをどう思ふのかといふことをつきつめて話し合ふわけです。さうすると自分自身が、それまで立ってゐた地盤が揺らぐやうな思ひに何度もなりました。国の事も友人の事も如何に自分が良い加減に考へてゐたか、さう思はれてきてならない。そしてさういふ苦しみを心開いて語る時に、また友人は真剣に聞い



てくれる。それは非常に有難いことでした。その中で合宿教室における友達との付き合いは深まってまゐりましたし、口先の深さくらべといった知的な世界では、到底味はひ得ない友情の喜びを感じてまゐりました。

さうした心を傾ける、心を働かせる努力は友達との付き合いには限らず、先人の文章を読む時にも心を働かせて先人の思ひに迫まってゆくといふことを私は教はってまゐりました。

今、大学の歴史学においては、歴史上の一人の人物の生き様に目を向けることはほとんどありません。それよりも歴史理論や歴史観の話がまづとりあげられ、その大枠の中で一人一人の先人の生き方は抽象化された姿で処理されてしまつてゐると思ひます。私が受けました授業を例にとりますと、幕末の志士吉田松陰について「松陰においてナショナルな観念が成長したが、これは近代の特徴的観念である。しかし、一

方で松陰の忠誠に対する観念は非合理的な観念であり、その松陰の限界は高杉晋作の政治的リアリズムによって乗り越えられた」などと話される。それが全く間違つてゐるとは申しませんが、そんな抽象的な規定の中では、松陰の生き方も晋作の生き方も、また幕末維新の歴史も蘇っては来ません。

私は大学時代、この合宿を通して知り合った友人と吉田松陰の書物を読んでまゐりましたけれども、松陰の人生はさうした概念規定の中に閉ぢこめることはできない、もっと激しく揺れ動いた人生であります。わづか三十年といふ短い人生でありますけれども、国を憂ひ、友を思ひ、また家庭を思ひ、さうした様々な思ひの中に必死で生きぬいた人生であります。そしてその松陰が安政の大獄で処刑された時に、高杉晋作はその書簡の中に次のやうに記してゐます。

「承候處、我師松陰之首、遂に幕吏之手にかけ候之由、防長恥辱口外仕候も汗顔之至に御座候、實に私共も師弟之交を結び候程之事故仇を報い候らばでは安心不^レ仕候、然處有^レ父有^レ君、吾身如^ニ吾身^一而非^ニ吾身^一候故、自然致方無^ニ御座^一唯日夜慕^ニ我師之影^一激歎仕耳に御座候、……明十七日は吾師初命日故、松下塾へ玄端と相會、吾師の文章なりとも讀候らはんと約候……」

「日夜、我が師の影を慕い激歎つかまつるのみにござ候」といふ強い言葉に、高杉晋作の激しい悲しみの姿が偲ばれます。この悲痛な思ひを抜きにして幕末の回天の原動力と言ふものは

語れないと思ふのです。生きてゐるものが亡くなった先生、亡くなった同志のことを思ひ、その志を継いでゆく中で明治維新といふ大事業がなされたのではないか。それを先ほど申し上げたやうに「松陰の非合理的な忠誠観念の限界は、晋作の政治的リアリズムによって乗り越えられた」といふやうな抽象化された姿で処理してしまふのは納得できない。抽象化が全く不要とは思いませんが、その中でさういふ先人の生き様が見過されてしまふのはどうしてもをかしいと思ふのです。

ただ、私達自身をふりかへりますと、私達は松陰や晋作のやうな先人を通して人生の悲痛といふものを知るのですが、身近な体験としてそれを感じることはなかなか難しいやうにも思ひます。この場で大変プライベートな話で恐縮ですが、私が大学を卒業する頃、いなかから私の母がくれた手紙の話を少しさせていただきたいと思ひます。私は三人兄弟の末っ子に当りまして、その末っ子の就職が決まったといふことで母もほっとしたのだと思ひます。その手紙の最初には、母が幼い頃体が弱かったらしく、母の祖母が、この孫を五十年生かしてくれと祈つてゐたといふ話がかかれてありました。そしてその後「私も五十二才になり、あなたの就職も決まってあとの余分の時間をどう生きてゆけばよいか、この頃頭の中をぐるぐる廻つてゐます。私に出来ることはやはり家の人の為に少しでも役に立つ事しかないやうですね」といふやうに書かれてありました。この手紙を読んで私は母の思ひがまざまざと感じられてきました。

母の人生といふものが、どれほど子供を育ててゆくことに傾けられてきたか、その子供が無事に世に立つのを見てどれほど母が安心したか、それと同時にこれからの人生に対して心乱れる思ひがするといふ。母にとって人生とは子供を育てることそのものであったといふ感が非常に強くしてまゐつたのです。

これは、私にとっては大変身近に人生の悲痛といふものが感じられた体験であり、これを通して歴史といふものが更に身近に感じられてまゐりました。私達の父母は無量の思ひを私達に注いできた。その中で我々は生きてゐる。松陰と晋作についても全く同じやうに思はれるのです。松陰の晋作に対する思ひ、晋作の松陰に対する思ひ、さういふ様々な人々の深い思ひがずっと連つてきたのが日本の歴史ではないか。さういふ気持ちの本当にしみじみと湧いてまゐつたのです。このいのちのつながりを僕らは守りついでゆかねばならない、さう思ひます。

私はこの合宿に参加して先人や友人の心にふれる経験をしてまゐつたのですが、それでは合宿に参加した後、ずっと心が豊かに動き、先人の思ひに反応し、友の思ひをまざまざと感じてきたかといふとさうではありません。残念ではありますが、私達の心は、友達のことを本当に思ひやる時であれば、全然さういふ気持ちが動かない時もあります。先人の思ひといつてもピンと来ない時もある。やはり心が緊張したり緩んだりの繰り返しです。

私は銀行に入行して三年目になりますが、銀行といふところも忙しい職場で、帰宅するのが十一時過ぎになることもしばしばです。疲れて帰って来て、友達の手紙が来てゐても、さっと目を通しただけですぐ寝てしまふこともある。さうではなくてくたくたに疲れてゐても非常に嬉しくて真夜中に返事を書くこともあります。それが私の生活の現実なのです。

今日の輪読導入講義で桑原暁一先生の事がふれられました。先生のご友人の方に伺ったお話を、先生はご生前「ゆたかならなむ、ゆたかならなむ」とつぶやくやうに話してをられたと聞いたことがあります。この「ゆたかならなむ」といふお言葉は、次の明治天皇の御製のお言葉です。

心

いかならむことある時もうつせみの人の心よゆたかならなむ

どういふことが起る時にも今の世に生きてゐる人の心よ、ゆたかであってほしいものだなあと、いふ内容の、格調の高い御製であります。この「ゆたかならなむ」といふお言葉を、桑原先生は常日頃念じてをられたといふのです。私達の心は先程も申しましたやうにすぐ鈍くなつて人の思ひに感動できなくなる。だからこそ、桑原先生も「ゆたかならなむ」と念じてをられたのでせう。その念じてをられた先生の御姿が、私はこの上もなく大切な尊いものに思へてなり

ません。

今、私をりをります金融界は、国債の大量発行や国際化の波や金利自由化の動きなど様々な問題が起きてをり、まさに激動の時代を迎へようとしてをります。アメリカでは数千もの中小金融機関の経営が悪化し、その波が日本に押し寄せてくるかどうか注視されてゐる状況です。さういふ職場の中で、ともすれば忙しさに流されてしまふ私でありますけれども、桑原先生が念じてをられたやうに「ゆたかならなむ」と自らの心が本当に豊かに働くことを念じながら、私もまた生きてまゐりたいと思つてをります。

一年の歩み

早稲田大学政経学部三年

齋

藤

勝



関東地区合宿地・御嶽神社

昭和五十五年、雲仙での第二十五回合宿教室が閉会されてからの一年間、私達は内外に迫るさまざまな動きの中に、常に日本人としての自覚を問はれ続けて来た。そのことを具体的に振り返りながら翌昭和五十六年八月阿蘇における合宿教室に至るまでの経過の概要を記しておきたい。

昭和五十六年一月六日政府は閣議で二月七日を「北方領土の日」に決定した。此は一八五五年に結ばれた日露通商友好条約において、択捉島と得撫島の間に関境を設けた歴史的事実に立って、我が国固有の領土である北方四島の返還要求運動を盛り上げようといふ趣旨の下に設けられたものであった。これは単なる政治的な「キャンペーン」としてではなく、我々の父祖のいのちの刻みこまれた土地を理不尽にも略奪したソ連に対する国民的な憤りの表現として設定されたものであった。従って此の運動を真に意義有るものにするには、我々一人一人が、この祖国を守り伝へた祖先を偲び、常に日本人として自覚を新たにしなければならぬ。この北方領土問題に象徴されたやうに戦後三十六年、未だに我々は真の独立を勝ち得てゐるとは言へないのであって、日々衰弱の危機にさらされてゐる国民精神をいかにして蘇らせるべきか、日本はいまその重大な課題に直面してゐるのである。

一方、祖国日本を取り巻く国際情勢も又様々な局面を迎へた。

昭和五十五年の七月初め、食肉値上げに端を発したポーランド各地の労働者のストライキ

は、工業都市グダニスクにまで波及し、急速な勢いで拡大して行った。そしてグダニスクのゼネストを頂点とした労働者の団結によって遂に八月末、社会主義国としては画期的な「自主管理労組」や「スト権」が認められたのであった。かうしたポーランド国民の動きを我々は、単に、世界情勢の一変化として片付ける訳にはゆかない。ソ連といふ他国の強力な支配を受けつづけてきたポーランドにあって、ポーランド人自身が自らの手で、自国の運命を切り開いてゆかうと模索してゐる悲愴な姿を我々は瞬時も忘れてはなるまい。ポーランドの祖先が築いてきた歴史と言語に結ばれて、今、ポーランド自身が、真のポーランド人としての自覚に目覚めてゐるのである。

この他、世界情勢の動きとしては、アフガニスタン戦争の継続、イラン、イラク戦争の勃発、レーガン大統領の選出、四人組裁判を中心にした中共の変貌など数へきれないほどの重大事件が続発した。

かうして祖国日本は目まぐるしく激動する世界情勢の中に在って、内外共に多くの難題を抱へてゐるにもかゝらず、次代を担ふべき我々青年の間で祖先が歩んできた長い歴史伝統を顧み、そこにつらなる自らの生命を実感するといふやうな経験が一体どれ程積み重ねられてきたであらうか。抽象空虚の「個人」が絶対的価値を持ち、其の「個人」の物的幸福のみが追ひ求められる傾向が今の日本の青年たちの心に満ち満ちてゐるのではないか。かうして日本の大学

は、眞の生き甲斐とは何か、自己の生きる価値を何処に見い出したら良いのかといふ教育本来の問題から眼を背け、単なる将来の生活の保障としての専門的技術の修得の場になってしまつてゐる。我々は現在のかうした学風を根本から改革し、今こそ先人の残された言葉の中に先人のみずみずしい思ひを汲み取り、日本の歴史伝統のうちに己の生き方を見い出してゆく、さういふ世界を大学の中にうち立てなければならぬ。それが今の時代に生きる我々学生の厳肅な使命なのである。

○

昭和五十五年八月雲仙で行なはれた「第二十五回全国学生青年合宿教室」の幕が閉ぢられた後、私達はそのやうな学生としての使命に思ひをはせながら輪読会、短歌の会、寝食を共にする合宿等を繰り返す事によって、先人の言葉を学び自らの生き方を正して行つたのである。それは現実の自分を凝視し、自己との対決を迫られる修練の場であり、また、眞に生命の通ふ言葉に全身で触れる生きた学問の場であつた。かうした活動を通じ友等と共に学んで行く中で私達は学生生活を展開して行つたのである。

次の表は各地区ごとに営まれた合宿の記録である。

∧ 地方合宿 ∨

主催	年月日	場所	参加大学
福岡信和会	昭和55年 10月25日 ～ 26日	油山「椿荘」	福教大・九大・西南大・福大
福教大信和会	11月15日 ～ 16日	福岡県 「福岡教育センター」	福教大・九大
東京信和会	11月22日 ～ 24日	東京都御嶽山 「山香荘」	早大・中大・高千穂大・亜大・ 明星大・拓大
福岡信和会	11月22日 ～ 24日	東郷神社「養眞閣」	福教大・九大・西南大・福大・ 八幡大・九州共立大
熊大信和会	11月22日 ～ 24日	人吉市「観蓮寺」	熊大・熊商大・九州東海大・ 宮崎大
大阪信和会	11月22日 ～ 24日	琵琶湖・和邇濱	大谷大・立命館大・大阪市大
鹿児島信和会	11月29日 ～ 30日	鹿児島県薩南学会	鹿大・熊大
鹿児島信和会	12月25日 ～ 27日	鹿児島県始良郡 「加治木荘」	鹿大

春季合宿

かうした活動を通して私達は日々の研鑽を続け乍ら昭和五十六年を迎へたのである。
三月には全国の各大学で、これまで互ひに努めてきた学生が、福岡市の郊外の宮地嶽神社に集ひ、さらに研鑽を深めるべく春季合宿を営んだ。

早大積誠会	昭和56年 2月9日 ～ 10日	山梨県河口湖畔 「上奈旅館」	早大
西南大・福大信和会	2月12日 ～ 14日	福岡市「瑞穂寮」	西南大・福大
亜大日本文化研究会	2月17日 ～ 19日	「狭山青年の家」	亜大
女子信和会	3月6日 ～ 8日	熊本市「白ゆり会館」	鹿大・西南大・福教大・熊大 熊本短大・埼玉大・尚綱大・ 神戸学院女子大・九州女学院短 大・福岡女子大・大分芸術大
福岡信和会	5月9日 ～ 10日	篠栗町「明王院」	九大・西南大・福大

合宿参加者の内訳及び日程は左記の通りである。

△東日本▽ 亜大6・中央大2・早稲田1・高千穂商大1

△西日本▽ 大谷大1・愛媛大1・九大10・西南大2・福教大4・八幡大1・福岡大2・

△春季合宿日程▽

3月28日(土) 第三日	3月29日(日) 第四日
(起 床)	(起 床)
朝の集ひ・朝食	朝の集ひ・朝食
全 体 輪 読	全体意見発表
昼 食	昼 食
全 体 輪 読	北島先輩発表
長内俊平先生 御講義	夏合宿へ向けて の事務連絡及び 地区別話し合ひ
質 疑 応 答	閉 会 式
散 策	感想文執筆 和歌創作 解 散
夕食・入浴	
リーダー発表	
所感発表	
夜の集ひ	

	3月26日(木) 第一日		3月27日(金) 第二日	
	春季 合宿 日程 表	7:00		(起床)
8:00			朝の集ひ・朝食	
9:00			全体輪読	
10:00				
11:00				
12:00			昼食	
13:00				
14:00			全体輪読	
15:00				
16:00		開会式		
17:00		自己紹介		
18:00		学生発表(松井哲也)		
19:00		夕食・入浴	夕食・入浴	
20:00			全体輪読	
21:00				
22:00	全体討論			
23:00				
0:00	就寝			

熊大5・熊本商大1・宮崎大1・鹿大1

〈国民文化研究会〉 15名

総計54名

合宿は緊張した雰囲気の中で開会式、自己紹介、リーダー学生発表、全体討論と進んで行った。学生発表では、明治末から大正にかけての人心の頹廃を憂へられ、一高に「瑞穂会」を創立された沼波瓊音先生の「瑞穂会」趣意書、昭和の時代にあつて、高校国語教育に携はるかたはら、日本精神史の追求に生涯を捧げられた桑原暁一先生の「不退転の一路」また、聖徳太子研究の中に、日本人としての自覚と、進路を見出してゆかれた黒上正一郎先生の御歌などが引用され、祖国日本のために自らの身を挺して尽された先生方の御言葉に皆で迫って行った。桑原先生の「不退転の一路」に次の御言葉がある。

△僕は人々の魂の冷たく荒れてゐるのを憤り悲しむことはすまい。僕自身その一人なのだ。天地にみちてをるあたたかい日の光に背いて、理論を纏うた所が身体はぬくもりもせぬであらう。僕は自分の生き且つ死ぬる国土の歴史と周囲とに自分の生命の源泉を見出さなければならぬ。それが唯一の具体的の生き方である。この今速刻に実感せられる歓喜なくして何処に何を求めむとするのであるか。魂の安住の地を外に求めむとする眼をひるがへして内を凝視せよ。

自分の生命が芽ぐみはぐくまれた故郷の地に還って自己を周囲につながらしめよ。そこには共なるよろこびがあり、共に悩まねばならぬ悩みがある。そして涙は涙によってのみぬぐはれることが分らう。すべての苦悩はなくされるためにあるのではなくして共に苦悩せらるるためにあるのであり、その現実に従順するのが救ひのただ一つの道であると知らねばならぬ。▽
私達は此の御言葉の中に、現実に随順し其の具体的生活の中に唯一つの道を求めて行かれた先生の生き方を偲んで行ったのである。

合宿二日目は黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の輪読が行なはれた。

輪読箇所は本書六十四頁から七十頁迄である。維摩居士が「未だ煩惱結惑を離脱し盡さざる」大乘修行者に対して説いた教へ、「菩薩は客塵煩惱を斷除して大悲を起す。愛見の悲は則ち生死に於て疲厭の心有り。若し能く此を離るれば、疲厭有ること無し。」をめぐり、大陸諸師と太子がどう釈されたかを比較検討してゆく中で太子の生き方を偲んでいった。

大陸諸師がこの教へを、菩薩は一切の煩惱を断じて、衆生を救済するといふ教化的理論に解するにすぎないのに対して、聖徳太子は次のやうに釈されるのである。

「自行外化を憶して以て心を調伏すと雖も、若し自他の二境を存して修行せば、則ち修する所廣からずして、物とその苦楽を同じうすること能はず。所以に勧めて應に著を離るべしと明かすなり。」

ここにみる聖徳太子の御言葉は、一見、大陸積家の説と同じく見えるが、太子の「御表現の微妙の内容は又自ら概念的理解の領域を超出して、切実の信念體驗を暗示せさせ給ふのである」と黒上先生は記してをられる。「自他の二境を存」すとは、まさしく現実の私達の姿であり、また、それは他ならぬ太子御自身の痛感であつたらう。太子は、その深き痛感の底で、「物とその苦樂を同じうする」広やかな世界を念じてをられるのである。自らの一切の執着を捨て、他の苦しみを除くといふ教化的理論に安住するのではなく、人と苦しみやよろこびを共にする、広やかな世界に随順する祖先のみずみずしい力に満ちた生き方を思はしめられるのである。

我々はかうした桑原先生、聖徳太子、黒上先生の御言葉を合宿の全日程を通して味はって行つたのである。それは、ともすれば自己の世界に停滞しようとする自分の心との戦ひであつた。そして、その戦ひは、自らが友に卒直な思ひを打ち明け、友の言葉をよく聴かうと努めることとひとつのことであつたのである。

三日目の午後には『若き友らに語りかける言葉』と題して長内俊平先生に御講話頂いた。先生は聖徳太子の『共に是れ凡夫』といふ御言葉を引用され、

「『共に是れ凡夫』とはあなたも私も凡夫であるといふことでは決してない。それは、私ほど罪深く至らぬ者はないといふ痛感でせう。自分程、罪穢れの深い者はないと痛感した時、友

が「長内君嘆くな。僕も君と同じなんだよと打ちあけてくれる。その時、「あゝ、君も同じなのか」と涙が滂沱として流れる、その共感。それが、『共に是れ凡夫』といふ事でせう。」と話してゆかれた。そして、この自分ほど罪深い者はないといふ痛感から本当の学問が始まるのであり、いくら学んでも分らぬ「人生」への痛感から日本の国体は出発してゐると語られた。先生の一筋に道を求め、人生を歩んでこられた御経験からの御言葉は参加者一人一人の胸に深く刻み込まれたのであった。

かうして緊張した三泊四日間の合宿を終へたが、最後の閉会式で参加者全員で歌った国歌斉唱は皆の心が一つに統べられ力強い調べとなった。参加者一同爽快な心持ちで合宿を終へ、四月からの大学生活において、さらに、この学びの輪を広げてゆきたいといふ思ひを新たににして、各地に散って行ったのである。

春季女子合宿

一方この男子学生と併行して三月六日から八日迄の三日間、熊本市錦ヶ丘「白ゆり会館」に於て女子合宿が開かれた。合宿には雨降る中、二十六名の女子学生及び社会人が集ひ、御忙しい中五名の先生方も御参加下さった。

第一日目志賀建一郎先生が、「誰にも本当にはわからないことをわかりきったこととして、全く疑問を持たないでゐることが沢山ある」と話され、「進化論」の問題を採り上げられた。そして「進化論」に様々な批判を加へてをられる今西錦司博士の文章を紹介されながら、「生命あるものをひとつの理論でとらへることはできない。理論といふものさしを捨てて、生命の不思議に触れて、心動くところから出発するしかない。」と語られた。

第二日目小柳陽太郎先生は「皇后陛下の御歌」について語られ、皇后陛下の御歌の多くは、それに対応する天皇陛下の御歌を見出すことができ、同じ御気持で詠まれた御歌があることを御紹介された。そして「この和歌の中にたゞへられた心情こそ日本文化の伝統そのものであり、この日本の伝統を守り続けて来られたのが天皇家なのです。それは一口で言へば相手の身になって考へるといふ気持なのです。」と語られた。

又夜には北島照明先生に樋口一葉の『塵中日記』（明治二十六年十二月）について御講話頂いた。先生は『塵中日記』の文章に触れながら、無名の明治の一女子が、いかに祖国の運命に想ひを寄せ、また日清戦争等、様々な日本の抱へてゐる問題に対し、いかに敏感に反応していったかを紹介された。

三日目の短歌相互批評では島根から御参加下さった青砥宏一先生が参加者一人一人の歌に心をこめた批評をしていたゞき、表現をより適確にすべく御指導をして下さった。

○

四月に入ると早速私達の学問の場を広げるべく新入生に対する勧誘が始まった。学内に於ける古典の輪読会、小合宿、講演会（別記）が催され、祖国の歴史伝統と自らの人生のつながりの中に、生きることの奥深さと豊かさを味ふ真実の学問があることを訴へ続けて行ったのである。併し安楽な学園生活を謳歌してゐる大学の中に在って私達の呼びかけに耳を傾けてくれる学生は少なかつた。自分の学力、人生経験の不足から来てゐるのだらうかといふ焦燥感に囚はれる事も少なからずあったが、共に学ぶ友や先輩に励まされながら、一人でも多くの学友を誘ふべく私達の呼びかけは間断なく続けられて行ったのである。そして遂に八月、阿蘇の地に於て第二十六回全国学生青年合宿教室は開かれたのである。

∧講演会・学内研究発表会∨

主 催	熊大信和会
年 月 日	昭和56年 5月9日
場 所	熊大教養部A-11教室
講 師 ・ 演 題	山田輝彦先生（福教大教授） 「森鷗外その思想と文学」

九州大信和会	5月28日	九大教養部11番教室	坂口秀俊先生（小倉高校教諭） 「歴史に学ぶ」 小野吉宣先生（直方高校教諭） 「学問の出発点―未熟なる我に徹す」
西南大信和会	6月3日	西南大四号館102教室	滝沢寿一先生（西南大教授） 「文学する心」
福大信和会	6月11日	福大二号館215教室	講演テープを聞く会「小林秀雄― 「信じることと知ること」」
福教大信和会	6月11日	福教大共通講義室206教室	岡田武彦先生（九大名誉教授） 「日本的なものへの瞥見」
九州大信和会 （研究発表会）	6月17日	九大教養部11番教室	金子光彦（九大法四） 「青年と学問」 松井哲也（九大工四） 「考へるといふこと―ソクラテスの 生をめぐる」 笠普一郎（九大医五） 「歴史に学ぶ―古典に鼓動を聞く」
亜大日本文化研究会	6月23日	亜大二号館222教室	東中野修先生（亜大講師） 「根本から考へよう」

合宿教室のあらまし

九州大学工学部四年

松井哲也



合宿地・阿蘇プラザホテル

第二十六回全国学生青年合宿教室は、昭和五十六年八月七日より十一日迄の四泊五日間、阿蘇国立公園、阿蘇プラザホテル望蘇閣において開催された。世界一といふ広大なカルデラを為す阿蘇連山を間近に望む絶景の地である。合宿三日前、準備及び運営に当たる国文研会員数名並びに幹部学生三十余名が集合し、事前の合宿が営まれた。全国から集ひ来る学生達の姿を胸に、輪読や研究発表による研鑽が積まれた。合宿前日は準備が行はれた。ホテル正面に、「友よ！ と呼べば友は来たりぬ」と書かれた横断幕が掲げられ、明治天皇御製「さしのぼる朝日のごとくさはやかにもたまほしきはこころなりけり」を墨痕も鮮かに記されたのぼりも立てられた。夜、すべての作業を終へ、愈々翌日の合宿開始を待つばかりとなった。

八月七日、晴れ上った大空の下、各地から大きな荷物を担いだ学生達が、緊張した面持で次々とやってきた。参加者の内訳は次の通りであった。

（学生班 六十六大学）

東京大3、一橋大1、防衛大21、静岡大1、新潟大1、大阪教育大1、神戸大2、
和歌山大1、岡山大2、広島大3、島根大1、山口大3、福岡教育大10、九州大15、
佐賀大7、宮崎大4、長崎大8、熊本大23、鹿児島大13、大分大1、早稲田大14、
中央大5、亜細亜大19、日本大2、明治大2、国学院大2、学習院大1、明治学院大1、

青山学院大1、東京経済大2、高千穂商大7、明星大2、拓殖大1、跡見学園女子大1、多摩美術大2、女子美術大1、神奈川大1、静岡薬科大2、愛知学院大2、同志社大2、大谷大1、同志社女子大1、立命館大1、大阪デザイン学院1、大阪商大1、大阪経済大1、京都女子大1、神戸女学院女子短大1、広島女学院大1、徳山大1、八幡大1、西日本工業大1、福岡女子大1、西南学院大6、中村学園大4、福岡大5、第一薬科大2、筑紫女学園短大1、熊本商大2、熊本女子大3、熊本短大2、尚綱大1、別府大1、大分県立芸術短大1、佐賀女子短大1、長崎県立国際経済大1、
計二三四名（うち女子三六名）

（社会人・教員班）会社員、小・中・高教員など

計二六名

（招聘講師）二名

（大学教官有志協議会・国民文化研究会）八一名

（事務局）一〇名

総計 三五三名

参加者は、合宿申込書のアンケートを基に七名及至八名を単位とする班に編成され、事前合

宿参加学生及び国文研会員が班長となった。男子学生班は二十九箇班、女子学生班は五箇班、社会人班は五箇班に分けられた。更に数箇班を単位としてグループに分けられ、各グループ毎に数名の国文研会員が付いた。

以下、合宿教室の流れをやや詳しく記すが、各講師の講義内容については印象を記すに止めた。講義内容の詳細は、本書に掲載されてゐるので、そちらをお読み頂きたい。

第一日（八月七日）

△開会式▽

午後二時、愈々開会式である。期待と緊張が会場に漲る。熊本大学三年・五嶋和明君の力強い「開会宣言」により、合宿教室の幕は切って落された。参加者一同「国歌」を斉唱した後、「戦時平時を問はず、祖国日本の為に尊い命を捧げられたすべての祖先の御霊」に対し、一分間の黙祷を捧げた。

続いて主催者を代表して、国民文化研究会理事長・小田村寅二郎先生が「現在の大学の中には、頭脳の鍛練、身体の鍛練は見られるが、心の鍛練が欠落してゐる。大学教育の問題点です。大昔から、我々の祖先達が最も関心を集中して努力して来たのは、心を鍛へる学問だった



古川合宿運営委員長

のです。その心を鍛へる学問に、合宿を通して取り組んで欲しい。」と、合宿の主眼について話された。次いで参加学生を代表して、九州大学四年・松井哲也が、三井甲之先生の「友よ！と呼べば友は来たりぬ」といふ言葉を引き、「この言葉に湛へられた心と心の共感の喜びを、素直な心を共に交はし合ふ中で味はっていきませう。」と語り、開会式を終了した。

続いて、オリエンテーションに移り、日産自動車勤務・古川修運営委員長の挨拶が行はれた。古川運営委員長は、班構成、運営体制の紹介の後、御自身の合宿での体験を振り返られながら、「合宿で学んだ友が、私の人生にとって掛け替へのないものであると確信してゐます。先輩の一人として、是非この合宿で生涯の友を見つけて欲しいと思ふ。」と強く訴へられ、氏の親友であられ、又御病気の為合宿直前に運営委員長を交替された北島照明氏が合宿教室に思ひをせながら病床でよまれた歌「もろともに生き行く友の御情けをひとしほ強く思ふこのごろ」を紹介された。次いで、合宿全般に亘る注意事項が、福岡県立水

産高校教諭・占部賢志指揮班長より伝達された。この後、参加者一同各自の班室へ入り、自己紹介の後合宿参加の動機などについて語り合ひ、「日本への回帰第十六集」の輪読を行った。

△講義▽

夕食後、合宿導入講義として、福岡県立三池高校教諭・志賀建一郎先生が「現代青年の課題―私達の心に欠けてゐる祖国日本への思慕の情の回復を―」と題して話された。先生はまづ、我々の過ごして来た戦後が如何なる時代であったかについて、「高度経済成長を遂げた一方、国家の危機を感じる時はなく、『祖国日本』を実感する機縁はなかった。」と語られ、さうした中で「平和で自由な国日本」に何の疑ひももたない現代の風潮が蔓延した事にふれながら、「この風潮はきつい事をせずにする気楽さへの安住に過ぎない。『自由な』と言ふが、我々自身の精神は、果して自由闊達と言へるか。」と問題を提起された。そして、我々の思考は一見いかにも自由を謳歌してゐるやうに見えながら唯物論、進化論といった観念的空理に捉はれた状況にあるのではあるまいかときびしく批判された。

最後に、古事記冒頭の神々の生成の箇所を高らかに読み上げられ、「神々の御名の一つ一つに、自然の中で心を育んできた祖先の鋭敏な生命の息吹きが感じられる。」と述べられた。我々は朗々と読みすゝまれる先生の御声の中に、神々の御名に籠められた祖先の大らかで力強



い心情がまざまざと感じられるおもひであった。

△班別討論▽

講義に引続いて、班別討論に入った。班員一人一人の心持が問はれる研鑽の場である。日頃、知的訓練のみになづんでゐる為か、ともすれば相手の言葉を自分勝手に安易に理解したり、己れの知識を押し付けるが如き議論に終始しがちであるが、そこでは、自分の心情は棚上げされ、互ひの心が噛み合はない。やがて、語り難い空気が座に満ち、沈黙が訪れる。素直な心情をうちつけに語る友の言葉が打てば響く様に心に伝はるのは、その時である。人と語ることの難しさと、心を聞いて語る喜びを感じ、友の言葉を、真剣に聞かうと皆心がけ始める。ここから本当の討論が始まるのである。

討論は、この後も講義が終ったあとに毎回はれた。先生方の語られた言葉に迫らむとする努力が、疑

問や反論を呼び起こして、予定時間を超過する事も度々であった。

第二日（八月八日）

△講義▽

八時より、国際政治評論家・齋藤忠先生の御講義が始まった。今回初めて御登壇された先生は、「急変する国際情勢—祖国の明日を憶ふ—」と題され、豊富な御経験と深い洞察に基づいて、緊迫を深める現在の国際情勢と日本の置かれた立場、問題点を指摘してゆかれ、特に、ソ連の第三世界への進出、西欧・アジアへの軍事力の強化、NATOの対応について語られ、「日本は最早これ迄の如く国の守りを米国に依存出来ない。我々はいま自らの意志で祖国を守る決意を問はれてゐる。」と訴へられた。

そして先生は、人として生きる悲しみを抱きつつ国への深い思ひを湛へてゐた先人達の上を偲ばれ、「彼等の国に寄せる思慕の念は今も私達の生命に流れてゐる。」と述べられた。更に、「人間の真の幸福は、愛する者の為に安んじて死ぬる事ではなからうか。」と語られ、戦時中先生の教へ子の方々が戦地へ赴く際、別れに歌はれたといふ『ダンチョネ節』を壇上で沁み沁みと歌はれた。四十年前のおもひをいまありありとよみがへらせるやうな先生の歌声に我々は

深い感動に打たれ、思はず涙する者も少なくなかった。そして最後に、「今日の話は私の遺言です。」と結ばれ御講義を終へられた。私達は人生の厳粛な場面に直面せしめられた思ひでその御言葉をお聞きしたのであった。

△講話▽



津下正章先生

午後より講義に先立って、皇学館大学名誉教授・津下正章先生が大学教官有志協議会を代表して挨拶に立たれた。先生は、「齋藤先生の御話に、皆さんと同様私も涙を流しました。今、日本に一番欠けてゐるのは勇気といふ美德です。勇気は青年のシンボルでせう。一人一人が勇気を持って、日本を支へる力となって戴きたい。」と励ましの御言葉を述べられた。

△講義▽

続いて、福岡県立修猷館高校教諭・小

柳陽太郎先生が、「『和』の精神―日本の思想を貫くもの―」と題され、輪読導入講義を行はれた。先生は最初に、「輪読は、皆の心を輪の様に結び合はせ、一つの書物に取り組んで心の深さを鍛へ合ふ場です。」と輪読の意義を説かれた。次に、桑原暁一先生の文章を引きながら、聖徳太子の御精神を偲んでゆかれた。その中で、十七条憲法第十条の「我獨り得たりと雖も、衆に従ひて同じく舉^{おこな}へ」といふ御言葉について、「この御言葉は附和雷同せよといふ意味ではない。人は、我一人信じて進まねばならぬ時もあるでせう。唯その時、皆と共に進み得ぬ深い悲しみが感じられてゐなければ、傲慢な生き方となる。この御言葉には、さういふ生き方への、太子の生命的な反発が感じられる。」と深い洞察を述べられた。

更に、「真実とは、心と心が触れ合ふ、そのつながりの中にしかない。」と述べられ、太子が、そして歴代の天皇が心魂を傾けてこられた『和』の御精神について語ってゆかれた。

△輪 読▽

御講義を受けて、班別輪読に入った。輪読は本合宿の柱の一つであり、二度に亘って行はれた。それは、本の内容を知的に理解しようとするものではなく、言葉に籠められた思ひを、出来る限り自らの心に呼び醒まさうと共に努めるものである。友の発言により、思ひもよらぬ深い意味に気付かされる事も度々起こる。言葉のいのちが体感された時の喜びは、正しく真の学

問の喜びである。

今回は、黒上正一郎先生の御著書『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の第一編の初め部分を読んだ。内外に亘る国家の危機の渦中にお立ちになり、国の根基を据ゑるべく、御自身の御心の厳しい内省を続けられた太子の御言葉に、我々の心は、読む程に正されていくおもしろい。

△青年研究発表▽

最初に登壇された福岡県立福岡農業高校教諭・小林至氏は、教へ子が退学に処される際、何とか救はうとされたが叶はなかった経緯を語られた。しかし、退学後彼が、「一から出直します。」と爽やかに語ってくれた事で、「本当の付き合いがこれから始まるのだと感じた。」と力強く述べられた。そして、明治天皇御製

朝夕にまもり育つるをしへ子は生みの子のごとかなしかるらむ
を拝誦され、発表を終へられた。

続いて登壇された熊本市花園小学校教諭・吉永美子さんは、恩師瀬上安正先生を偲ばれ、先生へ宛てた葉書のわづか二、三行の言葉から、先生が細やかに気持ちを察せられたことを知り、「いつも細やかな気持ちを持って人と接することを教へられた。」と語られた。又、いたづ



地区別の語らひ

らを止めぬ教へ子の気持ちを掴みかね悩んでゐた折、瀬上先生の「のびのびとやりなさい」といふ言葉を思ひ出し、落ち着いて接せられる様になった事を語られ、「虚心に子供の心を見つめることから始めたい。」と決意を述べられた。

最後に、日本興業銀行勤務・小柳志乃夫氏が登壇され、「学園紛争後、学内は平穩になったが、そこで語られる言葉は生きたものではなく、『口先の深さ比べ』に過ぎぬものになってゐた。」と語られ、敏感に感じとる心の大切さを体験に即して語られた。そして、明治天皇御製

いかならむことあるときもうつせみの人の心よゆたかならなむ

を拝誦され、「私達の心は緊張したり弛緩したりするものですが、この御歌を心に留め、励んでゆきたい。」と述べて発表を終へられた。

8月9日(日) (第3日)	8月10日(月) (第4日)	8月11日(火) (第5日)
(起 床) 朝の集ひ食	(起 床) 朝の集ひ食	(起 床) 朝の集ひ食
(講義) 「歴史に学ぶ」 村松剛先生 (質疑応答)	(講義) 「長寝しつるかも」 小田村寅二郎先生 (質疑応答)	運営委員長所感発表
記念撮影	班別討論	全体感想自由発表
班別討論		合宿をかへりみて 長内俊平先生
昼食	昼食	班別懇談 第二回和歌創作 感想文執筆
「和歌導入講義」 宝辺正久先生	(講話)	閉会式 (昼食)
阿蘇中岳・ 草千里散策 和歌創作	班別討論	
	地区別懇談	
夕食 入浴 散歩	夕食 入浴 散歩	
(講義)「内に思ふこと あるものは、外に感じ 易し」 長澤一成君	「創作和歌批評」 山田輝彦先生	
慰霊祭	班別・和歌 相互批評	
班別懇談	夜の集ひ (就床)	
(就床)		

合宿教室のあらまし（松井）

第二十六回「合宿教室」日程表		8月7日(金) (第1日)	8月8日(土) (第2日)
	6:30		(起 床) 朝 集 ひ 朝 食
	8:00		(講義) 「急変する国際情勢」 齋藤忠先生 (質疑応答)
	9:00		
	10:00		
	11:00		班別討論
	12:00		昼 食
	1:00		(講義)「和の精神」 日本の思想を 貫くもの 小柳陽太郎先生
	2:00	開 会 式	
	3:00	運営委員長挨拶	
	4:00	班別自己紹介 班別輪読	班別輪読
	5:00		青年研究発表 (小林・吉永・小柳)
	6:00	夕 食 入 浴 散 歩	夕 食 入 浴 散 歩
	7:00		
8:00	(講義) 「現代青年の課題」 志賀建一郎先生		
9:00	班別討論	班別論読	
10:00	(就 床)	(就 床)	

第三日（八月九日）

△講義▽

合宿三日目の朝、御二人目の招聘講師、文芸評論家・村松剛先生の御講義が行はれた。演題は「歴史に学ぶ―明治維新と現代―」である。先生は、東西の文化への深い御見識と幅広い知識に基づかれ、まづ維新後の急激な西洋文化移入により物質文化への偏重を生じ、為に「人間がつくってきた独自の生き方の総体」としての文化を喪失してゐる現代日本の思潮を指摘された。又、一神教を基調とした西洋の歴史観について言及され、さらに「人生は一度しかない」と誰もが知ってゐる。人生と同じく、歴史も二度と繰り返されぬ掛替へのないものです。法則によつて分析し得るものではない。」と語られた。更に、日露戦争時の乃木大将の悲痛なる御心境を偲ばれ、又、東京裁判に於て戦勝国が敗戦国の歴史を裁いた傲慢性と戦後の思想混迷との関連を論じられて、「歴史に学ぶとは、過去を捨てることでも憎悪することでもない。掛替へのない過去を追体験することを抜きにしては考へられないのです。」と語られ、歴史に学ぶ姿勢について大切な御教示を示された。

最後に、「日本では、皇室が古くから国の精神的文化的中心であられた。だからこそ、明治

維新といふ大變動を乗り切ることが出来た。それがとても幸せだったと思ふ。」と結ばれた。

△短歌創作▽

短歌創作、相互批評も、この合宿の大きな柱である。参加者は、午後の阿蘇散策の後、短歌を提出することになってゐた。それに先立って、宝辺商店俵社長・宝辺正久先生による短歌導入講義が行はれた。先生はまづ、田安宗武の歌論、正岡子規の歌話を引用されて、「歌は、まづ心を素直にし、つくろはず、思ひのままを述べるものです。」と短歌を詠む際の基本的な心構へを述べられた。

次いで、万葉集の歌を読んでゆかれ、又、戦争で亡くなられた御二人の学徒兵の歌を紹介された。

吉田 房雄

大君の御楯となりていでてゆく我ならぬおもひを君にさゝげむ

松吉 正資

うつそみはよし砕くともはらからのなさけ忘れじ常世ゆくまで

先生は、「これらの歌には切実な思ひが託されてゐる。思ひを貫いた歌には、作者の統一した意志がおのづと立ち現はれるのです。」と述べられ、歌は単なる趣味のものとして捉へるべ



きものではないことを強調され、歌によって心と意志が統一されてゆく素晴らしさを語られて御講義を終へられた。

御講義後、直ちにバスで阿蘇山・草千里へと出発した。深い霧の為、雄大な阿蘇の姿が見えなかった事が惜しまれたが、友等は思ひ思ひに大自然の中での一時を過した。記念写真を撮ってゐる友、放牧の牛に目を見はる友、或は、早くも歌を詠まうと苦心してゐる友もゐた。

草千里にその後ホテルへ戻り、全員短歌を提出したのであった。

△古典講義▽

夜に入り、九州大学医学部五年・長澤一成先輩が「内に思ふことある者は、外に感じやすし」と題して、幕末の志士吉田松陰と勤王の僧黙霖の往復書簡を中心に講義をされた。互ひに相手の志に惹かれ、率直に意志を交し合ふ二人の姿が、先輩の力強い言葉を通して甦り、あた

かも目前に見るが如くであった。そして先輩は、「この二人の出会いひは、一人の人間が一人の人間の美しい志に打たれたといふ事であった。今の大学では、友の志に感じてつきあふ事がかに稀れになってゐるか、我々はこのやうな事態を一刻も放置すべきではない。と厳しく訴へられたが、正に我々自身が問はれてゐる大切な課題である。

△慰霊祭▽

続いて、慰霊祭に先立ち、国文研会員歯科医師・吉田哲太郎氏により慰霊祭の説明が行はれた。この後、一同は直ちに屋外へ出た。

心配された雨もあがってゐた。一同、祭壇に向つて整列。篝火が焚かれ、慰霊祭は厳かに始められた。御抜ひに代へて、国文研の長内俊平先生が、三井甲之先生の遺歌

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを

を二度朗詠され、戦時平時を問はず日本の国を守る為に尊い生命を捧げられたすべての祖先の御霊に対し黙祷を捧げ、降神の儀が行はれた。続いて、祭壇に神饌を捧げ、参加者一同を代表して高木尚一先生が祭文を奉上され、明治天皇御製を加納祐五先生が拝誦された。玉串奉奠の後、皆で「海ゆかば」を斉唱、最後に昇神の儀が行はれて慰霊祭は終わった。

後の全体感想自由発表の時、或る友が「慰霊祭が始まると共に、それ迄空を覆つてゐた雲に

切れ間が出来、星が美しく見えた。そして祭が終わると、又雲が垂籠めてゐた。御霊がお出でになり帰ってゆかれたと思った。」と語ってくれたが、祖先の御霊が我々を見守り導いて下さったのであらう。

次に慰霊祭に於て拜誦された御製並びに祭文を記して置く。

(明治天皇御製)

秋夕

思ふことありとはなしに大空のうちまもらるる秋の夕ぐれ

秋夕

国のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて

子

かなし子にかたりきかせよ国のため命すてにし親のいさをを

往事

おもはずも夜をふかしけり国のためたふれし人のものがたりして

鏡

国のためのちをすてしものふの魂や鏡にいまうつるらむ

神祇

わが国は神のすゑなり神まつる昔のてぶり忘るなよゆめ

水

ふく風もたえてふけゆくさ夜なかにただひとすじの水のおとする

落花

風たたぬ今年の春もさくらばな散るべきときと散りてゆくらむ

花

にはの面の木のもとごとにたちよりてひとりしづかに花をみるかな

（祭文）

阿蘇の山なみ、はろかにつらなるみどりの広野に、今宵昭和五十六年八月九日、われら第二十六回学生青年合宿教室参加者一同、みくのために尊きいのち捧げまして、とこしへに、みくにまもりますみおやたち、いくさびと、同胞、友らのみたまなごめのみ祭り仕へまつらむとす。今年も、国際情勢いよいよけはしく、みくにのゆくすゑただならぬありさまを、まさめにみきはめつつ、心かたぶけますらをの、みちきりひらかむとつとめはげまむ。

明治天皇、今上天皇の御製に、また聖徳太子のみ教へに、国民のゆくべき道のしをりを仰ぎ

つつ、いく年かけて学びきたりしわれらここに、むらぎもの心かたづけ、ますらをの心ふりおこしつつ、いく重にもとざされしまなびの道をきりひらかむと、講義の聴講、班別討論、はたまた和歌の創作と相互批評にかたときも休まず、つとめ来りて、合宿もはや半ばをすぐせり。思ふことうちつけに語りかはしつつ、みくにのことを共に憂ひ国民の道を正し、みくにの内なるあたとたかひゆく我らのゆくては、いかにけはしくとも、千早ぶる神のみまもりを祈りつつ、いまよりのち、まなびやに、はたまたつとめのはに、力を合せ、しきしまのみちいやつぎつぎにふみひらかむと、うけひまつることのよしを、いましみことたちきこしめしたまへ。

天にますみ祖のみ霊よ、願はくは我らのゆくてをまもらせ給へと、第二十六回学生青年合宿教室参加者一同に代り、高木尚一謹み敬ひ恐み恐みも白す。

第四日（八月十日）

△講義▽

四日目の朝、国民文化研究会理事長・小田村寅二郎先生が登壇された。演題は「長寝しつるかも―世界に誇るに足る日本民族再生の道は―」である。先生はまづ、古事記の神武天皇御東



松本唯一先生

征の際の言葉「長寝しつるかも」に籠められた、痛恨の悔悟と建国の志に向ひ再出発される意気軒昂たる御気魄について語られ、又、元寇の際、上下一体となり未曾有の国難を乗り切った雄渾の意力を偲ばれて、現代日本の思想的混迷と対比され、「祖国日本」を実感しえず、守らむとする意志を喪失した戦後日本は正に「長寝」と言ふべき状態にある。「長寝しつるかも」といふ言葉と共に目を覚まし、再生への道を求めようではないか。」と訴へられた。

続いて先生は、歴代天皇の御製を読んでゆかれた。我々も先生の御言葉と共に読み味だったのであったが、歴代の天皇が虫を詠まれた数々の御製に、『心の学問』の伝統が脈々と受け継がれてゐる事を実感し、又、日露戦役時の明治天皇の御製に、平和への深い御祈願と民の上を遍く思はれるみ姿が偲ばれ、深い感慨を覚えたのであった。

△講話▽

午後、国民文化研究会の前身、日本学生協会以来の同志であられる四人の先生方による講話をお聞きした。

最初に登壇された農林漁業金融公庫副総裁・小田村四郎先生は、『終戦の詔書』を中心に語られ、御詔勅の大御言葉に、国民を思はれる陛下の痛切な御心情と祖国護持の悲痛なる御意志を偲ばれ、現代日本人が今一度この御詔勅の御精神を拝察し、そこに帰趨すべき事を訴へられた。

続いて、亜細亜大学教授・宮脇昌三先生は、大東亜戦争時、御自身がシベリアに抑留された御体験を語られ、又、終戦直前ソ連が理不尽にも日ソ不可侵条約を無視して参戦した事、その後、数十万の日本人をシベリアに拉致し、多くの同胞が空しく命を落とした事を語ってゆかれた。

次に、元日特金属工業㈱常務取締役・加納祐五先生は、故桑原暁一先生の思ひ出を中心に語られ、その中で、現在の防衛論者が「新宿にたむろしてゐるやうな若者達に国が守れるか。」と揶揄してゐる事に対して、先生は、「桑原君は、『町のおんちゃん達でも何か事ある時はきつと立ち上がってくれると信じてゐるよ』と語ってゐました。皆さんと新宿の若者と何か変りが

ありますか。ありません。若しあるとすれば、私達は国のいのちに触れる機縁にめぐまれてゐるといふ事だけです。」と語りかけられた。そして、親鸞の『煩惱即菩提、頓悟入信』といふ言葉を紹介されたが、切々と語られる先生の言葉は、我々自身の心に潜む自己中心的な考へを、厳しく指摘され、又、それを乗り越え、人の心を深く信じてゆかうとされる先生の御姿勢に、皆深い感銘を受けたのであった。

最後に、高千穂商科大学教授・高木尚一先生は、戦時中或る飛行機工場で、思ひもよらず特攻隊員の出撃に出会はれた時の事を話された。常と変はらぬ態度で死地に赴かれた隊員達の姿を偲ばれる先生のお言葉は私達の胸に深くしみこむやうに感じられた。

四人の先生方の御講話の後、熊本大学名誉教授・松本唯一先生が御登壇された。先生は、五十三年の阿蘇合宿以来三年ぶりの御出講であられ、明治末期の御自身の学生時代の事を生き生きと語られた。そして、一高在学中、満洲旅行に参加されたところ、満洲の長春の地にて、全く思ひもかけず明治天皇御崩御の悲報をお聞きになられた事を語られ、その時の言葉に尽せぬ驚きと痛切な悲しみを我々に話して下さった。先生は九十歳といふ御高齢で、御体もご不自由な御様子であられたが、一心に語って下さるその御姿に、御崩御の折の先生の深い悲しみがまざまざと感じられるおもひであった。



和歌全体批評

△和歌全体批評▽

前日提出された和歌は、事務局の方を中心に徹夜の作業を経て、ガリ刷りの部厚い歌稿に纏められ、我々の手に渡された。

そして、夜、福岡教育大学教授・山田輝彦先生による「和歌全体批評」が行はれた。先生は、参加者の歌の中から約三十首余りの歌を取り上げられて、表現の不正確な点を、作者の思ひを懇切に偲べながら正してゆかれた。さうして添削された歌は、思ひが直かに伝はってくる歌となり、有の儘の心を正確に表現する事のすばらしさが感じられた。時に笑ひの渦巻く中、先生は話を進められたが、歌を読み味はふ事、心の姿勢が正される事を皆納得したのであった。更に先生は、「日本人は歌を詠む事によって心を深めてきた詩的民族です。しきしまの道に学び、自然や人の心の動きを感じとれる、敏感で大らかな心を培って欲しい。」

と語られ、最後に、大東亜戦争に於ける戦没学徒の歌を紹介され、また戦死された先生御自身の弟君の思ひ出を述べられて、国を守る為、戦場に出てゆかれた方の思ひによって平和は保たれてきた事を訴へられ、御話を終へられた。

この後、班別和歌相互批評に入り、班員一人一人の歌に心を寄せていった。微妙な表現の違ひから、心持を厳しく正されたり、或は、友の素直な思ひに、共感の和が広がっていったのであった。

△夜の集ひ▽

合宿も最後の夜を迎へ、皆、宴に集ひ合った。壇上に展開される歌や座興に、若者らしい爽やかな笑ひが会場に満ち溢れた。そして、「神洲不滅」「進めこの道」を共に力強く斉唱して散会した。

その後も、各班室では、尽せぬ思ひに夜遅くまで語らひが続けられ、最後の夜を惜しんだ。

第五日（八月十一日）

最終日の朝、まづ初めに、古川修運営委員長が所感を発表され、「齋藤先生の御講義に私も

涙しました。「自分の愛するものの為に命を捧げることは、悲しくも又美しい事である」と先生は御話になりましたが、人生に於て、最も大切な事を教へられたのではないでせうか。」と述べられて、「日常生活へ戻ると、この合宿での貴重な体験を忘れがちになるものですが、友との付き合ひの中で学び合ひ、この合宿で得たものを甦らせて貰ひたい。」と語られた。

△全体感想自由発表▽

引き続き、全体感想自由発表の時間に移った。約一時間半の間、過ごして来た四泊五日間の中で得た感動、或は、是非語っておきたい無量の思ひを、躍動する心のままに披攤していった。会場には緊張が漲り、次々と壇上に立つ友等の言葉に深い感動と共感の世界が広がったのであった。

△合宿をかへりみて▽

続いて、「合宿をかへりみて」と題し、長内俊平先生が壇上に立たれた。先生は、「僕等は一瞬一刻に心を尽して学び、国のいのちに触れる喜びを味はった。さうして刻んだ襞の深さが、合宿を随分長かったやうに感じさせるのです。」と語られ、「この合宿で得た『信』は揺れ動き、崩れやすいものですが、その『信』を支へてくれるのが友なのです。国を思ふとは、友と

生歌台年斉全国6回



長内俊平先生

の心からの友情を深めてゆくことです。皆さん、友と便りを交し合ひ、深い友情を育てて下さい。」と強く訴へられ、我々を励まして下さった。

この後、最後の班別懇談が行はれ、今は昔からの親友とさへ感じられる班友同士、感動や喜びを吐露し合った。そして、その思ひを、各々感想文に記し、和歌に詠んだ。愈々閉会の時が近づいた。

△閉 会 式▽

国歌斉唱の歌声が、一つに融け合ひ、力強く会場に響き渡った。次いで参加学生を代表し、早稲田大学三年・斎藤勝君が挨拶に立ち、「この合宿で互ひに素直な気持ちで語り合へた。この喜びを胸に、これからも共に学んで行かう。」と呼びかけた。続いて、主催者側を代表して、小田村寅二郎先生は、明治天皇御製「かしの実のひとつ心に萬民まもるがうれし芦原のく



別　　れ

に」を紹介され、「人々の心がひとつとなる充実感が国家生命の実感です。その実感、日本人の平常心を湛へ合ひ、心を鍛へる学問を続けて下さい。」と励まされた。次に、参加者一同、国文研の先生先輩方に対し感謝の言葉を述べ、全員で「神洲不滅」を斉唱した。最後に、防衛大学三年・豊留利久君の「閉会宣言」によって、四泊五日間の合宿全日程を終了したのである。

「また会はう」といふ言葉が飛び交ふ中、友等はホテルをあとにした。別れゆく友等の顔は、皆すがすがしく、友と真剣に付き合い共に学ばむとするよろこびと意志に満ち溢れてゐた。

合宿詠草



合宿地より阿蘇高岳を望む

△講義▽

福岡教育大 教 四年 大久保 薫

齋藤先生の御講義をお聞きして

師の君の静かに歌ひ給ひたるダンチヨネ節のしめやかに響く
戦ひに教へ子送り給ひたる師の御心を思へばかなし
師の君の遺言なりといふ御言葉の胸にせまりて涙あふるる

九州 大 工 四年 松 井 哲 也

歌はるる師の歌声の哀しさに亡き人々の思ひ偲ばる
うつそみのかなしき命のしみじみと偲ばれてきぬ師の歌声に

九州 大 大学院二年 亀 川 龍 彦

松本唯一先生の御講話を聴いて

御病におはすと聞きしに思ひがけず師の君の御名を聞き驚きぬ
もとせ三年前この地に聞きし師の君の愉快なる御話浮かびくるなり
付き添はれ登壇されし師の君は老いましにけり三年のうちにかくのごと立派な椅子は勿体無しと用意の椅子に手を合はせ給ふ
その椅子にすわりもされず一高はよき所なりきと語りはじめらる

次々に若き日のこと言の葉のあふるるがごとく語り給ひぬ

なつかしきその御姿は老いませど愉快なる御話はずゆ変はらざり

昼食をとり給はずで満州を旅するお金をたくはへられしとふ

旅先に明治の君の御崩御の悲しきしらせうけとられしと

御話を終へられ壇をおりるさに我らに向ひ合掌し給ふ

熊 本 大 理 四年 佐 藤 利 憲

天皇の崩御されしとふ知らせ受くと師は立ち上り語りたまひぬ

顔ゆがめ頭たれたまふ御姿を見れば心のたかなりてくる

九 州 大 医 五年 長 澤 一 成

加納祐五先生の故桑原先生のお言葉を語らるるを聞きて

「桑原君」と呼びかくるごと亡き友の御名呼びましし心かなしも

いく度も声つまらせつつ師の君は亡き友の言語ことばり給ひぬ

一度もまみえ得ざりし人なれどその人柄のひたに惚とろばゆ

△レクリエーション・憩ひのひととき▽

高千穂商大 商 一年 小 林 克 浩

霧深く阿蘇の山脈やまなみ見えずとも友と語れば心なごみぬ

福岡教育大 教 四年 那 須 三 元

雨やみて阿蘇の山より白雲の湧きあがることのぼりゆく見ゆ
山肌は青くしるけし白雲の流れゆくままだに現れて来ぬ

熊本大 医 六年 福 田 誠

さ緑の山膚の中クレヴァスも遠目にしるく現はれにけり
道の辺の草原の中をちこちに黄色く咲ける野の花美し

大 谷 大 文 四年 大 道 正 美

遠くより来りし友ととうきびをほほばりをれば甘きかほりす

△友との語らひ▽

勇氣もてぶつかり生きよと語られし先輩の言葉ありがたきかな
友どちの我を思ひて語りたる言葉ありがたく涙あふるる

亜細亜大 経 三年 石 川 誠 司
九州大 法 四年 金 子 光 彦

班別和歌相互批評にて

生まれてより初めて歌をつくるといふ友らの歌に苦心しのぼる
御国思ひ心つくして語られし大人の御言葉に友も泣きしか
思ふことなかなか言葉に出せぬがもどかしきかなと友の語るも
ひとつひとつの言葉に心よせゆきしひとときなつかしこの友どちと

九州 大法 一年 與島誠央

最後の班別討論の時

かくばかり惜しまるる別れは初めてと友は語りし涙ながらに
あふれくる涙をふるへる手でおほふ君のみ姿いとほしきかな
言葉つまりくちびるふるはす沈黙に君の思ひは伝はりて来ぬ

九州 大農 二年 関篤志

班別討論にて加納先生の我に対する暖かき言葉をききて

先生のやさしき御心身にしみて構へし心も素直になりけり
友達と思ふがままに語らへば腹の底から楽しさ湧きいづ

神戸学院女子短大 文芸 二年 堀口京子

残されし時を惜んで語りあふ、一期一会”の思ひかみしめ
“元気で”と言ひて去られし師の御姿を感謝の思ひで見守りにけり

熊本大工二年堺美智雄

わが思ひ心澄まして聞きたまふ友どち得しがただにうれしき

尚綱大文四年川田京子

友達と心ふれあふよろこびに時間を忘れ語りあかしぬ

△閉会式・別れ▽

日本大文理二年川合厚志

長内先生の「合宿をかへりみて」を聞きて

熱込めて語らるる大人の言の葉にただただ吾が身のはづかしくなる

国守るとは新しき友をつくることとのたまひしこと心に刻まむ

福岡農業高校教諭 小柳和孝

語らるる師のまなざしの輝きに命捧げし人の偲ばゆ

師の口をつきて流るる言の葉に熱きまことの思ひを偲ぶ

師の言葉の強き響きの流れたる集ひの庭べにまた来むと思ふ

我が友と集ひ学びしまごころを清流のごとくさらに伝へむ

○

九州大 大学院一年 弓立忠弘

閉会式をひかへ、ホテルより阿蘇五岳を臨みて

朝方ゆ降りたる雨もやうやくにあがりて雲の流れゆく見ゆ
まなかひに深き緑に包まるる阿蘇の裾野の広ごれるかな
よき風の吹きてをるらしカルデラの青田に映えて日の丸美し

熊本女子短大 社会 一年 山本京美

友どちと心うちとけ語り合ふ喜び初めて知りてうれしも

壇上に立ちて語れる友見れば合宿に來し喜びこみあぐるなり

熊本大 教 一年 山口泰介

別離する友達の顔をしかと見れば感きはまりて涙こみあぐ
いつまでも絶やさずおかむこの絆互ひに遠く別れ行くとも

△ 大学教官有志協議会・国民文化研究会▽

高千穂商大教授 高木尚一

山なみは雲にかくれて雨しげく今日合宿を終らむとする

友らはみな力にあふれ日本のいのちにつながる思ひを述べき

次々に壇に上りてはかりしれぬ言葉のいのちの深さを述べゆく
相会ふことかりそめならずもともに生きゆく機縁につながる身なれば
和合てふ深い思ひを共にすること有難し今の現うつつに

今年こそこのまごころを打ちつけに伝へゆきなむいのちかぎり
糸杉の並み立つ庭べ朝ゆけば草木物言ふ心地するなり

朝夕に見なれし青田みどり濃く蝉の声やまず風のまにまに

阿蘇の地を去らむとして

元日特金属工業 働常務

加納祐五

けふ発たたむ阿蘇の山なみ雲まきてかつはあらはれかつはかくらふ
いま山を下りむとするにそのまたき姿見せざればなほも恋しき
友どちと語る窓べにいくたびかのぞみみし山よさきくこそあれ

第一日

阿蘇辺商店代表取締役

宝辺正久

岩山も緑の山もうすがすみ阿蘇の五岳に真日てりわたる

うちつづく広き青田に風吹けばいづべ鳴くらむひぐらし聞こゆ

根子岳の息吹き雲のいつか消え夕かたまけて空すみまさる

さやかなるみ声も聞かず来ぬ友をさびしく思ふ山に向ひて

八代市役所助役

加藤敏治

病みたれば阿蘇の集ひにゆくこともかなはじと思ひ悶えをりしに
幸ひに熱さがれるをかしこみて友待つ集ひに急ぎ来りぬ
三人の幼き孫も見送るとしたひ来りぬ宿の門まで

さらばとて手振りて別れど我が影の見えずなるまでたたずみをりしか

福岡教育大教授

山田輝彦

友どちの山行きの時近づきて晴れそめにけり阿蘇の山辺は
カルデラの青田かこめる外輪の山の巒々ひだ薄日さす見ゆ
年ごとのつどひなれども見るごとにうらなつかしき阿蘇の山なみ

法政大学調査役

香川亮二

合宿終りて

四泊五日つゝがなく終へし喜びを胸にいだきて宿を立ちいでぬ
玄関に見送りましたまひし友の姿しぬびつゝゆくに雨足しげし
喘息の気味のありといふ友のからだすこやかなれとたゞに祈らる
八月に入りてこのかた阿蘇の地は雨多しとふ今日もまた降る

山並は雨にけぶりて根子岳も中岳も見えず去りゆく今日は
しかはあれど心ゆたけし力つくしつとめし日々を偲び思へば
こゝだ日かず耳に残りしかずかずのみことばかしこし生くる力と

農林漁業金融公庫副総裁

小田村 四 郎

緑なす稲田ひろがるそのはてに阿蘇の山なみうすかすみ見ゆ

静かなるこの山里に集ひ来し若き友らはけふさかりゆく

若人の雄叫ぶ声の次々にみくにのいぶき蘇りゆく

短かりし日数なれどもあひとともに学びし日々を忘れじと思ふ

もろともにみくにのいのちにつながらしよろこび忘れじあひわかるとも

県立佐賀商業高校教諭

末 次 祐 司

班員に別れをつけて

ありがたきえにしをうけて合宿の班員と語りしことのうれしき

はじめの班員にはあれどわが愛づる娘のごとくかなしかりけり

素直なる人なれかしと念じつつ別れのことばに胸内せまりぬ

㈱ファミリー常務取締役

松 吉 基 順

亡き兄の遺せしみ歌大阿蘇の集ひに聞きて涙こみあぐ

久々に兄の遺せしみ歌をば繰り返しよむありし日偲びて

ふるさとのみ歌なつかし亡き兄のこよなく愛でし瀬戸の浦への
ふるさとの瀬戸の浦べに亡き兄はいまは安らぎ眠りいますか

サンデン交通取締役

加藤善之

齋藤忠先生のお話をききつつ

身のうちに溢るる憂ひ八十路越えてなほ進り出づことばの端に
涙して御国を思ふ言の葉に明治の心うつくし偲びぬ

心打つ激しき講義を終へし師はしらべ静かに和歌詠みたまふ
名も知らぬ白き花よと詠みたまひき力あふるる御講義の後に

佐世保市交通局営業課長補佐

朝永清之

湯浴みして帰り来し班室へやに豆球のとぼりて友らはすでにいねをり
私の帰るときまちがてに豆球をとぼしていねしかこれらの友らは
合宿のつかれのゆゑかそれぞれに異なる姿勢すがたで寝つきをりけり
うすあかりにうつりし友らの寝姿をながめつつ友らの言葉しのびぬ
いまましがた語りし友らのみことばの一語一語がよみがへりくる
あひまみえわづか二日の友なれど寝姿ひたになつかしく思ほゆ

日産自動車(株)法規部・合宿運営委員長 古川修

北島君へ

合宿もはや三日目となりつつがなくすすみてゆくを君に告げたし
家にゐて合宿のこと案じけむ君の気持の思はるるかな
今朝からの雨も無事止み屋外で御霊祭りもただ今終りぬ
友皆と力をあはせあと二日力の限りつとめゆきなむ

歯科医院経営

吉田哲太郎

明治天皇御製についての小田村先生のお話をお聴きして

国民にあふるるばかりの愛情をそそぎたまへる大御心おほみこころ知りぬ

国民を思へる御心ひたひたと心にしみて涙あふれ来

くもりなく国民思ふすめろぎの御心知りぬわがみおやは

すめろぎの大御心にこたへんと生きしみおやらの姿浮び来

今日よりはみおやらの如ごとわれもまた大御心をしぬびゆきなむ

戸田建設技師

青山直幸

最後の夜、班別和歌相互批評の折にある友が心閉ざすを見て

顔を真赤に染めてもだしたる友の姿を見るはつらしも

なぜ君は心閉ざすやつらくあらばつらしと叫べばよかりしものを
くぐもれる心の内をやうやくに語り始めぬとぎれとぎれに
かかるほどに氣遣ひたまへる班員の心有難しと君は語れり
有難うと声をふるはせ語る君の姿を見れば心なごみぬ

福岡県立福岡農業高校教諭

小林 至

青年研究発表を終へ

一語一語心落ち着け胸内の思ひ静かに語りゆきけり
我が発表終はりてはつとする中に心配し給ひし父の思はる

鳥栖市役所勤務

西山 八郎

朝の集ひ

一夜明けて広場に出づれば雲晴れて緑の阿蘇の山肌しるけし
君が代”の調べにのりてしづしづとあがる御旗をじつと見つむる
国のためこの旗のもと身をくだき心尽くし、人の偲ばる

岡山県立新見北高機械科実習職員 砂川 芳毅

欠席せし友を思ひて

集合の時刻は間近にせまれども誘ひし友の名札は残れり

次々と集ひ来たれる友どちの中に我が友の顔をさがしぬ
最終の汽車にて来しとの一団の中にも友は居ぬがかなしき

日産自動車㈱

奈良崎 修 二

班員、三溝兄の感想を聞きて

これまでの己れのひたに恥づかしとふ兄の言葉にまことあふるる
師の君のさとりし時より始めよといふ御言葉胸に沁み入りしならむ
まことなる思ひ刻みて学問の道ふみゆけや友らと共に
我もまた心直ぐなる兄と共に学びゆきなむはげましあひて

熊本市藤園中学校教諭

北 島 照 明

みともらのあつきなさけに病室の暗きが中に一人涙す
合宿はわれらがいのちとことほのいのちのめざめはるかに祈る
もろともに信を共にしたすけあふつどひは御国の力なるらむ

あとがき

本書の中で小田村寅二郎氏の講義にも説明されてゐる通り、昨年は弘安の役、所謂元寇より算へて七百年といふ記念すべき年であつた。筑紫の海に攻め寄せた十余萬の蒙古勢は、神風によつて海底の藻屑と消えたとはいへ、あの国難を切りぬけることが出来たその原動力はいふまでもなく、朝廷と幕府が打つて一丸となつた強烈な国民の結束であつた。国民が心を一つにするといふことがどんなことなのか、それを未曾有の国家的な危機の中で痛切に体験し得たといふ意味で、元寇は日本の歴史において永久に記念すべき事件であつた。その元寇の七百年の記念日を、北方より犇々と迫る現代の蒙古勢——ソ連の脅威のたゞ中に迎へたことは意義深い。太平の世を謳歌し、一人一人が閉ざされたエゴイズムの世界の中で踟躇してゐる間に世界の荒波は容赦なく日本の岸边を洗つてゐる。日本はまさに危い。今にして次代を背負ふ青年の心にこの現実の姿を直視し、日本人として生きるよろこびを蘇らしめる力を回復しない限り、亡国の惨はいつの日か現実となつて現はれるであらう。かゝるおもひをこめて合宿教室は営まれた。心ある青年諸氏の一読を願つてやまない。

なほこの元寇七百年に因んで、本書のタイトル頁の写真はすべて元寇関係のものを収めた。

編者の意のあるところをお汲みいたゞけば幸である。(内数葉は朝日新聞社、元寇記念館、本佛寺、福岡市役所の御厚意によるものである)

○

本年の合宿教室は八月八日より四泊五日、霧島国立公園の霧島ホテルで行はれるが、講師には昨年にひきつゞき齋藤忠先生、作曲家黛敏郎先生、さらに伊勢神宮の文教部長として日本民族独自の宗教問題に深い洞察に満ちた評論を書きつゞけてをられる幡掛正浩先生の御登壇が決定してゐる。緑もゆる霧島の地に全国の友らの集ふ日を偲びつつ、編集の筆を擱く。

昭和五十七年三月

山田輝彦
小柳陽太郎

社団法人 国民文化研究会関係図書目録

A 先師・先輩の遺著

書名	著者・編者	発行年月日	版・頁数	頒価
聖徳太子の信仰思想と 日本文化創業 (増補再版本)	黒上 正一郎	四四・一〇・一五 (現在四版)	A 5判 三〇四頁	千一、八〇〇円 三〇〇円
憂国の光と影 ―田所広泰遺稿集―	小田村寅二郎編	四五・三・一〇	四六判 五三二頁	千一、八〇〇円 三〇〇円

B 国文研叢書 (新書判)

No.	書名	著者・編者	発行年月日	頁数	頒価
No. 1	古事記のいのち ―改訂版―	夜久 正雄	四一・三・二五 (原・版) 四八・一一・一一 (改訂版)	三二六頁	千七〇〇円 二〇〇円
No. 2	日本精神史鈔 ―親鸞と実朝の系譜―	桑原 暁一	四一・一一・二五	二七九頁	(品切)

No.11	No.10	No. 9	No. 8	No. 7	No. 6	No. 5	No. 4	No. 3
続 日本精神史鈔 — 花山院とその系譜 —	欧米名著邦訳 (明治) 集 — 文献資料集 —	歴史と人生観 — マルクス主義の超克 —	日本思想の系譜 — 文献資料集 (近代その二)	日本思想の系譜 — 文献資料集 (近代その一)	日本思想の系譜 — 文献資料集 (近世その二)	日本思想の系譜 — 文献資料集 (近世その一)	日本思想の系譜 — 文献資料集 (古代・中世)	弁証法批判の歴史
桑原 暁一	小田村寅二郎編	川井修治	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	高木尚一
四五・一二・二五	四五・三・二〇	四三・三・一五	四四・三・二五	四四・三・二五	四三・一〇・一	四三・二・一	四二・三・二五	四二・二・二五
三一〇頁	四八三頁	二八三頁	三八一頁	四〇三頁	四〇九頁	三一七頁	三〇九頁	二四一頁
(品切)	〒九〇〇円 三〇〇円	〒六〇〇円 三〇〇円	〒八〇〇円 三〇〇円	〒九〇〇円 三〇〇円	〒九〇〇円 三〇〇円	〒七〇〇円 三〇〇円	〒七〇〇円 三〇〇円	〒五〇〇円 三〇〇円

No.20	No.19	No.18	No.17	No.16	No.15	No.14	No.13	No.12
<p>続いのちささげて —戦中学徒・遺文遺詠抄—</p>	<p>いのちささげて —戦中学徒・遺文遺詠抄—</p>	<p>明治天皇御集研究</p>	<p>日本における マルクス主義批判論集</p>	<p>国史の地熱 —聖徳太子と楠氏の精神—</p>	<p>白村江の戦 —七世紀・東アジアの動乱—</p>	<p>ヨーロッパにおける マルクス主義批判論集</p>	<p>短歌のあゆみ —続「短歌のすすめ」—</p>	<p>短歌のすすめ—創作と鑑賞—</p>
<p>国民文化研究会編</p>	<p>国民文化研究会編</p>	<p>三井甲之著</p>	<p>戸田義雄編</p>	<p>桑原 暁一</p>	<p>夜久正雄</p>	<p>桑原 暁一編</p>	<p>山夜田輝正彦雄</p>	<p>山夜田輝正彦雄</p>
<p>五四・四・二〇</p>	<p>五三・二・一五</p>	<p>五二・二・一〇</p>	<p>五一・三・一〇</p>	<p>四九・一〇・二五</p>	<p>四九・一・一〇</p>	<p>四八・二・一〇</p>	<p>四六・一二・一</p>	<p>四六・四・一</p>
<p>四四〇頁</p>	<p>四五〇頁</p>	<p>三五四頁</p>	<p>三二〇頁</p>	<p>二九三頁</p>	<p>三二四頁</p>	<p>三三八頁</p>	<p>三一六頁</p>	<p>三〇九頁</p>
<p>〒九〇〇円 三〇〇円</p>	<p>〒九〇〇円 三〇〇円</p>	<p>〒七〇〇円 二五〇円</p>	<p>〒七〇〇円 三〇〇円</p>	<p>〒七〇〇円 三〇〇円</p>	<p>〒七〇〇円 三〇〇円</p>	<p>〒七〇〇円 三〇〇円</p>	<p>〒六〇〇円 三〇〇円</p>	<p>〒六〇〇円 三〇〇円</p>

C 「合宿教室」レポート

回数	2	2	2	3
開催地 (人員)	霧島 (九二名)	福岡 (二二七名)	岡山	佐賀 (七二名)
年	30	31	32	33
書名	混迷の時代に指標を求めて	民族自立のために	民族復興の根底を培うもの	民族の明日を求めて
主要講師	広田洋二・日下藤吾 夜久正雄	竹山道雄・高山岩男 浅野晃	木下彪・石村暢五郎 高木尚一	勝部真長・木下彪 森三十郎
版・頁数	A5判 八八頁	A5判 五三頁	新書判 一一三頁	新書判 二五〇頁
定価	〒一五〇〇円	(品切)	〒一〇〇〇円	〒二〇〇〇円

No.23	No. 22	No.21
戦後教育の中で	「とっちゃん」先生の 国語教室 —桑原暁一・遺稿から—	社会主義理論との戦い —山本勝市博士論文選集—
小柳陽太郎	国民文化研究会編	加納貞祐蔵
五六・一二・二〇	五六・一・二〇	五五・二・一
二九八頁	一七二頁	四〇七頁
〒七〇〇〇円	〒四八〇〇円	〒九〇〇〇円

12	11	10	9	8	7	6	5	4
霧島 (二二六名)	雲仙 (二四〇名)	別府・城島 (二二五名)	桜島 (二〇二名)	雲仙 (二〇二名)	阿蘇 (二一五名)	雲仙 (二〇八名)	雲仙 (二〇〇名)	阿蘇 (二六〇名)
43	42	41	40	39	38	37	36	35
日本への回帰 — 第三集 —	日本への回帰 — 第二集 —	日本への回帰 — 第一集 —	新しい学風を興すために — 第三集 —	新しい学風を興すために — 第二集 —	新しい学風を興すために — 第一集 —	続々 国民同胞感の探求	続 国民同胞感の探求	国民同胞感の探求
木内 信胤 房雄・山本 耕造	戸川 恆尚 信胤	岡内 信胤 潔・花見 達二	小林 秀雄 信胤 広田 洋二	竹下 道雄 信胤 木内 信胤	福田 恆一郎 信胤 木内 信胤	津下 正章 信胤 木内 信胤	木内 信胤 佐藤 慎一郎 花田 大五郎	花田 大五郎 野口 恒樹 中山 優
新書判 三〇七頁	新書判 三二〇頁	新書判 二九五頁	新書判 二九八頁	新書判 二九八頁	新書判 二四八頁	B6判 三二五頁	B6判 四三三頁	B6判 三六五頁
三〇〇円 二二〇円	(品切)	(品切)	三〇〇円 二二〇円	三〇〇円 二二〇円	(品切)	五〇〇円 二二〇円	(品切)	五〇〇円 二二〇円

21	20	19	18	17	16	15	14	13
(佐世保 三七二名)	(阿蘇 四三五名)	(霧島 五二八名)	(雲仙 四三三名)	(阿蘇 四〇二名)	(霧島 三〇二名)	(雲仙 四九一名)	(阿蘇 四〇三名)	(霧島 三五三名)
51	50	49	48	47	46	45	44	43
日本への回帰 —第十二集—	日本への回帰 —第十一集—	日本への回帰 —第十集—	日本への回帰 —第九集—	日本への回帰 —第八集—	日本への回帰 —第七集—	日本への回帰 —第六集—	日本への回帰 —第五集—	日本への回帰 —第四集—
木内 信胤・村松 剛	木内 信胤・福田 恆存	小林 秀雄・木内 信胤	木内 信胤・村松 剛	山本 信胤・胡 蘭成	木内 信胤・戸田 義雄	小林 秀雄・木内 信胤	岡下 道潔・木内 信胤	竹山 道雄・高谷 覺藏
新書判 二八五頁	新書判 三三四頁	新書判 三〇六頁	新書判 二九〇頁	新書判 二九八頁	新書判 三二二頁	新書判 二六五頁	新書判 二九五頁	新書判 三二四頁
(品切)	〒五〇〇円 二〇〇円	(品切)	(品切)	〒三〇〇円 二〇〇円	(品切)	(品切)	(品切)	〒三〇〇円 二〇〇円

25	24	23	22
雲 (四三一名) 仙	霧 (二六八名) 島	阿 (四四〇名) 蘇	雲 (三三二名) 仙
55	54	53	52
日本への回帰——第十六集——	日本への回帰——第十五集——	日本への回帰——第十四集——	日本への回帰——第十三集——
法眼 晋作・福田 恆存	木内 信胤・高山 岩男	小林 秀雄・木内 信胤	木内 信胤・衛藤 藩吉
新書判 三三二頁	新書判 三〇〇頁	新書判 三三八頁	新書判 三三四頁
〒五〇〇円 二五〇円	〒五〇〇円 二五〇円	〒五〇〇円 二五〇円	〒五〇〇円 二五〇円

(国民同胞感の探求三部作は「理想社」より刊行)

D その他

書	名	著者・発行者	版・頁数
歌よみに与ふる書・他四編		正岡子規 (国民文化研究会発行)	新書判 一二二頁
今上天皇御歌解説 (附)万葉集論		三井 甲之 (斑鳩会発行)	新書判 一五七頁
明治・大正・昭和 「謹選 詔勅集」		(斑鳩会発行)	新書判 八五頁
			頒 価
			〒二二五〇円 二〇〇円
			〒二四〇〇円 二〇〇円
			〒二二〇〇円 二〇〇円

式典曲「神州不滅」
行進曲「進めこのみち」

三井甲之
時井甲之
—日本学生協会の歌—
作詞
作曲

A 5
各 4 頁判

各一〇〇円
下各
一〇〇円

E 関係図書

書名	著者・発行者	版・頁数	定価
新輯 日本思想の系譜 (上・下) —文献資料集—	小田村寅二郎編 (時事通信社)	A 5 判 (上)八五七頁 (下)九一二頁	上・下各 三、〇〇〇円
日本思想の源流 —歴代天皇を中心に—	小田村 寅二郎 (日本教文社)	四六判 三〇五頁	一、二〇〇円
THE KOJIKIN THE LIFE OF JAPAN (国文研叢書 No.1.「古事記のこゝろ」の翻訳)	(訳者) G. W. ROBINSON [THE CENTRE FOR EAST ASIAN CULTU- RAL STUDIES]	B 6 判 二〇八頁	
歴代天皇の御歌 —初代から今上陛下まで二千首—	小田村 寅二郎 小柳 陽太郎 (日本教文社)	四六判 四三八頁	一、七〇〇円
歌人・今上天皇 (増補改訂)	夜久正雄 (日本教文社)	四六判 三四頁	一、五〇〇円

F 月 刊 誌

誌 名	創 刊 ・ 号 数	版 ・ 頁 数	定 価
月刊「国民同胞」 「国民同胞」合本 第一卷 第二卷 第三卷 第四卷 同 同 同	昭和三十六年十一月創刊 昭和五十七年三月現在 二四五号 第一号 第二号 第三号 第四号 第五号 第六号 第七号 第八号 第九号 第十号	B 5 八頁 各卷四〇〇頁	年間一、五〇〇円 共 二、〇〇〇円 (含送料) 各卷 二、〇〇〇円 一、残部僅少一
日本の感性 昭和史に刻むわれらが道統	戸 田 義 雄 (日本教文社) 小田村 寅一郎 (日本教文社)	四六判 三四六頁 四六判 三四四頁	一、二〇〇円 一、三〇〇円

——日本への回帰——

(第17集)

昭和五十七年三月二十日発行

定価 五〇〇円

〒 二五〇円

編者

大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

編集委員代表

小田村寅二郎

発行所

社団法人 国民文化研究会

東京都中央区銀座

七—一〇—一八柳瀬ビル

振替(東京) 六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替へいたします

